

16th Winter Deaflympics

SALT LAKE 2007



閉会式での日本選手団入場（岸田修氏撮影）

1-10 February 2007



Japan Paralympic Committee
Japanese Federation of the Deaf



●秋篠宮同妃両殿下ご接見●



栗野総監督による参加競技と謁見者紹介（宮内庁提供）



懇談（宮内庁提供）

●安倍内閣総理大臣 表敬訪問●



国旗に応援メッセージを書き入れる
安倍晋三内閣総理大臣（事務局撮影）



懇談（事務局撮影）



安倍晋三内閣総理大臣を囲んで（事務局撮影）

●開会式●



デフ・インスピレーション（岸田修氏撮影）



デフリンピック旗掲揚：（岸田修氏撮影）



聖火台への点火
（鈴木馨二氏撮影）



米国原住民のろう者による歓迎（岸田修氏撮影）



4500名の熱気に包まれる会場（岸田修氏撮影）



世界はひとつ（岸田修氏撮影）

●メダリストの活躍●

<原田 上選手>



パラレル大回転を制して
(岸田修氏撮影)



パラレル大回転のレース (岸田修氏撮影)



日本に1つ目の金メダルをもたらす (岸田修氏撮影)



パラレル回転での安定した滑り
(岸田修氏撮影)



笠井彰子選手とペア優勝を果たして (岸田修氏撮影)

●メダリストの活躍●

<笠井 彰子選手>



勝った！優勝だ！気持ちは最高！
(岸田修氏撮影)



パラレル回転をスピードで制す
(岸田修氏撮影)

<本多 忠選手>



日本に4個目のメダル (岸田修氏撮影)



ハーフパイプで決めたバックフリップラー
(岸田修氏撮影)

●アルペンスキー競技●



池田和明選手の回転（鈴木馨二氏撮影）



小池正人選手の大回転（鈴木馨二氏撮影）



水口拓也選手の回転（鈴木馨二氏撮影）

●スノーボードハーフパイプ競技●



鶴岡由佳選手（鈴木馨二氏撮影）



花島大輔選手（岸田修氏撮影）

●アルペンスノーボード競技●



高嶋弘貴選手の平行大回転（岸田修氏撮影）



原節子選手の平行大回転（岸田修氏撮影）



本木理恵選手の平行回転（岸田修氏撮影）



原伸一選手の平行回転（岸田修氏撮影）

●その他の競技●



アイスホッケー競技（岸田修氏撮影）



公開競技：カーリング競技（岸田修氏撮影）

● クロスカントリースキー競技 ●



3×10km リレーの田崎富士夫選手（岸田修氏撮影）



山本智美選手の 10km マススタート（岸田修氏撮影）



尾形裕基選手の 15km マススタート（岸田修氏撮影）



喜井寛選手の 1.3km 個人スプリント（岸田修氏撮影）



工藤敏博選手の 15km マススタート（岸田修氏撮影）



15km マススタートで競う田崎富士夫選手（左）と
尾形裕基選手（右）（岸田修氏撮影）

目 次

1. 第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～ の報告

- (1) 日本選手団参加報告（お礼） -----
- (2) 参加報告（団長） -----
- (3) 大会報告 -----
- (4) 日本選手団名簿 -----
- (5) 記録一覧 -----

2. 役員・選手報告

- (1) 選手団本部 -----
- (2) アルペンスキーチーム -----
- (3) アルペンスノーボードチーム -----
- (4) スノーボードハーフパイプチーム -----
- (3) クロスカントリースキーチーム -----

3. 資料

- (1) デフリンピック概要 -----
- (2) 日本選手団マニュアル -----
- (3) デフリンピック関連記事 -----

第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～

日本選手団参加報告について（お礼）

財団法人全日本ろうあ連盟理事長

第16回冬季デフリンピック派遣委員会委員長

安藤 豊喜

第16回冬季デフリンピックには17名の日本代表選手を米国・ソルトレークに派遣し、3個の金メダル、1個の銅メダルと冬季デフリンピックにおける過去最高の獲得メダル数を記録し成功裡に終わることができ、関係する皆さまにご報告申し上げることができますことを大きな喜びとしています。

デフリンピックは、全国民が関心を持ち注目するオリンピックの後に開催するパラリンピックと同様に、夏季、冬季ともに4年に1回開催されるろう者が自ら運営するろう者のための国際的な競技大会です。その歴史はパラリンピックより古く、今回の冬季デフリンピックで16回、夏季のデフリンピックは20回を数えております。残念ながらその知名度は開催回数の割にはパラリンピックに比べて低く、ほとんどの国民には知られていない存在でした。そのため、私たちはデフリンピックを国民に理解していただくために、最も効果が期待される新聞、テレビ等のマスコミ・メディアに対しデフリンピックの歴史、目的、競技種目を説明し、働きかけを精力的に行いました。お蔭様でマスコミ・メディアのデフリンピックへの関心が高まり、選手に関する記事が掲載されるようになりました。さらに、秋篠宮同妃両殿下と役員、選手代表のご接見、安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問が得られたことによって、マスコミ・メディアに取り上げられる頻度が高まり、それらの報道記事が日本代表としての自覚を持って競技に臨む選手の気持ちが高まることに繋がりました。特に安倍内閣総理大臣にサインしていただいた日の丸が振られた写真は印象的であり、多くの国民に大きな感動を与えました。

今回、ご支援を賜りました内閣府、厚生労働省、宮内庁、日本障害者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会、関係各団体、各企業、さらに監督・コーチ・スタッフ・手話通訳者を派遣いただいた各学校、各企業等、日本選手団を陰で支えていただいた関係各位には、心から感謝を申し上げます。私たちは、この経験、反省を活かして2年後の夏季デフリンピック（中華台北）、4年後の冬季デフリンピック（スロバキア）に向け、また国内の聴覚障害者スポーツ振興と国際競技大会参加への努力を続けてまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

第 16 回冬季デフリンピック ～ソルトレーク 2007～ 参加報告

第 16 回冬季デフリンピック日本選手団長

山根 昭治

(財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会委員長)

「障害者スポーツ支援基金」からの助成を受けて派遣されました日本選手団を代表して第 16 回冬季デフリンピックへの参加報告を申し上げます。

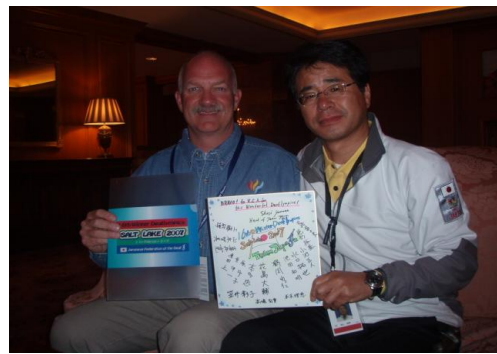
選手たちの大活躍により、前回のデフリンピック（スウェーデン）の倍となる 4 個のメダル（金 3 個、銅 1 個）を獲得することができました。4 回掲揚された日の丸を目にして、日本に生まれてきて良かったと我ながら大変感激しました。ここまでに至ったのは、選手本人たちの努力は勿論のこと、厳しく指導していただいた監督、コーチをはじめ、多くの方々の支えがなによりも大きかったと思います。メダルに届かなかった選手たちも自分の持てる力を発揮して、最後まであきらめずに頑張りました。総監督の総括報告にありますように、日本選手団の課題は一人ひとりの技術面、経験面での世界との差を自覚した上での全体的な競技力の底上げです。例えば、スノーボード競技では金メダルを獲得しましたが、続いて銀、銅メダルもとれるような選手層が求められます。次回のスロバキア大会まで、一般競技大会への積極的な参加を通して健聴者と競い合うことができるよう、技術面・精神面両方の向上を図るといった 4 年計画をたてることが必要と感じました。また、今回の日本選手のめざましい活躍ぶりから、デフリンピックの日本開催に対する大きな期待が寄せられています。デフリンピックの素晴らしさを多くの方々に伝えていくと共に、選手仲間を増やしながらメダルを取るんだというモチベーションを高めていってほしいと願っています。

私はデフリンピックに参加するのは今回が初めてで、しかもいきなりの団長でしたので選手と同じくプレッシャーを感じました。しかし、大舞台で飛躍する選手たちの姿に励まされ、勇気づけられる中でデフリンピックの素晴らしさを知り、貴重な体験をさせていただきました。17 名の選手の皆さん、本当にありがとう！

最後になりますが、今日まで選手を厳しく指導し励まして頂いた各競技監督の上野氏・安藤氏・金田氏・荒井氏、スタッフの高畑氏、鈴木氏、森野氏、山本氏、高崎氏、小林氏、金谷氏をはじめ、競技チームを取りまとめたくださった総監督の栗野氏、選手、役員の症状や負傷に適切な対応をいただいた明神医師と市田看護師、選手たちの素晴らしい戦いぶりを撮ってくださった岸田氏、宿泊・移動等の手配に尽力頂いたグロリアツーリストの林氏、てきぱきと通訳していただいた亀和田氏、伴内氏、豊島氏、高木氏、本当にお世話になりました。心から厚くお礼を申し上げます。



国際ろうスポーツ委員会アモンス会長と山根団長



ソルトレーク 2007 組織委員会ベネディクト委員長と山根団長

第 16 回冬季デフリンピック ～ソルトレーク 2007～ の報告

1 大会の概要報告

- 1 名 称 第 16 回冬季デフリンピック（通称：ソルトレークデフリンピック）
16th Winter Deaflympics
- 2 目 的 オリンピック精神に則り、聴覚障害者スポーツの発展と向上に寄与し、国際的な親善・
友好の精神を養うために、4 年に 1 回開催する。
- 3 主 催 国際ろうスポーツ委員会（International Committee of Sports for the Deaf）
略称：I C S D [1924 年設立]、加盟国 95 カ国）
- 4 主 管 2007 デフリンピック組織委員会（2007 Deaflympics Organizing Committee）
- 5 開催期間 2007 年 2 月 3 日（土）開会式（ハンツマンセンター ユタ州立大学）
～10 日（土）閉会式（ソルトプレイス・コンベンションセンター）
＊ 表彰式 スタイナーアイスアリーナ
- 1) 渡航日程 1 月 30 日（火）午後 6 時 成田発
(アルペンスノーボードチームは 1 月 25 日出発)
2 月 12 日（月）午後 3 時 成田着
- 2) 結団式 1 月 31 日（水）午後 6 時～8 時
(ベストウェスタンガーデンイン・2 階大会議室)
- 3) 解団式 2 月 10 日（土）午後 5 時 30 分～6 時
(ベストウェスタンガーデンイン・2 階大会議室)
- 6 開催国・都市 米国・ソルトレークシティ
- 7 参加国・参加者数 24 カ国 計 585 名（選手 310 名・役員 275 名）
- 8 実施競技、会場および選手数（5 競技）
 - ・アルペンスキー パークシティマウンテンリゾート 50 名
 - ・スノーボード パークシティマウンテンリゾート 36 名
 - ・アイスホッケー スタイナーアイスアリーナ 125 名
 - ・ノルディックスキー ソリダーホローノルディックセンター 54 名
 - ・カーリング(公開競技) スタイナーアイスアリーナ 45 名
 - ＊ ○印（アンダーライン）は日本選手が参加した種目（14 種目）

競技名	種目名	種目数	男	女
<u>アルペンスキー</u>	アルペン滑降	2	●	●
	アルペン複合	2	●	●
	スーパー大回転	2	●	●

	大回転		2	○	●
	回転		2	○	●
スノーボード	パラレル大回転		2	○	○
	パラレル回転		2	○	○
	スロープスタイル		2	●	●
	ハーフパイプ		2	○	○ (デモ競技)
アイスホッケー	アイスホッケー		1	●	
ノルディックスキー	クロスカントリースキー	1.3km 個人スプリント	2	○	●
		2x1.3km チームスプリント	2	○	●
		15km マススタート	1	○	
		20km ダブルパシュート	1	○	
		3x10km リレー	1	○	
		10km マススタート	1		○
		15km ダブルパシュート	1		●
カーリング(デモ競技)	カーリング		2	●	●
合計			30		

9 特記事項

- 1) 2002 年の冬季オリンピック及び冬季パラリンピックで使用された施設を中心に各競技が実施された。
- 2) 国政府等からの助成はなし、州政府助成金及び企業寄付金のみで運営された。
- 3) スノーボード競技で新しくスロープスタイルとハーフパイプの種目が実施された。
- 4) カーリング競技が前回に引き続いて公開競技として実施された。
- 5) ろう文化色を大きく打ち出した内容の開会式に過去最高の 4500 名が参加した。
- 6) 24 カ国から 310 名の選手が参加した。
 - ・ 最年少の選手 Pyshnyak, Alisa (米国:クロスカントリースキー):13歳11ヶ月
 - ・ 最年長の選手 Farovitch, Laurence (米国:カーリング):60歳5ヶ月
- 7) 組織委員会は、全ての分野においてろう者を主体とした運営が過去大会と比して強まっていた。

2 日本選手団

1) 概要

- ①参加人数 39 名
選手 17 名 (男性 12 名 女性 5 名)
役員 22 名 (男性 14 名 女性 8 名)
- ②団長 山根 昭治 { (財) 全日本ろうあ連盟理事・スポーツ委員会委員長 }
- ③キャプテン 原田 上
出場競技 アルペンスノーボード競技
パラレル大回転・パラレル回転
31 才 男 栃木県在住
- ④旗手 田崎 富士夫
出場競技 クロスカントリースキー競技
3×10km チームスプリント・15km マススタート・
20km ダブルパシュート・2×1.3km リレー
43 才 男 東京都在住

⑤日本選手団の特徴

- 1) 過去最高の代表団人数
- 2) 最年少出場選手はアルペンスキーの池田和明選手で 20 才
- 3) 最高齢出場選手はクロスカントリースキーの田崎富士夫選手で 43 才
- 4) デフリンピック日本代表選手選考規程に基づき、日本代表選手選考委員会にて 17 名の選手を選考

競 技	選手数			役員			合計
	男子	女子	小計	男子	女子	小計	
本部役員				4	7	11	11
アルペンスキー	3	0	3	3	0	3	6
アルペンスノーボード	3	3	6	3	0	3	9
スノーボードハーフパイプ	2	1	3	1	1	2	5
クロスカントリースキー	4	1	5	3	0	3	8
計	12	5	17	14	8	22	39

⑥日本選手団本部と宿泊先 (* デフリンピックの場合、選手村が設置されていません。)

選手団本部はベストウェスタンランドマークイン(パークシティ)と組織委員会本部が設置されているリトルアメリカホテル(ソルトレークシティ)に設置し、アルペンスキーとスノーボードハーフパイプはザ・ロッジ・アット・ザ・マウンテン・ビレッジ(パークシティ)、アルペンスノーボードはスノー・フラワー・コンドミニウムズ(パークシティ)、クロスカントリースキーはホームステッドリゾート・ホテル&コンドミニウム(パークシティ 郊外)の 5 箇所分散とした(日本との時差は -16 時間)。
ソルトレークシティからパークシティ間の距離は 40km、車で 1 時間以上かかる。

2) 成績

①過去最高のメダル数

スノーボード競技パラレル大回転及びパラレル回転の計 4 種目中 3 種目において金メダルを獲得した。

これは4年前の2個から一つ増加しており、スノーボード競技アルペン種目における日本選手のトップレベルを不動のものとした。

スノーボード競技ハーフパイプ男子種目でも日本選手が銅メダルを獲得し、日本選手団のメダル総数は24か国中7位と、冬季デフリンピック過去最高の成績を上げた。金メダル獲得数では24か国中3位と米国に並ぶ快挙となった。

②その他の成績

アルペンスキー競技は4年前と比して順位的には同等であるが、参加選手数の減少を考えると、むしろ成績は後退したと断定せざるを得ない。ただし、基礎体力・基礎技術の向上を中心とした練習と国内外大会への参加経験の積み重ねにより、入賞が可能な位置にある。

スノーボード競技アルペン種目は金メダルを3個獲得したが、技術的にはあと2～3名がメダル圏内であっただけに、メンタル面や体力面などにおける全体的な底上げが課題として残された。

スノーボード競技ハーフパイプ種目は新しく導入されたこともあり、女子種目が参加数の不足でノンメダル扱いとなったことは残念である。ハーフパイプ種目はこの先の発展により、日本選手が実力を発揮できる意味で絶好のスタート地点に立ったといえる。

ノルディックスキー競技はクロスカントリースキー各種目が実施され、日本選手は初参加になった。全体的に北欧の選手層と日本、トルコ、中国の選手層の間に大きな開きがあり、日本選手にとっては入賞よりは完走が目標となった部分もあった。この実力差を認識した上での長期的な選手育成取組みが課題となった。

① 金メダル 3個、銀メダル 0個、銅メダル 1個、総メダル数 4個

② メダル獲得者一覧、入賞者一覧、成績一覧〔別紙参照〕

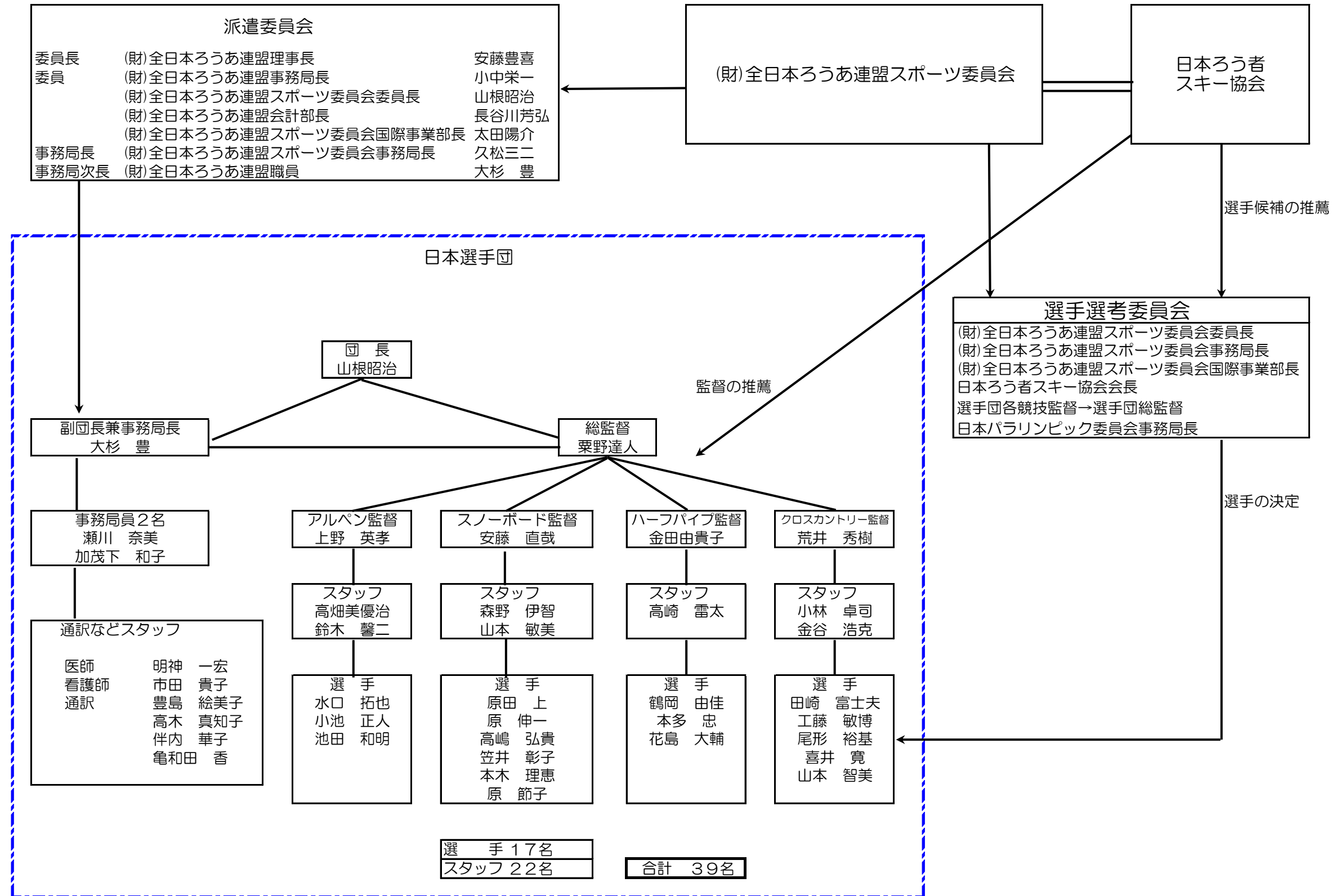
No.	競技名	2003 スンツバル大会					2007 ソルトレーク大会				
		参加数	メダリスト数	成 績			参加数	メダリスト数	成 績		
				メダル数	計				メダル数	計	
1	アルペン スキー	8	0	金	0	0	3	0	金	0	0
				銀	0				銀	0	
				銅	0				銅	0	
2	アルペン スノーボード	6	2	金	2	2	6	2	金	3	3
				銀	0				銀	0	
				銅	0				銅	0	
3	スノーボード ハーフパイプ			金		0	3	0	金	0	1
				銀					銀	0	
				銅					銅	1	
4	クロスカントリー スキー			金		0	5	0	金	0	0
				銀					銀	0	
				銅					銅	0	

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

国別メダル獲得ランキング

順位	国名	金	銀	銅	合計
1	ロシア	11	5	4	20
2	米国	3	4	4	11
3	チェコ	4	3	2	9
4	ウクライナ	0	4	4	8
5	スイス	1	4	2	7
6	オーストリア	1	1	3	5
7	日本	3	0	1	4
8	ドイツ	2	1	0	3
	フィンランド	1	1	1	3
	イタリア	0	1	2	3
11	カナダ	1	1	0	2
12	スロバキア	1	0	0	1
	クロアチア	0	1	0	1
	トルコ	0	0	1	1
	スウェーデン	0	0	1	1
13	オーストラリア	0	0	0	0
	中国	0	0	0	0
	フランス	0	0	0	0
	リトアニア	0	0	0	0
	モンゴル	0	0	0	0
	オランダ	0	0	0	0
	パキスタン	0	0	0	0
	ポーランド	0	0	0	0
	スロベニア	0	0	0	0
合計		28	26	25	79

【 第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～ 派遣体制 】



第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～
主なスケジュール

年	月日	曜日	内容			
2005	10月15日	（土）	競技団体に割当枠を通知			
	3月27日	（月）	競技団体からの推薦調書（選手）の締切			
2006	2月1日	（水）	予備登録の締切			
	2月24日	（金）	第37回全国ろうあ者冬季体育大会（岩手） ～26日（日）			
	3月19日	（日）	2007デフ・スノーボード・ハーフパイプ日本選手権大会			
	4月8日	（土）	第16回デフリンピック冬季大会選考委員会（第一次選考会）			
	6月5日	（月）	競技団体からの推薦調書（役員）の締切			
	5月21日	（土）	ICSDアモنز会長講演会（ホテルJALシティ田町）（秋篠宮妃殿下に御臨席いただく）			
	7月9日	（金）	第16回冬季デフリンピック第1回派遣委員会			
	8月1日	（火）	第16回デフリンピック冬季大会選考委員会（第二次選考会）			
	8月7日	（月）	選手・役員/調査票等提出の締切			
	8月31日	（木）	選手/使用薬物調査書・基礎調査（栄養）アンケート等提出の締切			
	8月～9月		医学委員会による使用薬物調査、科学委員会による基礎調査（栄養）			
	8月 ～ 10月		JPC合同研修会 8月26日（土）、27日（日）（東京） 9月16日（土）、17日（日）（大阪） 10月7日（土）、8日（日）（福岡）			
	9月1日	（金）	ICSD評議員会参加申込・提案届の締切			
	9月15日	（金）	第16回冬季デフリンピック第2回派遣委員会			
	9月23日	（土）	ドーピング説明会			
2007	1月15日	（月）	秋篠宮同妃両殿下御接見			
	1月19日	（金）	最終登録（聴力検査表を含む）の締切			
	1月24日	（水）	安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問			
	1月25日	（木）	日本選手団先発隊ソルトレーク出発			
	1月30日	（火）	日本選手団本隊ソルトレーク出発			
	1月31日	（水）	ID登録（リトルアメリカホテル）			
	1月31日	（水）	結団式（ベストウェスタンガーデンイン）			
	1月31日	（水）	TD会議（レッドライオンホテル）			
	2月1日	（木）	評議員会（シェラトンホテル）			
	2月2日	（金）	評議員会（シェラトンホテル）			
	2月3日	（土）	開会式：ハンツマンセンター ユタ州立大学			
				表彰式：スタイナーアイスアリーナ		
				アルペンスキー	スノーボード	クロスカントリースキー
				パークシティマウンテンリゾート（TD会議含む）		ソリダーホロー（TD会議含む）
		2月4日	（日）			1.3km個人スプリント（クラシカル）男子
	2月5日	（月）		パラレル大回転【予選・決勝】（男・女）	10kmマススタート（フリー）女子	
	2月5日	（月）			15kmマススタート(フリー) 男子	
	2月6日	（火）				
	2月7日	（水）			20kmダブルバシュート男子	
	2月8日	（木）	大回転（1本目・2本目）男子	パラレル回転【予選・決勝】（男・女）		
	2月8日	（木）	日本選手団先発隊ソルトレーク出発			
	2月9日	（金）	日本選手団先発隊帰国			
	2月9日	（金）	回転（1本目・2本目）男子	ハーフパイプ【予選・決勝】（男・女）	3×10kmリレー男子	
	2月10日	（土）			2×1.3kmチームスプリント男子	
	2月10日	（土）	解団式（ベストウェスタンガーデンイン）			
	2月10日	（土）	閉会式・さよならパーティー（ソルトプレイス・コンベンションセンター）			
	2月11日	（日）	日本選手団本隊ソルトレーク出発			
	2月12日	（月）	日本選手団本隊帰国			
	2月13日	（火）	厚生労働省・日本障害者スポーツ協会に大会の報告			
	2月23日	（金）	第38回全国ろうあ者冬季体育大会（岐阜）にて「第16回冬季デフリンピック報告会」を開催 ～25日（日）			
	3月6日	（火）	日本障害者スポーツ協会表彰（都市センターホテル・メダリスト）			
	3月9日	（金）	第16回冬季デフリンピック第3回派遣委員会			
	4月14日	（土）	桜を見る会（新宿御苑・入賞者）			
	4月28日	（土）	春の園遊会（赤坂御苑・メダリスト）			
	未定		秋篠宮同妃両殿下に大会の報告			
	未定		厚生労働大臣表彰（厚生労働省・入賞者）			
	未定		内閣総理大臣記念品贈呈式（首相官邸・入賞者）			
	未定		お茶会（皇居・入賞者）			

第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～ 競技スケジュール

	1/30 (火)	1/31 (水)	2/1 (木)	2/2 (金)	2/3 (土)	2/4 (日)	2/5 (月)	2/6 (火)	2/7 (水)	2/8 (木)	2/9 (金)	2/10 (土)	2/11 (日)	2/12 (月)
【全体】 ・評議員会・TD会議・ID登録等 ：リトルアメリカホテル他 ・開会式：ハンツマンセンター ユタ州立大学 ・閉会式：ソルトプレイス・コンベンションセンター ・表彰式：スタイナーアイスアリーナ	出 発 到 着	15：00/ ID登録 18：00/ 結団式	8：00-17：00 ・ワークショップ ・評議員会	8：00-17：00 ・評議員会	19：00/開会式	19:00/表彰式	19:00/表彰式	19:00/表彰式	19:00/表彰式	19:00/表彰式	19:00/表彰式	15：00 表彰式 17：30 解団式 20：00～ 閉会式 20：30～ お別れパーティー	出 発	帰 国

* アンダーラインは日本選手が参加した競技

アルペンスキー 【会場】 パークシティマウンテンリゾート		9：00～14：00 ・練習	9：30～14：00 ・練習	9：30～14：00 ・練習	10：00～11：30 ・滑降（女子／男子）	10：00～ ・複合滑降 （女子／男子）	9：30～14：00 ・練習	9：30～14：00 ・練習	10：00～ ・太回転（1本目） （女子／男子）	10：00～ ・回転（1本目） （女子／男子）			
						13：00～ ・複合回転 （女子／男子）	10：00～ ・スーパー大回転 （女子／男子）		13：00～ ・太回転（2本目） （女子／男子）	13：00～ ・回転（2本目） （女子／男子）			

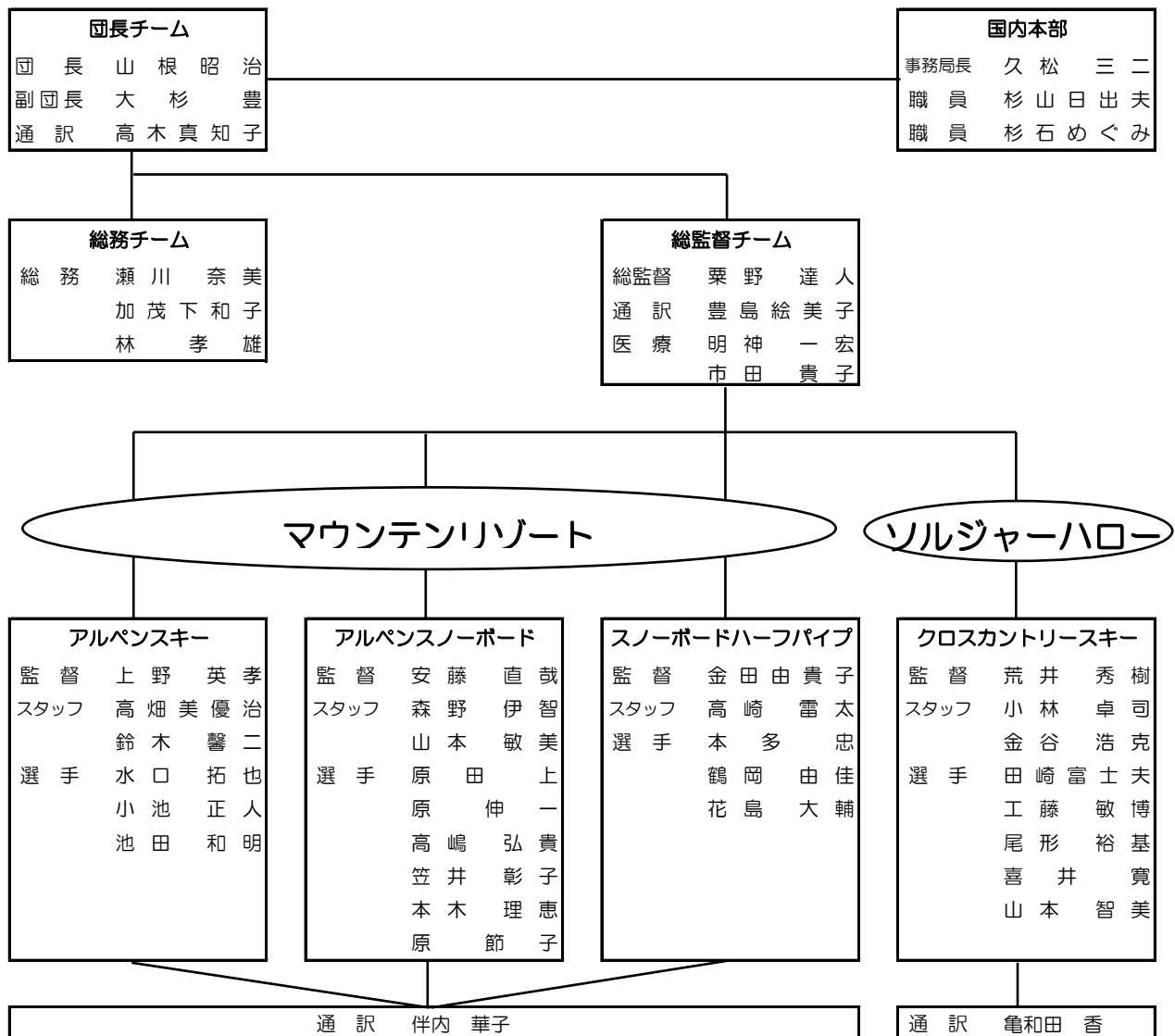
[illegible]

ノルディックスキー 【会場】 ソリダーホローノルディックセンター			10:00-14:00 ・練習	10:00-14:00 ・練習	10:00-14:00 ・練習	10:00～ ・1.3kg個人スリット (女子/男子)	11:00～ ・10kgスタート (女子)	10:00-14:00 ・練習	10:00～ ・15kgダブルシュート (女子)	10:00-14:00 ・練習	11:00～ ・3×10kgダブルシュート (男子)	11:00～ ・2×1.3kg個人スリット (女子/男子)		
							12:30～ ・15kgスタート (男子)		12:00～ ・20kgダブルシュート (男子)					

アイスホッケー 【会場】 スタイナーアイスアリーナ	9:00-16:30 ・練習	9:00-16:30 ・練習	8:00-10:15 ・練習	8:00-16:30 ・練習	8:00-10:15 ・練習	8:30-16:45 ・練習	8:30-13:45 ・練習	8:30-16:45 ・練習	8:30-13:45 ・練習	8:30-16:45 ・練習	9:00 FIN-CAN		
			11:00 RUS-USA 15:00 GER-CAN 20:00 SWN-FIN		11:00 FIN-GER 15:00 CAN-RUS 20:00 USA-SWN	20:00 RUS-FIN	15:00 GER-SWN 20:00 CAN-USA	20:00 GER-RUS	15:00 FIN-USA 20:00 SWN-CAN	20:00 USA-GER	12:00 RUS-SWE		

カーリング（公開競技） 【会場】 スタイナーアイスアリーナ						13：30-18：30 ・練習	19：00 CHN-CAN SUI-FIN CRO-CAN	19：00 CHN-FIN SVK-USA USA-SUI	13：00 CAN-USA CAN-SVK SUI-CHN 19：00 CRO-USA CAN-SUI FIN-USA	19：00 USA-CHN FIN-CAN SVK-CRO USA-CAN	13：00 準々決勝 （女子/男子） 19：00 準決勝 （女子/男子）	13：00 決勝 （女子/男子）		
-------------------------------------	--	--	--	--	--	--------------------	--	--	--	---	---	------------------------	--	--

第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～ 日本選手団現地体制図



第16回冬季デフリンピック ～ソルトレーク2007～

日本選手団名簿

			氏名	性別	年齢	都道府県	備考
本部	1	団長	山根 昭治	男		北海道	
	2	副団長兼事務局長	大杉 豊	男		東京都	
	3	総監督	栗野 達人	男		東京都	
	4	事務局員	瀬川 奈美	女		東京都	
	5	事務局員	加茂下 和子	女		東京都	
	6	医師	明神 一宏	男		北海道	
	7	看護師	市田 貴子	女		北海道	
	8	通訳	豊島 絵美子	女		大阪府	
	9	通訳	高木 真知子	女		東京都	
	10	通訳（米国在住）	伴内 華子	女		米国	
	11	通訳（米国在住）	亀和田 香	女		米国	
アルペンスキー	12	監督	上野 英孝	男		北海道	
	13	スタッフ	高畑 美優治	男		北海道	
	14	スタッフ	鈴木 馨二	男		北海道	
	15	選手	水口 拓也	男	36	北海道	大回転・回転
	16	選手	小池 正人	男	22	東京都	大回転・回転
	17	選手	池田 和明	男	20	東京都	大回転・回転
アルペン スノーボード	18	監督	安藤 直哉	男		北海道	
	19	スタッフ	森野 伊智	男		北海道	
	20	スタッフ	山本 敏美	男		北海道	
	21	選手	原田 上	男	30	栃木県	パラレル大回転・パラレル回転
	22	選手	原 伸一	男	33	栃木県	パラレル大回転・パラレル回転
	23	選手	高嶋 弘貴	男	23	神奈川県	パラレル大回転・パラレル回転
	24	選手	笠井 彰子	女	31	北海道	パラレル大回転・パラレル回転
	25	選手	本木 理恵	女	34	長野県	パラレル大回転・パラレル回転
	26	選手	原 節子	女	33	栃木県	パラレル大回転・パラレル回転
スノーボード ハーフパイプ	27	監督	金田 由貴子	女		大阪府	
	28	スタッフ	高崎 雷太	男		新潟県	
	29	選手	本多 忠	男	34	群馬県	ハーフパイプ
	30	選手	花島 大輔	男	31	東京都	ハーフパイプ
	31	選手	鶴岡 由佳	女	30	千葉県	ハーフパイプ
クロスカントリー スキー	32	監督	荒井 秀樹	男		東京都	
	33	スタッフ	小林 卓司	男		北海道	
	34	スタッフ	金谷 浩克	男		北海道	
	35	選手	田崎 富士夫	男	43	東京都	3×10kmチームスプリント・15kmマススタート・20kmダブルバシュート・2×1.3kmリレー
	36	選手	工藤 敏博	男	39	埼玉県	15kmマススタート
	37	選手	尾形 裕基	男	27	東京都	3×10kmチームスプリント・15kmマススタート・2×1.3kmリレー
	38	選手	喜井 寛	男	25	栃木県	1.3kmスプリント・2×1.3kmリレー
	39	選手	山本 智美	女	30	静岡県	10kmマススタート

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Japan Team

Games Results

Japan Deaf Sports Federation

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

メダリスト

No.	Sports Events		Name	Medal
1	アルペン スノーボード	パラレル大回転	原田 上	金メダル
2		パラレル回転		金メダル
3		パラレル回転	笠井 彰子	金メダル
4	スノーボード ハーフパイプ	ハーフパイプ	本多 忠	銅メダル
獲得メダル数 (メダリスト数)		金メダル	3	
		銀メダル	0	
		銅メダル	1	
		計	4	

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

入賞者

No.	Sports Events		Name	Medal
1	アルペン スノーボード	パラレル大回転	原 伸一	6位
2		パラレル大回転	笠井 彰子	4位
3		パラレル大回転	原 節子	8位
4		パラレル回転	原 伸一	5位
5		パラレル回転	本木 理恵	7位
6	クロスカントリー スキー	3×10kmリレー(男子)	田崎 富士夫 尾形 裕基 喜井 寛	4位
7		2×1.3km チームスプリント(男子)	田崎 富士夫 尾形 裕基	5位

入賞数	4位	2
	5位	2
	6位	1
	7位	1
	8位	1
	計	7

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

アルペンスキー

NO.	選手名	種目	月日	記録			順位 (位/人)	優勝者			成績
				1本目	2本目	合計タイム		合計タイム	選手名	国名	
1	水口 拓也	大回転（男子）	2/8	1'01:62	途中棄権		-/25	1'45.05	PERCHTOLD, Philipp	オーストリア	—
		回転（男子）	2/9	48.56	54.25	1'42.81	12/24	1'31.02	LEBLANC, Charles-Olivier	カナダ	12位
2	小池 正人	大回転（男子）	2/8	55.91	1'02.10	1'58.01	15/25	1'45.05	PERCHTOLD, Philipp	オーストリア	15位
		回転（男子）	2/9	49.05	54.49	1'43.54	14/24	1'31.02	LEBLANC, Charles-Olivier	カナダ	14位
3	池田 和明	大回転（男子）	2/8	57.43	1'00.90	1'58.33	16/25	1'45.05	PERCHTOLD, Philipp	オーストリア	16位
		回転（男子）	2/9	49:51	途中棄権		-/24	1'31.02	LEBLANC, Charles-Olivier	カナダ	—

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

アルペンスノーボード

NO.	選手名	種目	月日	記録			順位 (位/人)	合計タイム	優勝者		成績
				青(旗門)	赤(旗門)	合計タイム			選手名	国名	
1	原田 上	パラレル大回転(男子)	2/4				1/15		原田 上	日本	1位
		パラレル回転(男子)	2/7				1/14		原田 上	日本	1位
2	原 伸一	パラレル大回転(男子)	2/4	58.87	58.30	1:57.17	6/15		原田 上	日本	6位
		パラレル回転(男子)	2/7	39.34	41.10	1:20.44	5/14		原田 上	日本	5位
3	高嶋 弘貴	パラレル大回転(男子)	2/4	1:02.61	棄権		15/15		原田 上	日本	15位
		パラレル回転(男子)	2/7	棄権	棄権	棄権	-/14		原田 上	日本	—
4	笠井 彰子	パラレル大回転(女子)	2/4				4/11		LANNING, Nicole Diann	アメリカ	4位
		パラレル回転(女子)	2/7				1/11		笠井 彰子	日本	1位
5	本木 理恵	パラレル大回転(女子)	2/4	1:31.64	1:05.10	2:36.74	11/11		LANNING, Nicole Diann	アメリカ	11位
		パラレル回転(女子)	2/7	49.70	49.16	1:38.86	7/11		笠井 彰子	日本	7位
6	原 節子	パラレル大回転(女子)	2/4	1:10.69	1:10.49	2:21.18	8/11		LANNING, Nicole Diann	アメリカ	8位
		パラレル回転(女子)	2/7	55.48	53.65	1:49.13	9/11		笠井 彰子	日本	9位

※ 1～4位はタイムなし

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

スノーボードハーフパイプ

NO.	選手名	種目	月日	記録			ベストタイム	順位 (位/人)	合計タイム	優勝者		成績
				1回目	2回目	3回目				選手名	国名	
1	本多 忠	ハーフパイプ男子	2/9	18.00	16.30	21.40	21.40	3/12	25.70	KOTILA, Mikko	フィンランド	3位
2	花島 大輔	ハーフパイプ男子	2/9	8.90	6.60	14.00	14.00	9/12	25.70	KOTILA, Mikko	フィンランド	9位
3	鶴岡 由佳	ハーフパイプ女子	2/9	12.4	13.3	6.1	13.3	1/2		鶴岡 由佳	日本	1位

※ ハーフパイプ女子はデモ競技の為、ノンメダル

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

ノルディックスキー（クロスカンリースキー）

NO.	選手名	種目	月日	記録				順位 (位/人)	優勝者			成績
				1周目	2周目	3周目	合計タイム		合計タイム	選手名	国名	
1	田崎 富士夫	15kmマスタート (フリー) 男子	2/5	19:01.4			DNF	-/22	13:53.7	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	—
		20kmダブルバシュート 男子	2/7	40:11.7	50.0	39:20.7	1:20:22.4	12/20	59:54.4	TISHCHENKO, Sergey	ロシア	12位
2	工藤 敏博	15kmマスタート (フリー) 男子	2/5	20:36.2	22:36.7	21:32.2	1:04:45.1	20/22	13:53.7	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	20位
3	尾形 裕基	15kmマスタート (フリー) 男子	2/5	18:12.0	19:27.3	20:01.8	57:41.1	19/22	13:53.7	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	19位
NO.	選手名	種目	月日	記録				順位 (位/人)	優勝者			成績
				タイム					合計タイム	選手名	国名	
4	喜井 寛	1.3km個人スプリント (クラシカル) 男子	2/4	4:09.9				17/23	3:11.8	MAYOROV, Vladimir	ロシア	17位
NO.	選手名	種目	月日	記録				順位 (位/人)	優勝者			成績
				1周目	2周目	合計タイム			合計タイム	選手名	国名	
5	山本 智美	10kmマスタート (フリー) 女子	2/5	23:13.3	24:22.4	47:35.6		10/14	1'45.05	FEDULOVA, Anna	ロシア	10位
NO.	選手名	種目	月日	記録				順位 (位/チーム)	優勝者			成績
				1周目	2周目	合計タイム			合計タイム	選手名	国名	
1	田崎 富士夫	3×10kmリレー 男子	2/9	19:03.7	19:03.7	1:51:25.0		4/5	1:24:40.8	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	4位
				20:03.6	39:07.3							
	尾形 裕基			17:20.3	56:27.6					TISHCHENKO, Sergey		
				18:00.0	1:14:27.6							
	喜井 寛			17:59.2	1:32:26.8					YUZHANINOV, Viktor		
				18:58.2	1:51:25.0							
NO.	選手名	種目	月日	記録				順位 (位/チーム)	優勝者			成績
				1周目	2周目	合計タイム			合計タイム	選手名	国名	
2	田崎 富士夫	2×1.3km チームスプリント 男子	2/10	3:19.6	3:19.6	22:29.5		5/6	17:35.1	DEGTIANNIKOV, Alexande	ロシア	5位
	尾形 裕基			3:38.4	6:57.9					MAYOROV, Vladimir		
				3:51.3	10:49.3							
				3:43.5	14:32.8							
				3:53.8	18:26.5							
				4:03.0	22:29.5							

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

アルペンスキー 大回転・男子 公式記録 (2007年2月8日)

審査員

T D F I S	SCHMAUSER, MIKE	ドイツ
主審	WINTERS, TOM	アメリカ
競技委員長	KORFANTA, KAREN	アメリカ

コースデータ

コース名	C B' S				
スタート地点標高	2454m	フィニッシュ地点標高	2110m	標高差	344m
コース全長	(記録なし)				

1本目

コースセッター	STEIN, PETER	ドイツ
旗門数	32	
スタート時間	10:00	
前走者：A	VAN DIS, MAARTJE	オランダ
前走者：B	BEANHARD, KATIE	アメリカ
前走者：C	ELLIOT, ANGIE	アメリカ
前走者：D	JACOB, JEREMY	アメリカ

2本目

コースセッター	LEHMANN, CHRISTIAN	スイス
旗門数	35	
スタート時間	13:00	
前走者：A	VAN DIS, MAARTJE	オランダ
前走者：B	BEANHARD, KATIE	アメリカ
前走者：C	ELLIOT, ANGIE	アメリカ
前走者：D	JACOB, JEREMY	アメリカ

順位	氏名	国名	1本目	2本目	合計タイム
1位	PERCHTOLD, Philipp	オーストリア	51.56	53.49	1'45.05
2位	BECHERER, Matthias	ドイツ	51.14	54.02	1' 45.16
3位	NIDER, Aaron	イタリア	52.13	53.38	1'45.51
4位	SANTINI, Andrea	イタリア	51.10	55.33	1'46.43
5位	LEGUTKY, JR., Martin	スロバキア	51.76	54.86	1'46.62
6位	LEBLANC, Charles-Olivier	カナダ	52.21	55.41	1'47.62
7位	SCHNEIDER, Roland	スイス	52.01	56.83	1'48.84
8位	EISENMANN, Philipp	ドイツ	53.36	55.75	1'49.11
9位	PITSCHIELER, Reinhard	イタリア	53.64	56.16	1'49.80
10位	VIRNIG, Jonas B.	アメリカ	52.68	57.52	1'50.20
11位	PETRAC, Samo	スロベニア	53.62	57.21	1'50.83
12位	MEILER, Thomas	ドイツ	55.55	58.27	1'53.82
13位	GRILL, Michael	オーストリア	54.66	59.75	1'54.41
14位	SCHINNERER, Oliver	オーストリア	56.32	59.76	1'56.08
15位	小池 正人	日本	55.91	1'02.10	1'58.01
16位	池田 和明	日本	57.43	1'00.90	1'58.33
17位	KULLAS, Cameron G.	アメリカ	1'03.06	1'05.88	2'08.94
18位	KRISTOF, Tomas	スロバキア	54.96	1'14.68	2'09.64

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

【1本目棄権】

ALI, Gohar	バキスタン
------------	-------

【1本目途中棄権】

STEINER, Philipp	スイス
SCIBORSKI, Marek	ポーランド
PELLETIER, David	フランス
FAVRE, Steve	スイス

【2本目途中棄権】

YOPP, Nicolas	アメリカ
水口 拓也	日本
NELSON, John Austin	アメリカ

1:01:62、途中棄権

Results

アルペンスキー 回転・男子 公式記録（2007年2月9日）

審査員

T D F I S	SCHMAUSER, MIKE	ドイツ
主審	WINTERS, TOM	アメリカ
競技委員長	KORFANTA, KAREN	アメリカ

コースデータ

コース名	P I C A B O' S				
スタート地点標高	2273m	フィニッシュ地点標高	2110m	標高差	163m
コース全長	(記録なし)				

1本目

コースセッター	STEIN, PETER	ドイツ
旗門数	51	
スタート時間	10:00	
前走者：A	VAN DIS, MAARTJE	オランダ
前走者：B	BEANHARD, KATIE	アメリカ
前走者：C	ELLIOT, ANGIE	アメリカ
前走者：D	JACOB, JEREMY	アメリカ

2本目

コースセッター	PELLETIER, PIERRE	フランス
旗門数	60	
スタート時間	13:00	
前走者：A	VAN DIS, MAARTJE	オランダ
前走者：B	BEANHARD, KATIE	アメリカ
前走者：C	ELLIOT, ANGIE	アメリカ
前走者：D	JACOB, JEREMY	アメリカ

順位	氏名	国名	1本目	2本目	合計タイム
1位	LEBLANC, Charles-Olivier	カナダ	43.34	47.69	1'31.02
2位	LEGUTKY, JR., Martin	スロバキア	44.17	47.39	1'31.56
3位	PERCHTOLD, Philipp	オーストリア	45.48	48.35	1'33.83
4位	SCHNEIDER, Roland	スイス	45.71	48.86	1'34.57
5位	NELSON, John Austin	アメリカ	45.21	49.37	1'34.58
6位	NIDER, Aaron	イタリア	45.61	50.50	1'36.11
7位	YOPP, Nicolas	アメリカ	46.03	50.29	1'36.32
8位	SANTINI, Andrea	イタリア	46.25	51.46	1'37.71
9位	EISENMANN, Philipp	ドイツ	48.09	50.53	1'38.62
10位	PETRAC, Samo	スロベニア	47.44	52.16	1'39.60
11位	FAVRE, Steve	スイス	49.36	52.49	1'41.85
12位	水口 拓也	日本	48.56	54.25	1'42.81
13位	KRISTOF, Tomas	スロバキア	49.12	54.09	1'43.21
14位	小池 正人	日本	49.05	54.49	1'43.54
15位	GRILL, Michael	オーストリア	49.13	54.54	1'43.67
16位	MEILER, Thomas	ドイツ	50.75	56.21	1'46.96
17位	SCHINNERER, Oliver	オーストリア	53.49	1'01.91	1'55.40
18位	KULLAS, Cameron G.	アメリカ	1'01.48	1'06.29	2'07.77
19位	SCIBORSKI, Marek	ポーランド	1'03.72	1'08.73	2'12.45

Results

【1 本目棄権】

ALI, Gohar	パキスタン
PELLETIER, David	フランス
STENMARK, Jonatan	スウェーデン

【1 本目途中棄権】

VIRNIG, Jonas B.	アメリカ
PITSCHIELER, Reinhard	イタリア
BECHERER, Matthias	ドイツ

【2 本目途中棄権】

池田 和明	日本
STEINER, Philipp	スイス

49:51、途中棄権

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

スノーボード パラレル大回転 公式記録（2007年2月4日）

審査員

T D F I S	M. GALMARINI	スイス
主審	T. WINTERS	アメリカ
競技委員長	K. KORFANTA	アメリカ

コースデータ

コース名	C B' S				
スタート地点標高	2270m	フィニッシュ地点標高	2110m	標高差	160m
コース全長	(記録なし)				

1本目

前走者：A	H. TEZUKA	日本
前走者：B	J. RAILEY	アメリカ

(男子)

順位	氏名	国名	青（旗門）	赤（旗門）	合計タイム
1位	原田 上	日本			
2位	PAVLICA, Stanko	スイス			
3位	POLLOCK, Jeffrey W.	アメリカ			
4位	HECKER, Dean	オーストラリア			
5位	STRACK, Peter	オーストリア	1:00.46	55.93	1:56.39
6位	原 伸一	日本	58.87	58.30	1:57.17
7位	REGER, Greg M.	アメリカ	1:02.12	1:02.49	2:04.61
8位	HEDLUND, Petter	スウェーデン	失格	1:01.41	
9位	PERRICONE, Fabio	イタリア	53.34	51.39	1:44.73
10位	HARTL, Anton	オーストリア	57.51	56.96	1:54.47
11位	HEINSCHINK, Anton	オーストリア	1:01.05	57.33	1:58.38
12位	LOFTUS, William	アメリカ	55.31	1:07.47	2:02.78
13位	MARKOVIC, Jozef	スロバキア	1:05.28	1:03.80	2:09.08
14位	DIBIASE, Danilo	イタリア	1:02.34	棄権	
15位	高嶋 弘貴	日本	1:02.61	棄権	

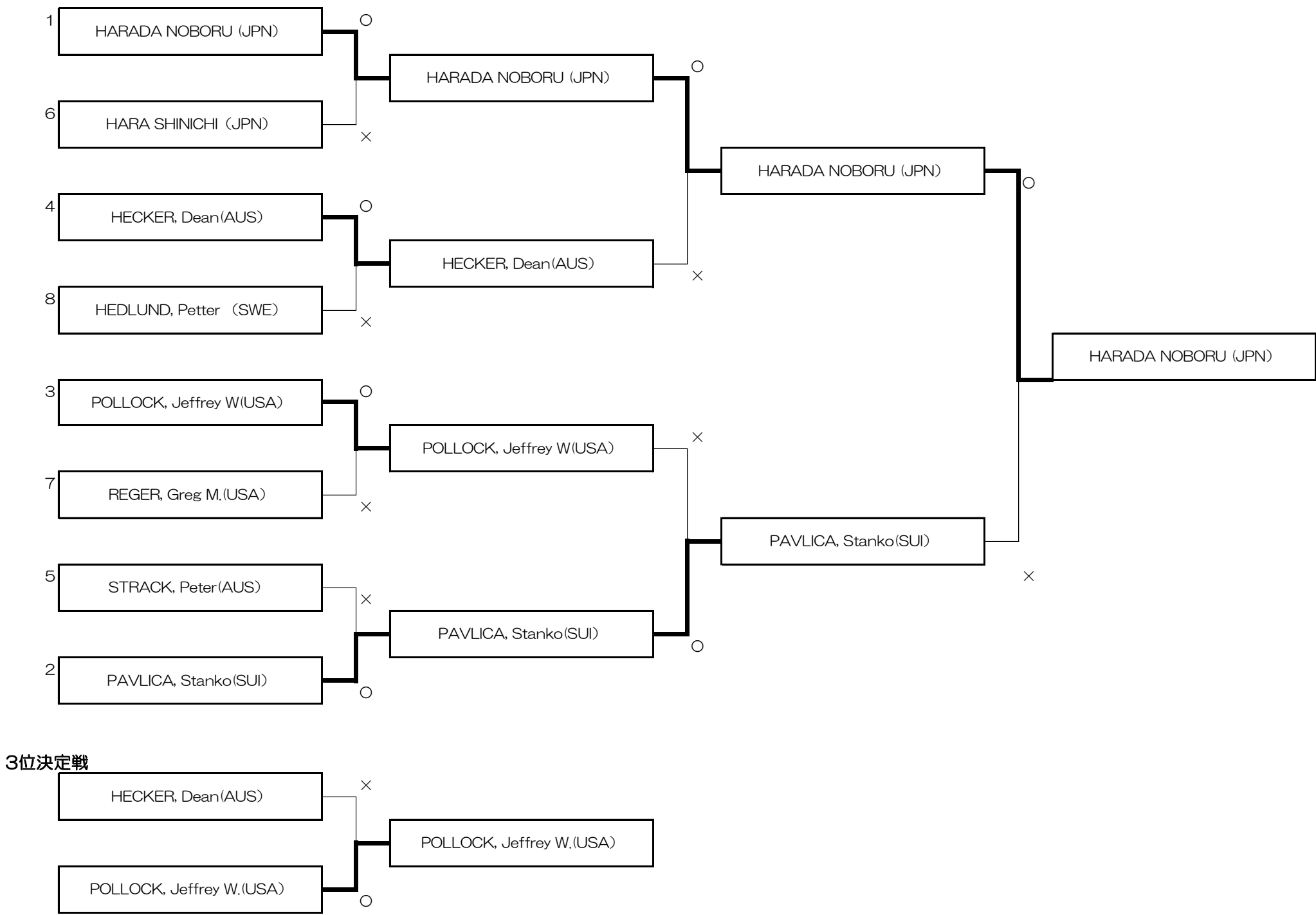
(女子)

順位	氏名	国名	青（旗門）	赤（旗門）	合計タイム
1位	LANNING, Nicole Diann	アメリカ			
2位	HANHIKOSKI, Cecilia Emma	フィンランド			
3位	LEDERMANN, Denise	スイス			
4位	笠井 彰子	日本			
5位	TUTZER, Marlene	イタリア	58.52	55.71	1:54.23
6位	LOFTUS, Rachel	アメリカ	58.11	58.72	1:56.83
7位	BIRLEY, Dawn Jani	カナダ	1:02.19	1:00.98	2:03.17
8位	原 節子	日本	1:10.69	1:10.49	2:21.18
9位	WILDMAN, Gracie	アメリカ	1:07.77	1:14.16	2:21.93
10位	GIURA, Valeria	イタリア	1:15.78	1:14.41	2:30.19
11位	本木 理恵	日本	1:31.64	1:05.10	2:36.74

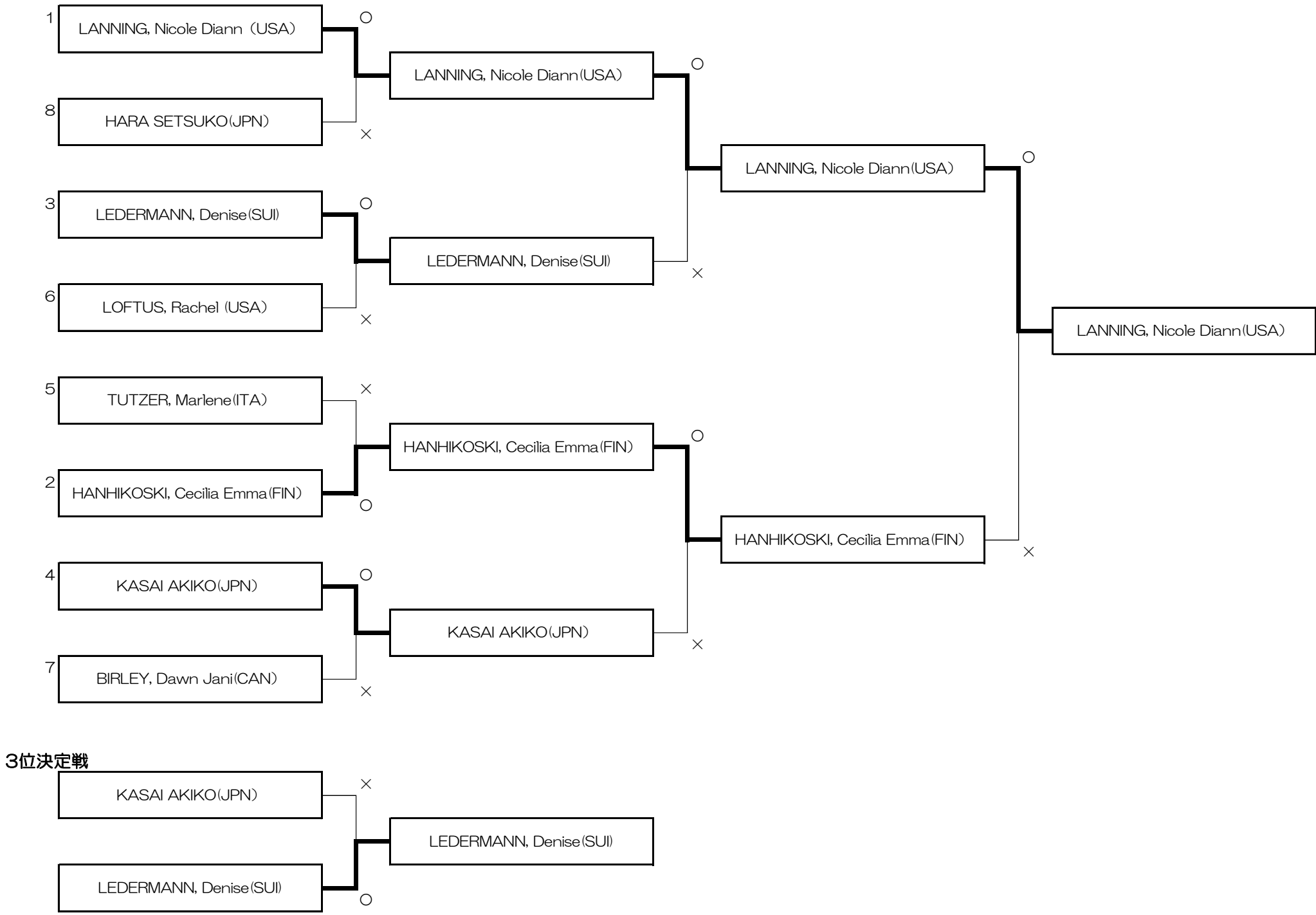
SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

2月4日：パラレル大回転（勝ち抜き戦）
《男子》優勝決定戦



《女子》優勝決定戦



SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

スノーボード パラレル回転 公式記録（2007年2月7日）

審査員

T D F I S	M. GALMARINI	スイス
主審	T. WINTERS	アメリカ
競技委員長	K. KORFANTA	アメリカ

コースデータ

コース名	P I C A B O ' S				
スタート地点標高	2230m	フィニッシュ地点標高	2110m	標高差	120m
コース全長	(記録なし)				

(男子)

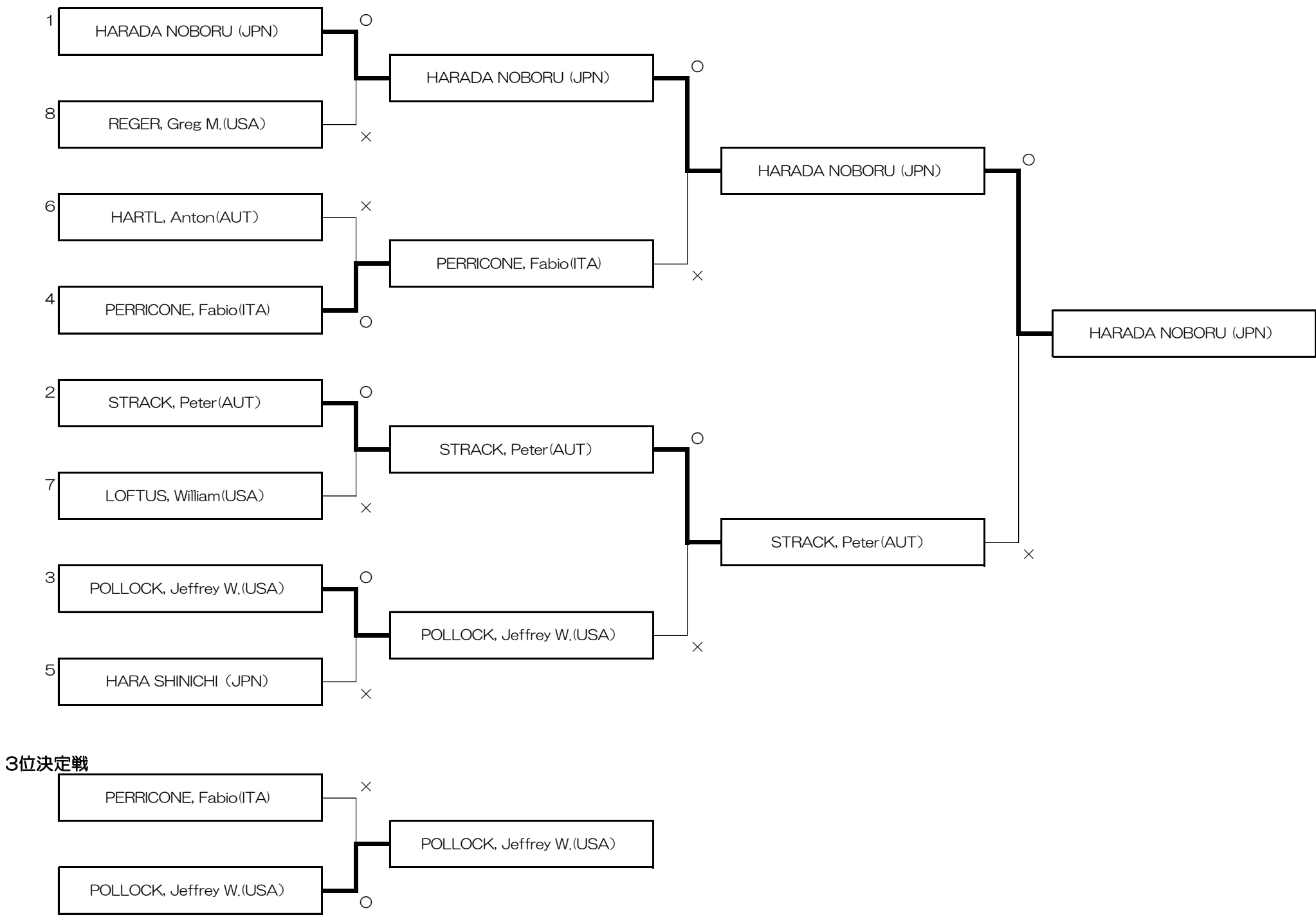
順 位	氏 名	国 名	青（旗門）	赤（旗門）	合計タイム	ポイント
1位	原 田 上	日本				500.00
2位	STRACK, Peter	オーストリア				400.00
3位	POLLOCK, Jeffrey W.	アメリカ				300.00
4位	PERRICONE, Fabio	イタリア				250.00
5位	原 伸一	日本	39.34	41.10	1:20.44	225.00
6位	HARTL, Anton	オーストリア	41.25	44.26	1:25.51	200.00
7位	LOFTUS, William	アメリカ	43.81	43.83	1:27.64	180.00
8位	REGER, Greg M.	アメリカ	43.35	46.04	1:29.39	160.00
9位	DIBIASE, Danilo	イタリア	44.48	45.27	1:29.75	145.00
10位	HEDLUND, Petter	スウェーデン	42.73	47.26	1:29.99	130.00
11位	HEINSCHINK, Anton	オーストリア	45.35	46.06	1:31.41	120.00
12位	HECKER, Dean	オーストラリア	41.26	1:09.88	1:51.14	110.00
13位	PAVLICA, Stanko	スイス	40.46	1:15.49	1:55.95	100.00
14位	MARKOVIC, Jozef	スロバキア	1:16.09	1:03.51	2:19.60	90.00
15位	GHOST 1		2:20.00	58.70		
16位	GHOST 2		2:20.20	2:20.20		

(女子)

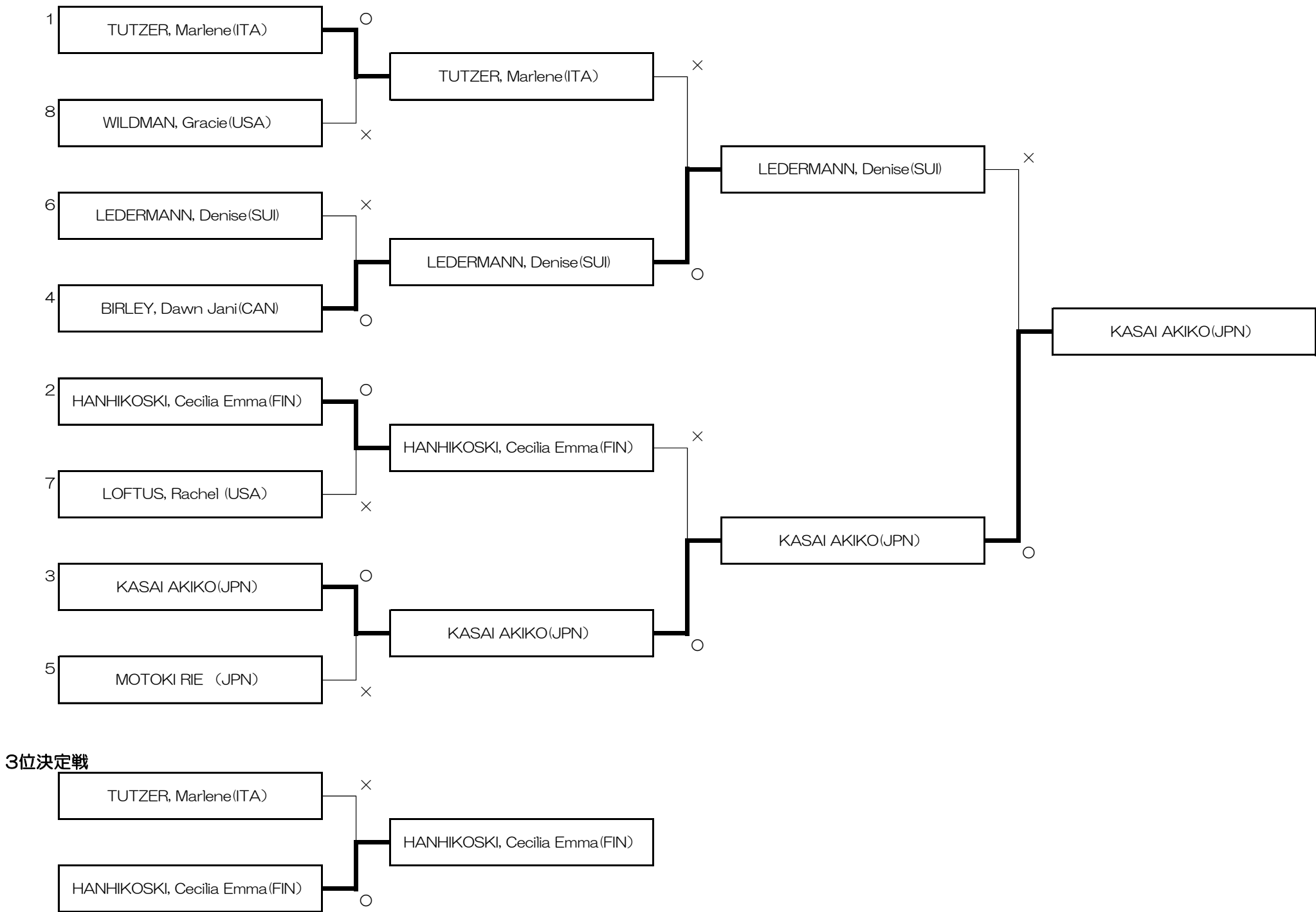
順 位	氏 名	国 名	青（旗門）	赤（旗門）	合計タイム	ポイント
1位	笠井 彰子	日本				500.00
2位	LEDERMANN, Denise	スイス				400.00
3位	HANHIKOSKI, Cecilia Emma	フィンランド				300.00
4位	TUTZER, Marlene	イタリア				250.00
5位	BIRLEY, Dawn Jani	カナダ	44.98	46.98	1:31.96	225.00
6位	LOFTUS, Rachel	アメリカ	44.29	47.81	1:32.10	200.00
7位	本木 理恵	日本	49.70	49.16	1:38.86	180.00
8位	WILDMAN, Gracie	アメリカ	50.39	52.07	1:42.46	160.00
9位	原 節子	日本	55.48	53.65	1:49.13	
10位	GIURA, Valeria	イタリア	棄権	棄権		
11位	LANNING, Nicole Diann	アメリカ	棄権	棄権		

Results

2月7日：パラレル回転（勝ち抜き戦）
《男子》優勝決定戦



《女子》優勝決定戦



SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

スノーボード ハーフパイプ 公式記録 (2007年2月9日)

審査員

T D F I S	M. GALMARINI	スイス
主審	T. WINTERS	アメリカ
競技委員長	K. KORFANTA	アメリカ

コース名	HALFPIPE
------	----------

(男子)

順位	氏名	国名	1回目	2回目	3回目	ベストスコア	ポイント
1位	KOTILA, Mikko	フィンランド	24.20	25.70	25.20	25.70	500.00
2位	GUSTAFSON, Matt Delane	アメリカ	22.70	20.40	14.10	22.70	400.00
3位	本多 忠	日本	18.00	16.30	21.40	21.40	300.00
4位	DE LA O, Darrick	アメリカ	13.80	14.80	19.50	19.50	250.00
5位	LINDSTROM, John	スウェーデン	15.30	18.00	16.40	18.00	225.00
6位	WERTZ, Zachary	アメリカ	8.20	11.10	17.90	17.90	200.00
7位	JENZER, Jonas	スイス	16.20	13.40	12.80	16.20	180.00
8位	REGER, Greg M.	アメリカ	14.80	13.60	11.70	14.80	160.00
9位	花島 大輔	日本	8.90	6.60	14.00	14.00	145.00
10位	HARTL, Anton	オーストリア	11.30	5.70	12.60	12.60	130.00
11位	HECKER, Dean	オーストラリア	11.60	10.80	9.00	11.60	120.00
12位	PERRICONE, Fabio	イタリア	9.40	9.30	9.40	9.40	

(女子) 【(デモ競技) ノンメダル】

順位	氏名	国名	1回目	2回目	3回目	ベストスコア	ポイント
1位	鶴岡 由佳	日本	12.4	13.3	6.1	13.3	500.00
2位	WILDMAN, Gracie A.	アメリカ	9.2	10.9	12.1	12.1	400.00

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

クロスカントリースキー 1.3km個人スプリント（クラシカル）男子 公式記録（2007年2月4日）

審査員

競技委員長	Scott Peterson	アメリカ
T D	Knut Kjoede	ノルウェー
Asst. T D	Reed Gershwind	アメリカ
ジュリーメンバー	Knut Kjoede	ノルウェー
//	Reed Gershwind	アメリカ
//	Scott Peterson	アメリカ

コースデータ

コース名	Soldier Hollow Sprint Loop 1.3km				
標高差	42m	極限登高	36m	合計登高	55m
周回距離	1,3 k m	周回数	1回		

順 位	氏 名	国 名	タイム	Last Round
1位	MAYOROV, Vladimir	ロシア	3:11.8	F i n a l A
1位	ERMILOV, Sergey	ロシア	3:16.5	F i n a l A
3位	ANDRIYISHYN, Andriy	ウクライナ	3:14.7	F i n a l A
4位	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	3:16.6	F i n a l A
5位	HRYTSENKO, Serhiy	ウクライナ	3:20.3	F i n a l B
6位	KURYLYAK, Stepan	ウクライナ	3:24.0	F i n a l B
7位	TRITSCHER, Bernhard	オーストリア	3:21.6	F i n a l B
8位	RYBIN, Dmitry	ロシア	3:24.7	F i n a l B
9位	MCCUSKER, Angus	アメリカ	3:30.9	Quarterfinal 1
10位	PYSHNYAK, Volodymyr	ウクライナ	3:33.9	Quarterfinal 3
11位	SVENNINGSSON, Torbjörn	スウェーデン	3:36.5	Quarterfinal 4
12位	NYSTRÖM, Johnny	スウェーデン	3:40.0	Quarterfinal 2
13位	SVEDAS, Ramunas	リトアニア	3:39.2	Quarterfinal 2
14位	KOCOGLU, Kadir	トルコ	4:07.9	Quarterfinal 3
15位	LIU, Ming Ming	中国	4:07.5	Quarterfinal 4
16位	HUO, Guang	中国	4:07.9	Quarterfinal 1
17位	喜井 寛	日本	4:09.9	Qualification
18位	JIA, Gang	中国	4:14.8	Qualification
19位	BINGOL, Necmettin	トルコ	4:16.5	Qualification
20位	ZHANG, Lixin	中国	4:20.7	Qualification
21位	BANOVSKY, Jaroslav	スロバキア	4:31.9	Qualification
22位	KACIR, Fatih	トルコ	4:37.8	Qualification
23位	KELESOGLU, Yavuz	トルコ	4:49.1	Qualification

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

クロスカントリースキー 10kmマスタート（フリー）女子 公式記録（2007年2月5日）

審査員

競技委員長	Scott Peterson	アメリカ
T D	Knut Kjoede	ノルウェー
Asst. T D	Reed Gershwind	アメリカ
ジュリーメンバー	Knut Kjoede	ノルウェー
//	Reed Gershwind	アメリカ
//	Scott Peterson	アメリカ

コースデータ

コース名	Soldier Hollow Olympic 5k A				
標高差	75m	極限登高	37m	合計登高	192m
周回距離	5 k m	周回数	2回		

順位	氏名	国名	1周目	2周目	合計タイム
1位	FEDULOVA, Anna	ロシア	15:34.6	15:40.9	31:15.5
2位	MISHARINA, Lyubov	ロシア	15:35.3	15:51.2	31:26.4
3位	KULESH, Maryna	ウクライナ	16:08.6	17:34.5	33:43.0
4位	SMIRNOVA, Natalya	ロシア	16:20.1	18:12.0	34:32.0
5位	TELSER, Renate	イタリア	16:54.2	17:39.9	34:34.1
6位	LAVRYK, Anastasiia	ウクライナ	16:46.4	18:03.3	34:49.6
7位	GOLOVINA, Raisa	ロシア	17:29.9	19:06.0	36:35.8
8位	BELTRANDO, Katia	イタリア	17:54.6	18:48.0	36:42.5
9位	SHAO, Weina	中国	18:26.7	19:48.6	38:15.3
10位	山本 智美	日本	23:13.3	24:22.4	47:35.6
11位	TICHA, Ivica	スロバキア	23:23.1	25:14.4	48:37.4
12位	WANG, Meng	中国	25:55.9	27:43.4	53:39.3
13位	KOKOSKOVA, Jana	スロバキア	25:55.5	28:19.7	54:15.2

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

クロスカンリースキー 15kmマスタート(フリー) 男子 公式記録(2007年2月5日)

審査員

競技委員長	Scott Peterson	アメリカ
T D	Knut Kjoede	ノルウェー
Asst. T D	Reed Gershwind	アメリカ
ジュリーメンバー	Knut Kjoede	ノルウェー
//	Reed Gershwind	アメリカ
//	Scott Peterson	アメリカ

コースデータ

コース名	Soldier Hollow Olympic 5k A				
標高差	75m	極限登高	37m	合計登高	192m
周回距離	5 km	周回数	3回		

順位	氏名	国名	1周目	2周目	3周目	合計タイム
1位	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	13:49.1	14:20.0	13:53.7	42:02.7
2位	ERMILOV, Sergey	ロシア	13:48.6	14:20.0	13:59.5	42:08.0
3位	TISHCHENKO, Sergey	ロシア	13:51.9	14:16.2	14:05.9	42:13.9
4位	MCCUSKER, Angus	アメリカ	13:52.5	14:36.6	14:57.8	43:26.9
5位	MAYOROV, Vladimir	ロシア	13:50.5	14:48.5	15:11.8	43:50.8
6位	ANDRIYISHYN, Andriy	ウクライナ	13:47.9	14:36.0	16:04.0	44:27.9
7位	TRITSCHER, Bernhard	オーストリア	14:47.5	15:33.4	14:48.5	45:09.3
8位	PYSHNYAK, Volodymyr	ウクライナ	14:31.2	15:34.2	15:15.7	45:21.0
9位	SVENNINGSSON, Torbjörn	スウェーデン	14:48.4	15:33.0	15:11.1	45:32.5
10位	KURYLYAK, Stepan	ウクライナ	14:28.2	16:12.5	15:31.2	46:11.8
11位	PYSHNYAK, Ivan Ukraine	ウクライナ	14:46.9	15:43.2	16:07.8	46:37.9
12位	SVEDAS, Ramunas	リトアニア	15:17.7	16:19.3	16:03.3	47:40.3
13位	BINGOL, Necmettin	トルコ	17:02.0	16:56.2	16:51.4	50:49.7
14位	KOCOGLU, Kadir	トルコ	16:42.1	17:42.5	16:59.2	51:23.8
15位	KACIR, Fatih	トルコ	17:04.1	18:36.3	17:46.7	53:27.0
16位	Qi, Chang Ji	中国	17:19.3	17:50.4	18:23.4	53:33.0
17位	NYSTRÖM, Johnny	スウェーデン	16:48.6	18:52.5	18:38.8	54:19.9
18位	LIU, Pan	中国	17:38.4	18:48.6	18:18.8	54:45.8
19位	尾形 裕基	日本	18:12.0	19:27.3	20:01.8	57:41.1
20位	工藤 敏博	日本	20:36.2	22:36.7	21:32.2	1:04:45.1
21位	KELESOGLU, Yavuz	トルコ	18:57.8			DNF
22位	田崎 富士夫	日本	19:01.4			DNF
23位	BANOVSKY, Jaroslav	スロバキア				DNF

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

クロスカンリースキー 20kmダブルパシュート男子 公式記録（2007年2月7日）

審査員

競技委員長	Scott Peterson	アメリカ
T D	Knut Kjoede	ノルウェー
Asst. T D	Reed Gershwind	アメリカ
ジュリーメンバー	Knut Kjoede	ノルウェー
//	Reed Gershwind	アメリカ
//	Scott Peterson	アメリカ

コースデータ

コース名	Soldier Hollow Olympic 5k A				
標高差	75m	極限登高	37m	合計登高	192m
周回距離	5 km	周回数	4回		

順位	氏名	国名	1周目	Pit Stop	3周目	合計タイム
1位	TISHCHENKO, Sergey	ロシア	30:49.4	25.2	28:39.8	59:54.4
2位	ANDRIYISHYN, Andriy	ウクライナ	29:54.0	27.3	29:47.5	1:00:08.8
3位	YUZHANINOV, Viktor	ロシア	31:55.3	28.9	29:04.6	1:01:28.8
4位	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	32:04.7	26.6	30:55.3	1:03:26.6
5位	KURYLYAK, Stepan	ウクライナ	31:26.7	35.4	31:38.8	1:03:40.9
6位	MCCUSKER, Angus	アメリカ	32:56.6	25.2	30:37.1	1:03:58.9
7位	SVENNINGSSON, Torbjörn	スウェーデン	32:55.4	30.8	30:32.9	1:03:59.1
8位	ERMILOV, Sergey	ロシア	32:11.4	27.1	32:08.9	1:04:47.4
9位	HRYTSENKO, Serhiy	ウクライナ	33:30.1	30.1	31:10.6	1:05:10.8
10位	PYSHNYAK, Ivan	ウクライナ	32:59.7	29.9	32:29.6	1:05:59.2
11位	TRITSCHER, Bernhard	オーストリア	36:11.3	30.6	31:25.8	1:08:07.7
12位	田崎 富士夫	日本	40:11.7	50.0	39:20.7	1:20:22.4
13位	HUO, Guang	中国	42:00.4	43.3	39:45.3	1:22:29.0
14位	ZHANG, Li Xin	中国	40:25.9	29.7	42:52.0	1:23:47.6
15位	KELESOGLU, Yavuz	トルコ	48:01.4	51.9	39:17.4	1:28:10.7
16位	SVEDAS, Ramunas	リトアニア				DNF
17位	BINGOL, Necmettin	トルコ				DNF
18位	KOCOGLU, Kadir	トルコ				DNF
19位	KACIR, Fatih	トルコ				DNF
20位	NYSTRÖM, Johnny	スウェーデン				DNS

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

クロスカントリースキー 3×10kmリレー男子 公式記録（2007年2月9日）

審査員

競技委員長	Scott Peterson	アメリカ
T D	Knut Kjoede	ノルウェー
Asst. T D	Reed Gershwind	アメリカ
ジュリーメンバー	Knut Kjoede	ノルウェー
//	Reed Gershwind	アメリカ
//	Scott Peterson	アメリカ

コースデータ

コース名	Soldier Hollow Olympic 5k A				
標高差	75m	極限登高	37m	合計登高	192m
周回距離	5 km	周回数	6回		

順位	氏名	国名	1周目	2周目	合計タイム
1位	DEGTIANNIKOV, Alexander	ロシア	14:42.6	14:42.6	1:24:40.8
			15:37.7	30:20.3	
	TISHCHENKO, Sergey		13:27.3	43:47.6	
			13:54.9	57:42.5	
	YUZHANINOV, Viktor		13:09.1	1:10:51.5	
			13:49.3	1:24:40.9	
2位	PYSHNYAK, Volodymyr	ウクライナ	14:50.1	14:50.1	1:30:17.6
			16:39.3	31:29.4	
	PYSHNYAK, Volodymyr		13:50.2	45:19.6	
			14:58.3	1:00:17.9	
	PYSHNYAK, Ivan		14:37.9	1:14:55.8	
			15:21.8	1:30:17.6	
3位	BINGOL, Necmettin	トルコ	17:39.2	17:39.2	1:44:19.4
			19:12.7	36:51.9	
	KOCOGLU, Kadir		15:47.4	52:39.3	
			16:54.3	1:09:33.6	
	KACIR, Fatih		16:17.6	1:25:51.1	
			18:28.3	1:44:19.5	

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

4位	田崎 富士夫	日本	19:03.7	19:03.7	1:51:25.0
			20:03.6	39:07.3	
	尾形 裕基		17:20.3	56:27.6	
			18:00.0	1:14:27.6	
	喜井 寛		17:59.2	1:32:26.8	
			18:58.2	1:51:25.0	
5位	LIU, Ming Ming	中国	21:45.1	21:45.1	1:54:08.4
			22:51.5	44:36.7	
	QI, Chang Ji		16:52.1	1:01:28.7	
			17:12.0	1:18:40.8	
	LIU, Pan		16:57.6	1:35:38.4	
			18:30.1	1:54:08.4	

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

クロスカントリースキー 2×1.3kmチームスプリント男子 公式記録（2007年2月10日）

審査員

競技委員長	Scott Peterson	アメリカ
T D	Knut Kjoede	ノルウェー
Asst. T D	Reed Gershwind	アメリカ
ジュリーメンバー	Knut Kjoede	ノルウェー
//	Reed Gershwind	アメリカ
//	Scott Peterson	アメリカ

コースデータ

コース名	Soldier Hollow Sprint Loop 1.3km				
標高差	42m	極限登高	36m	合計登高	55m
周回距離	1.3 km	周回数	6回		

順位	氏名	国名	1周目	2周目	合計タイム
1位	DEGTIANNIKOV, Alexandre	ロシア	2:41.6	2:41.6	17:35.1
	MAYOROV, Vladimir		2:40.9	5:22.4	
			3:01.4	8:23.8	
			2:59.8	11:23.6	
			3:00.8	14:24.4	
			3:10.7	17:35.1	
2位	ANDRIYISHYN, Andriy	ウクライナ	2:42.0	2:42.0	17:52.8
	PYSHNYAK, Volodymyr		2:54.5	5:36.5	
			2:54.1	8:30.6	
			3:05.0	11:35.5	
			2:56.8	14:32.3	
			3:20.5	17:52.9	
3位	NYSTRÖM, Johnny	スウェーデン	3:09.7	3:09.7	20:13.4
	SVENNINGSSON, Torbjörn		3:10.0	6:19.7	
			3:37.3	9:56.9	
			3:12.7	13:09.6	
			3:41.3	16:50.9	
			3:22.5	20:13.4	

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

Results

4位	LIU, Pan	中国	3:23.1	3:23.1	22:12.5
	QI, Chang Ji		3:29.4	6:52.5	
			3:51.0	10:43.5	
			3:44.7	14:28.2	
			3:50.3	18:18.5	
			3:54.0	22:12.6	
5位	田崎 富士夫	日本	3:19.6	3:19.6	22:29.5
	尾形 裕基		3:38.4	6:57.9	
			3:51.3	10:49.3	
			3:43.5	14:32.8	
			3:53.8	18:26.5	
			4:03.0	22:29.5	
	BINGOL, Necmettin	トルコ	4:35.3	4:35.3	DNF
	KOCOGLU, Kadir				

SALT LAKE 2007 DEAFLYMPIC WINTER GAMES

//Japan Team//Games Results

日本選手団本部

副団長兼事務局長 大杉 豊

(1)事務報告

冬季デフリンピック過去最高となる 4 個のメダルを獲得したことは、4 年前のスツバル冬季大会以降ソルトレークを目指して選手強化に取り組んできた方々、派遣準備に関わってきた人々、応援して下さった多くの国民に、最高の形でプレゼントになったのではないだろうか。今回のデフリンピック派遣準備に早い時期から関わり、現地では選手団事務局運営を統括した立場として、みなさん、とくに現地でお互いを支えあった選手団スタッフ全員と旅行業者、そしてサポーターたちに感謝の気持ちを申し上げます。

派遣準備は全日本ろうあ連盟内に設置された第 16 回冬季デフリンピック派遣委員会での方針決定をもとに進められ、主に①資金造成、②選手選考、③選手団編成、④啓発広報、⑤総監督の補佐に重点が置かれた。

資金造成及び啓発広報の取組みについては、全国的な募金と企業等への寄付お願い取り組み、及び秋篠宮同妃両殿下のご接見やマスコミ報道の飛躍的な増加などで大きな成果をあげた 2 年前のメルボルン夏季大会における取組みを継続することが基本的な方針となった。

これは、2 年ごとに交互に開催される夏季・冬季大会に単発的に対応するのではなく、継続的な取組みを行うという方針転換を意味する。今回新しく取り組んだものには、デフリンピックグッズ（クリアファイル）の製作販売、寄付企業のロゴをホームページに貼り付けるなどウェブサイトの効果的な活用、選手団派遣に

協賛するイベントでの広報活動があり、それぞれが成果を挙げた。また、広報活動では、スツバル冬季大会の金メダリストも含めて選手の協力をいただいた。とくに主将の原田選手は強化合宿地から東京に直行し、さらに翌日渡米するなど、強行日程をお願いすることになり、競技への悪影響が懸念された。それだけに、金メダル 2 個と完璧な成績を出した原田主将の活躍は非常に価値あるものと評価される。

選手選考は全日本ろうあ連盟スポーツ委員会と日本ろう者スキー協会との連携の下に進められ、日本パラリンピック委員会の方法をモデルにしての選手選考規程の制定及び運用が今回の特記事項として挙げられる。選考資料が聴覚障害を持つ選手の特性や強化環境に配慮した内容になっていたかどうかには事務局としての課題が残されたが、選考全体については総監督の報告に委ねる。

日本選手団を編成するにあたってのポイントは、①競技関係の取りまとめがスムーズに出来る体制作りと、②ろう者と健聴者間のコミュニケーション保障にあった。競技関係の取りまとめを強化するために、各競技チーム及び医療チームを総監督の下に配置する指示系統を決定した。コミュニケーション保障は、とくに選手団の宿舎が 5 箇所に分散することを考慮して、通訳者 4 名の配置を決定した。しかし、使用言語が国際手話、英語、アメリカ手話、日本手話、日本語と多様にわたる現場で、何の通訳がニーズとして求められるのかについての分析が出来ても、対応できる人材を揃えることができない問題があった。また、通訳者が何時間も続けて通訳を行うことが出来ないことや、電話通訳が通常に比して大変な労務であることなど、通訳者に関する理解を選手団全員に徹底して指導することが出来なかったことが、結果的に一部の通訳者に大きな負担をかけてしまうことになった。各競技の



選手強化取組みから通訳を含めたスタッフを確保及び育成することが、これからの大きな課題である。

日本選手団以外でも、旅行業者に宿泊と競技会場・大会本部間などの輸送を担当していただいたほか、日本ろう者スキー協会推薦 4 名のサポーターにアルペンスキー及びアルペンスノーボードのチームへの協力をいただいた。また、スキー競技の写真撮影を特技とするサポーター 1 名に記録としての写真撮影を正式に依頼した。写真は早速ウェブサイトにも速報として掲載されたほか、新聞や専門誌などにも提供されるなど、広報活動に効果を発揮している。

総監督を中心とする体制に大きな特徴のある今大会選手団の中、総監督が派遣までに担う業務には、ユニホーム準備、選手強化の進捗状況確認、ドーピング対策、栄養指導、事前練習の可否など現地との連絡調整が含まれた。詳細は総監督から報告されているが、総監督について業務を補佐する機能が事務局体制に欠けていたことが今回の反省点の一つである。これは、4 年間選手強化を担当してきた日本ろう者スキー協会のサポートを引き続いて派遣に活かす仕組み作りという全体的な課題と関わり、各競技監督の立場や役割の確認も含めて、4 年後のスロバキア冬季大会に向けて早期に検討されるべきと考える。

その他の特記事項として、選手団の参加登録が、国際ろうスポーツ委員会事務局で今回導入されたインターネット経由によるオンライン方式にて行われたことをあげる。事務局としては、この新しいシステムに慣れるための練習、早い時期での各競技監督との徹底的な確認、役員複数による入力内容の最終チェックにより、問題なく完了できたことを報告したい。サポーターなど協力者も含めて 40 名強の登録作業で済んだが、150 名以上の派遣になる夏季大会に備えておくことが求められる。

もう一点、結団式の現地開催について述べる。結団式では、日本選手団のスローガン「SPEED, SKILL, and VICTORY」の発表、安倍内閣総理大臣直筆メッセージ入りの日本国旗の披露、選手団主将の決意表明などを行ったが、ソルトレークシティの日本人コミュニティ代表の参加をいただいたほか、国際ろうスポーツ委員会アモンス会長を筆頭に執行委員全員が出席してくださり、選手の意思統一とモチベーション作りに大きな効果をあげた。ただし、結団式を出発前に国内でやるべきとの意見もあった。強化合宿や早い現地入りなどで日程調整に難があるが、国内実施は検討すべき課題である。

以下、大会期間中に大杉が担当した業務及びデフリンピックについての所感を報告する。



(2)大会期間中担当した業務

①国際ろうスポーツ委員会総会への出席：連盟スポーツ委員会山根委員長とともに 2 月 1 日～2 日に開催された総会に出席し、日本代表としての責務を果たしたほか、国際手話の通訳で委員長を補佐した。また、休憩時間を利用して、各国代表との情報交換に努めた。

②団長/総監督ミーティングへの出席：大会期間中連日朝 7 時 30 分から組織委員会にて開催された団長/総監督ミーティングに出席して情報収集を図ったほか、総監督からの質問や要望などを伝えて、組織委員会のトップダウン方式による解決を求めるなどした。

③行事関係の企画・運営：出発前から事務局で準備してきた選手登録、結団式・解団式の企画運営、そして開会式や閉会式への参加方法の調整などについて大きな方針を決定して、総務班に内容を指示した。

④インターネット広報：競技の記録を総監督と確認し、選手それぞれの公式コメントを集めて、契約カメラマンからの写真提供も受けて、メールマガジン及びウェブサイト速報の二つの方法にて、日本向けに発信した。

⑤映像撮影：CS 障害者放送統一機構との相互協力申し合わせにより、開会式などの行事や競技の一部をビデオカメラ撮影して、テープを統一機構に提供した。

⑥総務の管理：輸送担当者、経理担当者、スケジュール担当者の間で定期的に打合せを行い、無駄な労力や支出が出ないように調整を行う一方、総監督からの要望などに弾力的な対応を取るなどの決定をした。

⑦通訳/翻訳の管理：動き方及び業務内容の指示を行った。



(3)選手団本部の運営についての所感

①デフリンピックがろう者を主体として運営される国際競技大会である以上、新しい情報を確認できるのは、組織委員会か、各競技の TD 会議となる。この情報の流れや組織委員会の決定変更などに対応できる体制を準備したが、それでもやはり過去の大会と同じように情報の食い違いなどの問題が生じた。理由は二点。ひとつは国際手話コミュニケーションに長じたらう者が各競技チームに育っていなかったため、TD 会議の場で徹底的な確認が取れなかったこと。日本の選手やスタッフ、とくにろう者が国際手話による国際交流を積み重ねていって、それぞれが TD 会議で積極的に発言できるようになることは日本に求められる課題で

ある。もうひとつは組織委員会が決定事項の修正・変更をくり返す例が目立ったことにある。組織委員会が本部を構えるホテルに日本選手団本部の連絡事務所を設ける事前対策で対応できたが、これはデフリンピック全体の課題となるので、今後の発展に期待したい。

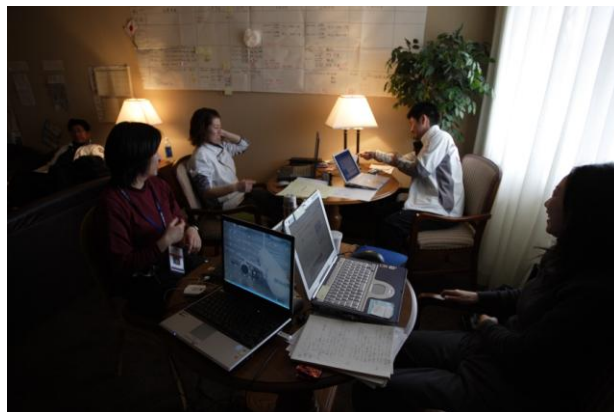
②日本選手団はコミュニケーション重視の観点から過去一貫して一つの宿舎を取ってきたが、今回は総監督と各競技監督の話し合いによる要望を尊重し、各競技会場に近い宿舎に分散する形をとった。この決断は高度のある競技環境への慣れなど好影響を選手に与え、好成績につながったが、その一方では各競技チーム間で情報格差が出たり、各競技チーム監督と総監督及び選手団本部の間で情報確認が取れていなかったりと、基本的な「ハウレンソウ」の部分での躓きを招いた。この点は事前に予想できていたことなので、旅行業者と連携してホテルのファックスの有無を確認したり、携帯端末を役員スタッフ全員にひとつずつ用意するなど対策を図ったが、現地に着いてみると、ファックスが故障していたとか、携帯端末の効果的な使い方に慣れるために時間を取られたとか問題が発生した。総務班が状況に合わせた連絡手段の変更などで対応していったが、旅行業者の周到な準備の上でも起こったこの問題は、情報通信機器の積極的な活用という視点が今までの日本選手団派遣に欠けていたことを示す。

③宿舎が分散したための直接的なコミュニケーション不足に加えて、各競技チームの選手は全員がろう者だが、監督は全員が健聴者、そして競技関係のとりまとめを行う総監督がろう者という構造が必然的にもたらすコミュニケーションの問題も選手団本部に大きな影響を及ぼした。各競技チーム監督が今までにこういう経験をもっていなかったために、コミュニケーションへの不満がすべて電話を取る手話通訳者にのしかかる結果となり、一部の通訳担当にオーバーワークを招いた。通訳者の意見を聞いて、電話通訳の時は必ず誰が誰に対して電話をしているのかをはっきり確認すること、通訳者の休憩中は他の通訳者に変わってもらうことなどの確認が出来たものの、通訳者に大きな負担のかかる状況は最後まで続いた。また、通訳者は通訳に専念するのか、それとも選手のお世話などもするのかなど、通訳者の位置づけに関する見方も団員の間で分かれていたため、選手団の中で、通訳者の活用に関する確認を事前に徹底しておく必要があったこと、これが今回の派遣準備における大きな反省点の一つであることは事務報告に述べたとおりである。

④各競技チーム監督と総監督及び選手団事務局の連携は限られた条件の中で最大の成果をあげたと思うが、各選手の強化を担当してきたのは日本ろう者スキー協会である。4年前のスンツバル大会から4年計画を立てて選手強化をおこなってきた日本ろう者スキー協会の力がもっと評価されるべきである。しかし、各競技チーム監督・コーチと日本ろう者スキー協会の連携が見えにくくなっていったために、選手団事務局と競技チームのコミュニケーションに軋轢が生じたときもあった。また、日本ろう者スキー協会が持てる経験と力を選手団本部に投入する仕掛けの工夫が望まれたように思う。

⑤事務局長として、現地到着後直ちに日本選手団本部事務局の立ち上げや細かい調整に対応するべきであったが、到着翌日から二

日間開催された国際ろうスポーツ委員会総会への出席があったために、対応できなかった。とくに現地到着から開会式までの数日間が選手団本部運営に大切な期間となるので、次回からは事務局長が総会の日本代表を兼ねることは極力避けるべきであろう。



(4)デフリンピックについての所感

デフリンピックは、古くから開催されている、ろう者によるろう者のための国際競技祭典である。近年のオリンピック運動の中で、パラリンピックがオリンピックに次ぐステータスを獲得しているが、デフリンピックは知名度の不足と大会としての完成度の不足から後塵を拝しているのが現状である。しかし、国際デフリンピック委員会(国際ろうスポーツ委員会)と加盟国の努力により、国際オリンピック委員会や国際パラリンピック委員会などとの友好関係もあって、知名度が国内外共に上昇している。大会としての完成度を高めていくためには、デフリンピック開催国の努力ももちろん重要であろうが、選手団としては、他国と共に正しい競技運営に向けての積極的な取り組みを展開することと、そしてろう者が主体となつての選手団による意思決定を速やかに出来るようにすることと考える。

この観点で日本選手団の現地での取り組みを評価するならば、今回は最高点を与えて良いのではないだろうか。選手一人ひとりが記録との勝負に集中できたこと、競技運営に対しての疑問点を積極的に抗議の形で示していったこと、選手団としての意見を組織委員会最高責任者に的確に伝えていけたことなどが大いに評価できる点である。また、今回初めて総監督を重視する体制を取り、いくつかの問題を解決していったことで、日本選手団が確実に成長を遂げている確信を持つにいった。

「スポーツ活動を通したろう者のエンパワーメント」は連盟の目指す新しい21世紀のろう者像のひとつではないだろうか。今回の派遣に関われたこと、多くの皆さんに助けられて任務を遂行できたことに感謝の気持ちをもって、今後もデフリンピック運動の発展に持てる限りの力を注ぎたいと思う。



(1) 選手選考と目標

ソルトトレック2007日本選手団の日本代表選手選考ではデフリンピック日本代表選手選考規程(本報告書の参考資料に掲載)により、日本ろう者スキー協会からの推薦をもとに、全日本ろうあ連盟冬季デフリンピック派遣委員会が日本パラリンピック委員会事務局長など関係者を加えた選考委員会を開催、過去の実績を重視しつつ、将来の展望もあわせて、17名を選考した。

現地入りする前に総監督として目標を下記の通り、ウェブサイトにて公表して大会に挑んだ。

『第16回冬季デフリンピック日本選手団は4つの競技チーム体制で世界にチャレンジします。前回の第15回冬季デフリンピック(スウェーデン)ではメダル金2個の成績でした。今回は前回を超える金3個、銀2個、銅1個と合計6個以上のメダル獲得を目標にあげます。アルペンスキー、アルペンスノーボード、クロスカントリースキー、ハーフパイプの各競技でプロのスタッフを中心とした体制による強化合宿の積み重ねで、選手は実力をつけてきました。今まで以上に鍛錬されたチームで最高の滑り、実力を世界にアピールしますので、ご期待ください。今大会出場のために練習に励んできた代表選手、また出場を果たせなかった選手のためにも前回を上回る成績をとれるよう、選手役員スタッフ一同、共にがんばっていく一存です。多くのご支援、応援をよろしくお願いいたします。』

(2) 競技成績一覧

各競技の成績一覧については記録一覧及び各競技チーム監督報告を参照されたい。

総監督として出発前に、上記の通り、全競技で入賞、6個以上のメダル獲得と目標を掲げたが、結果としてアルペンスキー競技で入賞がなく、全競技入賞は果たせなかった。メダルも金3銀0銅1計4個と、目標の6個には届かなかった。アルペンスノーボード女子パラレル大回転種目の準決勝において、競技運営上の問題に対しての日本の抗議が受け入れられたらもう一個のメダルが確実であり、またエントリー不足で公開競技扱いとなったハーフパイプ女子種目でもメダル獲得が間違いなかっただけに、目標の6個に届かなかったことで、非常に悔しい思いをした。しかし、冬季大会では過去最高のメダル数となり、皆さんに大いに喜ばれる結果になった。



(3) 成績と評価

各競技の成績と評価詳細は各競技チーム監督報告を参照され

たい。総監督としての総括は以下の通りである。

①過去最高のメダル数

スノーボード競技パラレル大回転及びパラレル回転の計4種目中3種目において金メダルを獲得した。これは4年前の2個から一つ増加しており、スノーボード競技アルペン種目における日本選手のトップレベルを不動のものとした。

スノーボード競技ハーフパイプ男子種目でも日本選手が銅メダルを獲得し、日本選手団のメダル総数は24か国中7位と、冬季デフリンピック過去最高の成績を上げた。金メダル獲得数では24か国中3位と米国に並び快挙となった。

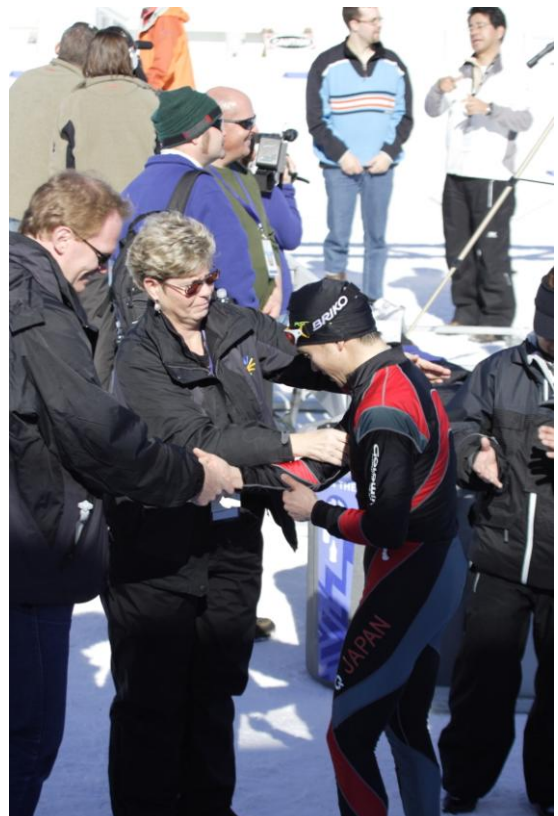
②その他の成績

アルペンスキー競技は4年前と比して順位的には同等であるが、参加選手数の減少を考えると、むしろ成績は後退したと断定せざるを得ない。ただし、基礎体力・基礎技術の向上を中心とした練習と国内外大会への参加経験の積み重ねにより、入賞が可能な位置にある。

スノーボード競技アルペン種目は金メダルを3個獲得したが、技術的にはあと2〜3名がメダル圏内であっただけに、メンタル面や体力面などにおける全体的な底上げが課題として残された。

スノーボード競技ハーフパイプ種目は新しく導入されたこともあり、女子種目が参加数の不足でノンメダル扱いとなったことは残念である。ハーフパイプ種目はこの先の発展により、日本選手が実力を発揮できる意味で絶好のスタート地点に立ったといえる。

ノルディックスキー競技はクロスカントリースキー各種目が実施され、日本選手は初参加になった。全体的に北欧の選手層と日本、トルコ、中国の選手層の間に大きな開きがあり、日本選手にとっては入賞よりは完走が目標となった部分もあった。この実力差を認識した上での長期的な選手育成取組みが課題となった。



(4) チーム体制と各スタッフの役割

総監督として4競技チームと医療チームを指揮下においた。

総監督 栗野 達人 (4競技チームと医療チームの統括)
監督 上野 英孝 (アルペンスキーチーム担当)
監督 安藤 直哉 (アルペンスノーボードチーム担当)
監督 金田由貴子 (ハーフパイプチーム担当)
監督 荒井 秀樹 (クロスカントリースキーチーム担当)
医師 明神 一宏 (現地での応急手当と医療担当)
看護師 市田 貴子 (医師の補佐及び看護担当)
通訳 豊島絵美子 (日本語-日本語通訳担当)

(5) 大会の競技運営などの報告

- ・ 全競技の TD 会議に出席して全体把握する方針で、行動したが、クロスカントリーのみ離れた所で開催されてた為、アルペンスキーとアルペンスノーボードとハーフパイプの TD 会議に出席した。
- ・ 全て国際手話とアメリカ手話で行われ、日本語も日本語がなかったが、自分の過去の世界ろう会議、渡米などの経験で習得した国際手話とアメリカ手話でコミュニケーションを図れるよう努力した。
- ・ しかし、現地の組織委員会が、突然変更したりする為に、大会本部から離れた宿にいた私が直接確認を取れず、事務局長に携帯電話メールで確認依頼など対応した。
- ・ 特に大会バーンで行われる公開練習が大事なので、毎朝、公開練習の時間と場所に変更あったりしないか？非常に神経を使った。
- ・ また各競技チームの練習中に怪我人が発生したと連絡を受け、医師の判断で治療、検査をして頂いた。また怪我状況により出場可能かも判断をして指示もした。
- ・ 今までコミュニケーション重視として日本代表選手団の宿舎を1つとしてたが、今回は全競技および全競技選手のコンディショニングを考えて全競技の各競技会場の近い宿舎に分散する方法を取った。そのおかげで全選手達が体調万全で挑める環境となったと思う。
- ・ 事務局の広報の為に、毎日各競技監督と連絡を取り合ったり、現地で各競技の記録を確認し、事務局長に常に連絡と情報収集に尽くした。



(6) 競技規則の適用(問題点など)

- ・ 詳しくは各競技チーム監督報告を参照。
- ・ 冬季デフリンピックはFIS(国際スキー連盟)規則に基づ

いて運営されるという事であったが、各競技の出場人数、競技レベルなどの事情でTD会議にて、変更される事も多かった。

- ・ 我が国は最初からFIS規則に基づく事を承知の上で、各競技監督達に徹底的にFIS規則で日本代表選手達の育成に尽くして頂いているので、問題なくスムーズに出来たと思う。
- ・ また各国の中でFIS規則を十分に理解されてなかった所もあり、もっと世界各国でFIS規則に基づいた選手育成について頑張ってもらいたいと感じた。

(7) 大会参加までの準備状況

- ・ 4年前の第15回冬季デフリンピックが終わってから、この4年間、日本ろう者スキー協会の中で各競技チームの強化に関わって意見を出したり、選手達の声を聞いて、次の第16回冬季デフリンピックに向けて色々準備と対策に尽くした。
- ・ また前回の第15回冬季デフリンピックで日本代表選手派遣がまだなかったハーフパイプ競技について日本代表選手の追加要望を出した。
- ・ 日本代表団選手育成の為にアルペンスキー、アルペンスノーボード、ハーフパイプ、クロスカントリースキーの合宿およびジャパンパラリンピックにも参加して全競技の監督達と話し合ったり色々視察もした。
- ・ 2006年の7月に日本代表団総監督の任命を受けて、本格的に各競技チームとの連帯と強化などに尽くした。
- ・ まず日本代表団ユニフォームについて前回の冬季デフリンピックユニフォームの流れ、反省点などを全選手達から聞いた上で、よりよいユニフォームで日本代表団らしい物にしたいと考えた。
- ・ しかし、最終選考会および発注時期が遅かった為、発注に支障が差し、大至急仲間などから協力を得ていくつかのメーカーと交渉をし、最終的に発注可能出来た。
- ・ デザイン仕様については、SAJナショナルチームとかトリノオリンピックウェアとかJPCウェアなども交渉したが、色々な事情によりオリジナルデザインウェアで発注する事にした。
- ・ また各競技にあわせて動きやすい手袋など競技ウェアも手配した。
- ・ 今回の冬季デフリンピックで課題になると思われたのは高地対応とドーピング対応などである。
- ・ それで、2006年9月23日に日本ろう者スキー協会主催でデフリンピック派遣委員会とJPCの協力を得て「アンチ・ドーピング研修会」を開催して全選手達を集めて色々指導、学んでもらった。
- ・ またJPCの協力を得て、大会開催3ヶ月前に食事調査と栄養調査をして、結果とアドバイスなど指導をして選手達のコンディショニングをして大会に向けて調整をさせて頂いた。
- ・ それは私がJPC合同研修会の「休養と栄養の指導」の講演会で3ヶ月以上前から、早く調査、対応した方がよいと教

えてくれたので、9月23日に早く説明、書類の提出などを指導しないと間に合わない判断の上で、午前の内容に入れて私から指導と説明をした。それも冬季デフリンピック選手達の今後の体作り、コンディショニングの為に必然と判断した為である。

- ・ それも総監督として全選手達の食事、体調などの管理責任の一つの務めとしての判断で色々を実施した。ただの役員だったら、そこまで頭が回らずやらなかったと思うが、総監督の任務を引き受けた時から、私なりに総監督として、選手の体調や現地の様子や相手の情報などを全てを頭に入れておかねばならない等、真の意味で選手をまとめる大きな『要(かなめ)』として、全選手に対してとか、全体的とか何をやるべきか?色々と学んだり、研究してきた。それで、それなりの判断をさせて頂いた上で成果を出せたと思っております。
- ・ 派遣委員会および事務局と連日、あらゆる面で確認と連絡を取り合い、準備に欠かさない様、尽くしたが、反面、まだ足りない所もあった。



(8) 反省・まとめなど

- ・ 冬季デフリンピック期間中、毎日、各競技チームおよび監督達と携帯電話で手話通訳を通して連絡を取り合ったが、時々電波障害で不通になったり再電話をしたりして手話通訳達に色々負担をかけてしまった事を非常に反省したい。
- ・ 全選手達の体調万全を考えて宿舎を分散する方法を取ったが、反面、怪我人が発生した時、即医療チームを送れなかった事など不便が生じた。
- ・ デフリンピックという国際競技で、不慣れもあったが、団長、事務局長、総務チームと医療チームと共に協力しあいながら進める事が出来て大いに助かった。
- ・ 競技中、一度抗議を提出したが、認識の違いで却下されたことを大いに悔しく思う。
- ・ 冬季デフリンピックは国際デフリンピック委員会と加盟国の努力で積極的に取り組まれ、開催されているので、我が国の日本選手団ももっと積極的に国際手話などでコミュニケーション取り、現地対応、競技運営に対して抗議、意見を出した事で、大いによくなってきていると思う。
- ・ 今回で色々に限られた範囲で日本代表選手団が前回よりも色々本領発揮して、ここまで成果を出した事を大いに評価して頂けると思える。



総務チーム 瀬川 奈美

「～SPEED(スピード), SKILL(技術) and VICTORY(勝利)～」でスタートした第16回冬季デフリンピック。

はじめに、金メダル3個、銅メダル1個獲得は勿論のこと、選手一人ひとりの大健闘、そして、総監督、各チーム監督・スタッフをはじめ、サポーター・手話通訳者・旅行業者・ココキッチン伴内ファミリー・応援者の方々、皆様の惜しみないご協力に感謝をしたい。

現地では、総務チームとして、主に事務局長の補佐(輸送、宿泊、行事関係の企画・運営、インターネット広報、各競技チーム・通訳者への指示 等)、デイリースケジュールの作成(選手団の行動管理)、経理を担当した。

まず、各競技チームに対する情報提供について、宿舎が1箇所であれば「情報BOX」なるものがあるが、今回は5箇所以上に分かれたことで、手段をメールに頼りすぎた面がある。メール環境が充分でなかった競技チームもあったため、朝タ1回はFAXする・フロントに届けるという方法に切り替えるも、ホテルのFAX故障、コピー機故障という不運も重なり、迷惑をかけた。

また、朝から夜にかけて携帯電話が鳴りっぱなしという、一部の手話通訳者は幻聴のような状態に陥るなど、非常に負担をかけた。健聴者の監督・スタッフの中には「電話通訳を介する」という経験がはじめての方もいらして、少しずつ理解していただくことから始めた。

どのスポーツもそうだが、競技チームの中で一緒に動くというのは、通訳業務以外に生活面も含めて想定外のことが起こりうる。それにも関わらず、手話通訳者の方々には臨機応変に対応していただいたことに感謝している。

前夜に配布したデイリースケジュールが翌朝の組織委員会の決定事項によってひっくり返るも、いつも変わらぬ笑顔で、辛抱強く付き合っていた旅行業者グロリアツーリスト/林様・廣瀬様に感謝している。パラリンピックとデフリンピックの両方を経験されたことは今後の強みになるのではないかなと思う。また、練習時から怪我や病気が多く、スキー場が二つに分かれていたため、医師の明神先生・看護師の市田先生は目まぐるしい忙しさだったことと思う。

しかし、限られた条件・環境の中で、今、出来ることは何か、

皆で意見を出し合って一番いい解決策を編み出していくことで、「一体感」が1日1日大きくなっていくのを感じた。皆さんが積極的に選手の中へ飛び込んで、自らコミュニケーションをとっていく姿勢には感動すら覚えた。wonderful!!!

今回、団長と事務局長がCSD評議員を兼ねていることもあり、事務局設営や連絡体制を確立せねばならない一番大切なスタート時に総務チーム2人だけで対応をこなしていくにはしんどいものがあった。競技が始まるまでが一番大変で、出発前からのコミュニケーションが充分でなかったこともあり、団長・事務局長・総監督間で「誰が意思決定するのか？」が非常に曖昧であった。選手団全体の「ほうれんそう（報告・相談・連絡）」がなかなかうまく行き渡らなかったのが、最大の反省点である。

いざ、応援に駆けつけると、電光掲示板がなく、スタート時に国際手話通訳者が「ゼッケン番号●番、JAPAN、●●選手、スタート！」と出し終わる頃にゴール！という有り様。このあたりは日本の全国ろうあ者冬季体育大会の運営の方が上ではないかと感じた位。

しかし、選手は勢いそのままにゴールめがけて突き進んで行く。雪のしぶきで、迫力をひしひしと感じた。

アルペンスキー、アルペンスノーボード、スノーボードハーフパイプ、クロスカントリースキー、それぞれが持ち前の精神で、日本人パワーを見せつけた。各国のトップアスリートと健闘を称えあう姿は同じ日本人として誇らしく思った。

また、スタート地点にいる監督からゴール地点にいるスタッフに無線で指示が入り、リフトに乗っている選手にスタッフが下から手話でアドバイスしているのもろう者ならではの武器である。

ろう者は拍手の代わりに頭の上でキラキラ星の歌を歌う時のように両手をクルクルさせるが、選手がゴールするたびに大勢の応援者から一斉にクルクルの拍手がたくさん舞う。メダル決定の瞬間、監督・スタッフと選手がコミュニケーションの壁を超えて喜びを分かち合うシーンは心に響いた。

表彰式では金メダリストの原田選手・笠井選手の時に日本の国歌・君が代が流れ、日本の手話通訳者が手話コーラスをすると、他の国のろう者も見よう見まねで一緒に歌ってくれた。また、地面を足でドンドン鳴らして、地響きで表彰台のメダリストに拍手を伝えるのもデフリンピックの特徴である。もっともっと、デフリンピックの醍醐味を日本にいる皆さんに味わってほしいと思った。

最後に・・・、私が全日本ろうあ連盟に入った（就職した）のも「デフリンピック業務に関わりたい！」という一心で、今回、そのチャンスが巡ってきた時は本当に嬉しかった。どんなことも楽しんでやっている自分にビックリ！

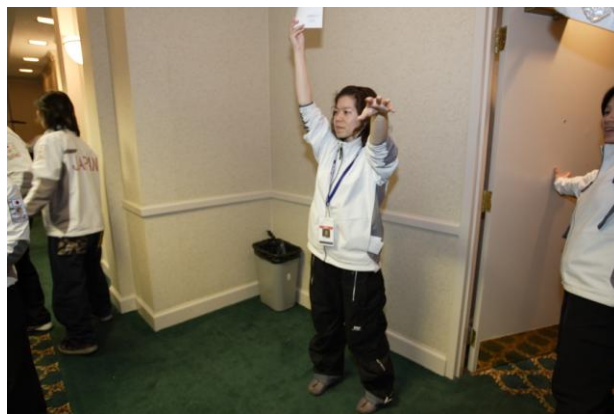
派遣準備は予算編成や代表選考等から始まり、出発までに約2年を要すると思われるが、本格的にスタートしたのが1年前である。全日ろう連という組織の中で、スポーツ業務に集中できる環境にないことがまず要因にあげられる。他の業務も抱える現状では、中途半端になりがちである。

今回を振り返って、選手団事務局は出発前からシミュレーション、国内大会・国内強化合宿等で現場慣れをしておくこと、役員や職員や手話通訳者も含めて、その都度担当を変えるのではなく、

「継続性」が必要だと強く感じた。

また、日本ろう者スキー協会が、2011年、2015年に向けて、4カ年計画、8カ年計画といった緻密な長期ビジョンを見立てていくとともに、健常者の競技団体とタイアップしながら組織力、競技力を向上させていかねばならない時期にある。

自分は選手と同年代ということもあって、近い将来彼らが監督やコーチになって、一緒に日本選手団を支えていけたらと思う。そして、オリンピック・パラリンピックに続いて、「デフリンピック日本開催」が夢である。



総務チーム 加茂下 和子

（１）担当した業務内容

毎日の記録・経理・連絡など総務全般

（２）反省・まとめ・デフリンピックについて思うこと

■デフリンピックについて

今回、初めて参加し、やはり生で体感出来るのは素晴らしいと思った。日本は金メダル3個、銅メダル1個の快挙であり、表彰式で日の丸が揚がり君が代が流れた時は本当に嬉しかった。そしてもっと日本国民がデフリンピックに関心を持つようにPRしていく必要性を強く感じた。

■反省

今回、宿泊地が大きく分けて4箇所であった。競技チーム毎にホテルが異なり、事務局は組織委員会のあるホテル、会場付近のホテルの2つに分かれていた。連絡には電話・FAX・メールを駆使し、移動にはレンタカーを用いた。

本部が2つに分かれているため、打ち合わせをするための移動時間だけでも大変であった。また組織委員会の決定事項が次から次へと変更になり、本部の人間全員が同時に新しい情報共有することが難しい状態であった。変更決定の時間も遅いので、毎日深夜まで打ち合わせをするという作業が続いた。その結果、各競技監督から連絡対応が遅いのご指摘を受けることもあった。

大会開始前は競技チームはトレーニング、本部は解団式や開会式などの打ち合わせがあり、宿泊地も離れているため、監督を含めた打ち合わせの機会がなかなか作れなかった。コミュニケーション不足、また本部と現場の考え方の違いをとて感じた。このままでは選手団として良い関係は作れないのではないかと、私たちがしている事はどのようにしたら伝わるのだろうかという内心不安な気持ちで一杯であった。

しかし大会開始後は試合観戦に赴き、現場の雰囲気を知り、監督・選手と直接あって話しをすることでコミュニケーションの部分は解決できたように思う。やはり電話やFAXだけでは伝わりきらないものがあるのだ。そして事務局も大会開始前の変更・変更の嵐で予定どおりに進まなかった事も、毎朝のミーティングときちんとした行動スケジュールを立てることで少しずつではあるが突発的な出来事にもうまく対応し、仕事が進むようになったと思う。大会終了間際に各競技監督を交え、会議を開くことができた。事務局への要望の中で、現地での対応の遅さだけでなく出発前の事前準備の段階で足が遅い、色々なことが出来たはず、現場に集中して欲しい。との意見には納得し反省した。

■まとめ・今後について

選手にとって会場に近い宿泊地を選んだ事が良い結果に結びついているのではないかなと思う。やはり環境を整えてあげるのは事務局の仕事だと思う。しかし事務局は分散せず、1つのホテルに宿泊した方が良いだろう。移動の時間や、深夜までの打ち合わせも減り、より打ち合わせ回数を増やすことが出来るし、情報周知もすばやく対応できるように思う。

また、出来るならば通訳と事務局員の人数を増やして欲しい。事務局体制が強化できれば、事前準備や選手へのバックアップもよりスムーズに出来ると思う。事務局の仕事もきちんと担当分けが出来、はかどるだろう。

そして大会出発前にも日本選手団内のコミュニケーションを深め、打ち合わせ回数を増やすなど情報共有をする必要があると思う。

今大会では最終的には力を1つにあわせることが出来たのではないかな、と思っている。事務局の対応の遅さ・情報周知の徹底などが欠けていた点について、この報告書で今一度お詫びをするとともに、軟弱な事務局に協力をしてくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。今回の経験が無駄にせず、次回大会へつなげたいと考えております。



総監督チーム 医師 明神 一宏

11日間練習、試合をふくめ役員、スタッフ、選手その他総勢約50名に対する医療活動をおこなった。問題点のみあげて責を果したい。

1、 試合会場が2箇所に分かれており医師、看護師を分けて配置したが、看護師単独の活動で充分であったか？これが数箇所に分散した場合はどうするか？

- 2、 選手団3箇所、役員2箇所の分散宿舎であり、最長約1時間の距離があった。配置車両の不十分さもあり夜間、早朝等緊急の足を含めたアクセス、連絡網に難があった。
- 3、 冬季であるため選手以外の役員、スタッフなどに感冒、不眠等のマイナーな内科的疾患がかなりみられた。個人での常用薬品、風邪薬、また選手諸君の消炎鎮痛薬、湿布類等はおのの持参すべきである。
- 4、 スポーツ大会であるから勿論、装具、固定器具、シーネ等は持参すべきとはおもうが重量はあるし、かさばるので分散している会場にいかにか持参し、その都度どこに置いておき特に緊急時にどう利用するのかが問題となる。今回はメイン会場に常設のユタ大学分院クリニックがあったため必要がなかったが
- 5、 ドーピングは2名に行われる旨予報があり準備したが結局実施されなかった。大会本部からこのプロセスについて事後説明もなく不手際が露見した。

会期中選手諸君の純粋さ、ひとなつっこさ、ひたむきさに感動した。益々の発展を祈る。

	役員 男	左肩痛、目痛、咽頭痛	セルタッチ、イソジン ガーグル、サジテン点 眼薬
2月3日	アルペンスタッフ 男	感冒、不眠	PL 顆粒、ダーゼン、 ハルシオン
2月4日	アルペンスタッフ 男	感冒	PL 顆粒、ダーゼン、 イソジンガーグル
			点滴 生食500cc c
	役員 女	感冒	PL 顆粒、イソジンガ ーグル、パナソ
	クロスカントリー 女	尾底骨亀裂（既往）	インテバンクリーム
2月5日	アルペンスタッフ 男	感冒	PL 顆粒
2月6日	アルペンスタッフ 男	不眠	ハルシオン
	ハーフパイプ 女	左腰部打撲	モーラス、セルタッチ
	ハーフパイプ 男	右腰打撲	インテバンクリーム、 ロキソニン
	ハーフパイプ 男	右下肢打撲	インテバンクリーム、 ロキソニン、テーピン グ
	スノーボード 男	右鎖骨骨折	ロキソニン
2月7日	ハーフパイプ 男	右腰打撲	スキー場クリニック 受診でX-P、松葉杖
2月8日	スノーボード 女	<u>右肩関節前方脱臼</u>	スキー場クリニック 受診でX-P、整復、固 定
			ボルタレン

2月9日	ハーフパイプ 女	左腰部打撲	セルタッチ
	スノーボード 女	感冒	PL 顆粒
	役員 女2名	感冒	PL 顆粒
	役員 男	左肩痛、目痛、咽頭痛	セルタッチ、イソジン ガーグル、サジテン点 眼薬
2月3日	アルペンスタッフ 男	感冒、不眠	PL 顆粒、ダーゼン、 ハルシオン
2月4日	アルペンスタッフ 男	感冒	PL 顆粒、ダーゼン、 イソジンガーグル
			点滴 生食500cc
	役員 女	感冒	PL 顆粒、イソジンガ ーグル、パナン



総監督チーム 看護師 市田 貴子

第16回デフリンピックでは、日本選手団の看護師として参加させていただいた。担当した業務内容は団員の病状出現時、医師への報告、医師の指示による薬の投与、内服方法や注意点の説明、経過の記録など、選手団員の体調の把握、苦痛の緩和であった。

まず選手達の中で一番多かったのがやはり骨折、打撲、脱臼といった怪我であった。クリニックを受診することにより診断が明確になり、その後は鎮痛剤などの内服継続により大きなトラブルなく経過した。そして役員やスタッフで多かったのが感冒症状の出現であった。出発から5日目に2人、帰国の前日に3人、帰国当日に1人にみられた。長時間の移動、環境の変化による疲労の蓄積、空気の乾燥などが要因であると思われるが、早めの段階から手洗い・うがい施行の呼びかけを定期的に行うなど、予防策を

講じるべきであったと感じた。

次に、宿泊地や競技場がそれぞれ離れた場所にあったため、薬の要望があっても早急な診察・観察・与薬、またその後の経過の把握が困難な場合があったが、医師と看護師が内服薬を持参しそれぞれの競技場に別れて待機したり、与薬後の経過を電話で確認することで対応した。このことにより少しでも迅速な対応、不安の軽減につながったのではないかと考える。

また、食事については個々やチームごと別々だったため、栄養管理が難しかったのではないと思う。環境の変化に伴う体調管理には食事が重要な要因であり、皆バランスのとれた食事を摂取できるような環境を整えられることができれば良いと感じた。

今回、遠征時、手話というコミュニケーションを通しての看護を行うという貴重な体験をすることができた。緊張や不安もあったが、皆の笑顔ややさしさに助けられ無事任務を終えることができた。たくさんの人達との出会いの中、選手達の頑張る姿、またそれを支える周りのスタッフ、役員が頑張っている姿を見て感動し、明るさに自分自身が励まされることも多々あった。今回、日本選手団の一員として同行できたことを誇りに思い、今後も看護師として頑張っていきたい。



総監督チーム 手話通訳 豊島 絵美子

(1) 主な職務

主に栗野総監督に付いて、総監督と各監督・医師等とのコミュニケーションにおける通訳を行いました。又、事務局間の電話連絡や打ち合わせなど、聴覚障害者役員同士の連絡にも電話の利用は多く、その際の通訳もかなりの時間を費やしました。他に、結団式、解団式では全体通訳を、事務局ミーティングや日常においても医師団、旅行代理店添乗員やJPCの中森事務局長など手話のわからない方の情報保障を行いました。また、TD会議（主にスノーボード）や各競技会場にも総監督に同行しました。競技会場では、コーチ陣のサポート（発表された記録の確認や選手への水分補給の手伝いなど）をしながら、抗議や怪我、ドーピングなどの事態に備えて総監督と待機をしました。

特別な通訳としては、結団式で参加者、来賓の為に4つの言語の保障をしたことがあげられます。①日本手話（選手、聴覚障害者役員用）②音声日本語（健聴役員、現地日系人用）③国際手話（来賓の外国聴覚障害者用）④音声英語（現地日系人用）。これには、日本語～日本手話（健聴者）、日本語～英語（健聴者）、日

本手話～国際手話（聴覚障害者）の３名の通訳者が通訳者の立ち位置やマイクの場所などを事前に考え、対応をしました。しかし、話者の言語に合わせて瞬時に頭の中を切り替えねばならず、非常に神経を使う通訳で、交代要員のいない中では３０分が限界でした。

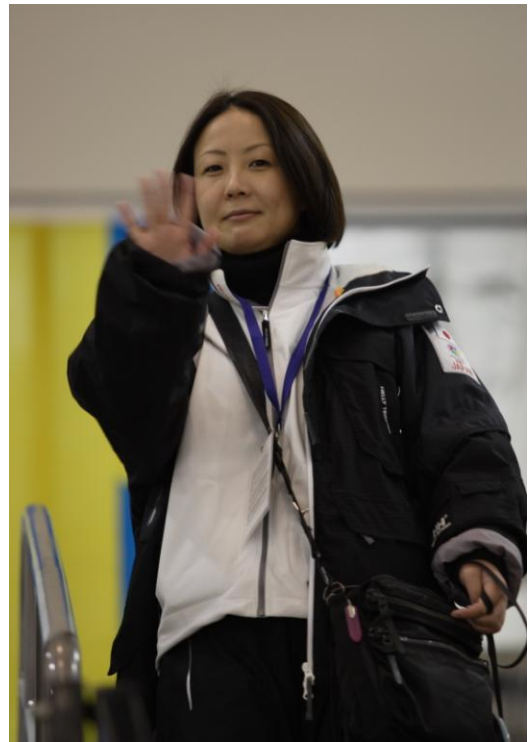
（２）まとめ、反省、デフリンピックについて思うこと

宿舎が５箇所に分かれていることもあり、情報の伝達ツールとして電話が駆使されました。情報や指示の伝達が遅れ、各チームからの問い合わせ電話で事務局会議を中断せざるをえないことも多々あり、効率の良い状態だとは言えませんでした。又、逆にチームにとって迷惑な時間に電話をしてしまったこともあり、反省材料のひとつだと思います。また、当初は事務局が２箇所になっていたことにより、電話による長時間の打ち合わせで通訳が必要になったり、移動手段が車以外になかったため必要ない人まで拘束され、通訳者、事務局員が深夜まで打ち合わせや仕事におわれることになった一因になったのではないかと思います。

大会会場では当然国際手話が共通言語であり、この習得は選手役員にも必要なことであると再認識しました。特にＴＤ会議へ参加する役員は必須であり、発言なし＝ＯＫとみなされる国際社会においては、自身の意見を述べられるくらいの言語力が必要です。又、競技方法や時間がＴＤ会議で変更されることもあり、それに意見できるだけの専門知識も必要で、聴覚障害者コーチなど人材の育成もこれからの課題と思いました。

今大会の監督陣は手話の出来る方が多く、選手とのコミュニケーションは問題がないように見受けられましたが、選手に聞くとやはり「わからないこともある…」との声がありました。私も、今大会のみならず合宿などで協力をしている手話通訳者として、手話での指導は健聴の監督陣に負担を与え、深い理解がなければ成し遂げられないと感じています。また、どんなに上手な指導者であっても、タイミングやイメージの指導や、視線が合わないと言えられない、動きながら正確に伝えることが難しいなどの理由で効率の良い指導は容易ではありません。「見よう見まね」でできるレベルでは問題がなくても、アスリートとしての専門的な技術習得の際には大きな壁の一つになっていると言えます。今後も引き続き、指導方法は課題になりますが、監督陣の熱意は十分に選手に伝わっており、それが今回の素晴らしい結果に繋がったのだと思います。

また、２週間聴覚障害者の中で過ごすことで、医師や看護師、旅行代理店添乗員の方々も手話や身振りが上手になり、表情も豊かになって選手たちとのコミュニケーションがスムーズになったことも嬉しいことでした。このように関わってくださった方々に聴覚障害者への理解を深めてもらえたことは、デフリンピックが「聴覚障害者だけのもの」ではなく、立派な「社会啓蒙活動の一つである」ことの証しであると思いました。



団長チーム 手話通訳 高木 真知子

主な業務：

日本語―英語―日本手話通訳（団長、副団長付き）・翻訳・総務チームの補佐

２年前の夏季大会に続いて２回目のデフリンピック派遣だったのと、事前にデフリンピック関連資料の翻訳を担当したという強みはあったものの、監督、選手、コーチの皆さんの顔と名前が一致しない、各競技の詳しい内容がわかっていないなどといった不安もあり、いま一つ自信を持てないまま日本を出発した。

到着直後から、大会本部のリトルアメリカホテルでの情報収集が私の業務のひとつとなったが、アメリカの大会組織委員会の立ち上がりが遅く、日程表は壁に貼られていない、各選手団への連絡ボックスが置かれている部屋には鍵がかけられていて開かない、上層部の決定がスタッフに伝達されておらず、最高責任者を捕まえなければ、何一つわからないなどといった状態であった。そのような中、ＴＤ会議や公式練習に関する正確な情報を集めるのは困難を極めた。

競技団体ごとに別なホテルに宿泊していたため、コミュニケーションを取り合うのが大変な作業となった。到着してからの３、４日間は食事をとる暇もなく、深夜まで各団体との電話通訳が続いた。電話を通して伝わってくる監督、チームドクター、スタッフなどの声の調子、ニュアンスなどを正確に汲み取り、通訳し、団長や総監督が正しく理解する様に橋渡しする作業は神経を使う作業であった。

通訳業務として、ひとつの大きな山場が結団式であった。地元ソルトレークの方々のための日英通訳の必要性は想定できたことだが、ICSDの役員が大勢見えて、国際手話、英語、日本手話、日本語の４言語対応になったときは、少々緊張した。それでも、

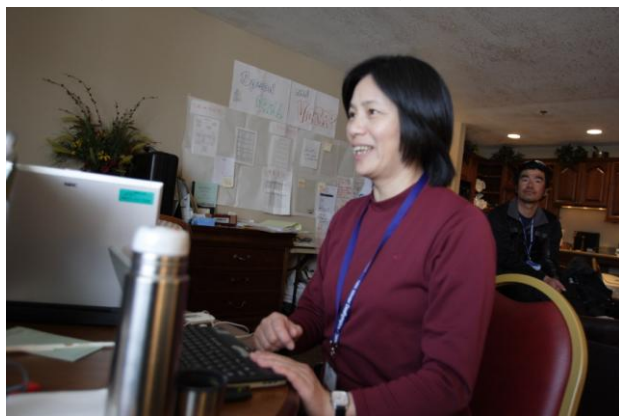
日本の選手団主催の結団式が真に「国際的」になり、大きな盛り上がりを見せたことは本当に嬉しかった。

開会式には日本手話通訳をつけてほしいという要望が選手、監督から出ていたが、今回はアメリカの組織委員会が国際手話以外の手話の使用を認めず、各国の手話通訳が立ってそれぞれの国の手話で通訳するのは「見苦しい」と言ってきたのにはいささか驚いた。何でも、WFD は国際手話より各国の手話を優先し、尊重するという方針を打ち出しているが、デフリンピックは国際手話一辺倒で行くとの説明であった。

競技が開始し、毎日、総監督会議や TD 会議が行なわれるようになって、やっと情報がスムーズに伝達されるようになった。スノーボードやハーフパイプの選手たちの快挙、クロカン、アルペンの選手たちの大健闘を応援し、喜び合うこともつかの間。また、帰国に関する情報伝達の通訳が始まる。

日本選手団が一つのホテルに宿泊するのではなく、今回のように複数のホテルに分散すると、手話通訳者の電話通訳などが早朝から深夜に及び、過労となる。これを改善する手取り早い方法は通訳者の交代要員を投入することだが、限られた予算と海外派遣のコストを考えると、これは無理であろう。ならば、せめてオペレーター用のヘッドホンのようなものを携帯電話につけて、ハンドフリーに携帯を使えるようにするくらいの工夫はあっても良かったとおもう。また、事務局全員が揃っている必要のない時間も多く、こまめに交代して、休憩や食事を取る工夫も出来たのではないかと反省する。

メダルを取った選手もメダルに届かなかった選手も、共に晴れやかな表情で「来てよかった！」と言ってくれる様子を見て、疲れが吹っ飛んだ。やっぱりスポーツは素晴らしい！



手話通訳 伴内華子

2007 年のデフリンピックにおいて、私は、日本のハーフパイプスノーボードチームとアルペンスキーチームと一緒に仕事をさせていただきました。また、大会日程が進む中で、スノーボードのアルペンチームともお仕事をさせていただくことができました。私の場合、通訳の仕事だけではなく、以前ソルトレークに住んでいた経験をいかして、スタッフや選手の方々へのアドバイスや道案内の点でもお役にたつことができ、嬉しく思っています。

私はアメリカ生まれですので、このお仕事をお引き受けする

ときには、自分の日本語力に少し不安を感じていたのですが、みなさんとお会いして、そんな不安は、すぐになくなってしまいました。

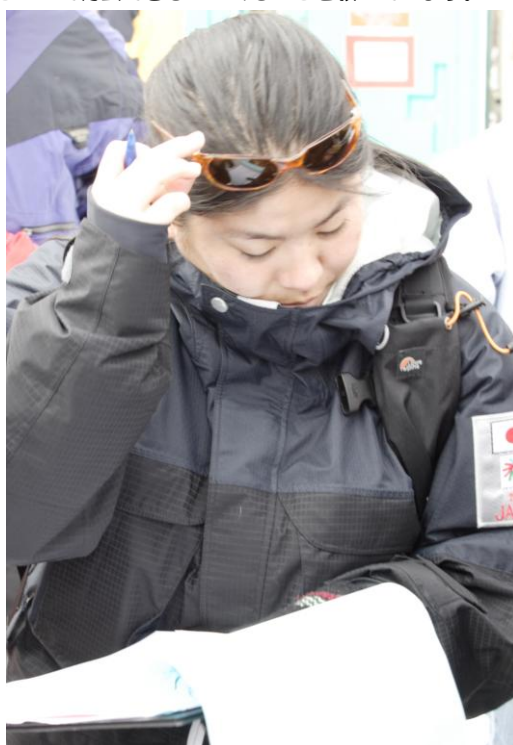
週の最初には、全チームがそれぞれの試合に向けて練習する様子を見ることができました。私も、以前はスキー選手だったので、その頃のことを思い出して、なつかしさがこみ上げてきました。試合の日が近づくにつれ、チームも、そして私自身も、気持ちが高まってきました。試合を待つ間は、長い時間にも思われましたが、あっという間に過ぎてしまったようにも感じられました。

その間に、なんとか医師のお世話になることもありましたが、素晴らしい医療サポートに恵まれていましたので、安心して過ごすことができました。パークシティでお世話になったクリニックは、アメリカのスキーチームが練習中に利用するクリニックでした。

デフリンピックでの全ての経験は、刺激的で思い出に残るものでした。ソルトレークシティに住む私の家族が、試合の応援にすることができたのも、嬉しいことでした。

こうした刺激的な経験の他に、私にとって、このデフリンピックが忘れられない思い出となる、素晴らしい出来事がありました。私の家族にさえも知らせていなかったことですが、デフリンピックが始まって数日後に、私は、自分の妊娠していることに気がついたのです。ですから、デフリンピックを通して知り合った素敵な方々のことを忘れないというだけでなく、私は、これから自分の子供を見るたびに、デフリンピックでの経験の一つ一つを思い出すことができるでしょう。

最後に、一緒にお仕事をさせていただいたスタッフの方々と選手のみなさんに、心よりお礼を申し上げます。みなさんのおかげで、とても楽しい、そして思い出に残る経験をさせていただくことができました。皆様の今後ますますのご活躍をお祈りすると共に、またどこかで再会できる日がくることを願っています。



手話通訳 亀和田 香

数ヶ月前に初めてデフリンピックの通訳依頼をいただいたとき、仕事が忙しい最中だったことと、スポーツ自体とまったく無関係な生活をしている私が、実際にクロスカントリー付の通訳という大役が果たせるのかどうかとても心配だった。ギリギリまで依頼受諾の返事を待っていただき、そして最終的に決断したものの、結局仕事に追われたまま予習がまったく出来ず、ルールも何もわからない状況でのスタートとなった。その点においては十二分に仕事をこなせたかと言えば、かなりの反省が残る。しかし監督をはじめ、コーチとスタッフ、そして選手のみなさんに助けをいただきながら、無事に任務を終えることができた。ロスアンジェルス在住のため、1月30日に渡米した日本団とソルトレークシティ空港で合流。たまたま待合の時間に、日本チームのサポート・ボランティアであるアメリカ人のろう男性に出会い、少しだけスタート前の打ち合わせができた。多少の状況がつかめてきた中、ロスアンジェルスで旅行業に従事した経験から、その日到着後の日本団の各ホテルまでの送迎バスが手配されていないことに気づく。グループと合流後すぐに添乗の方に報告し、間もなくバスの手配となった。私にとっては、これを皮切りに、この後の12日間、過去の仕事の経験が、様々な面で大きく活かされることが多かった。

(1) 業務の内容

クロスカントリー付通訳（アメリカ手話⇄日本手話・英語⇄日本語）。ホテルと競技場間の選手送迎。生活面でのサポートなど。実際にスタートしてみると、前述の役割以上の仕事内容で、内心非常に驚く。

(2) 初めてのデフリンピックを体験して・・・

ホテルにチェック・イン後、早速大きな問題になったのは食事であった。我々は競技場（ソルジャー・ハロー）により近い場所に滞在ということで、他のチームとは離れたところにクロスカントリーのみのステイとなった。リゾート・ホテルだったためレストランでの食費がかなり高く、支給範囲内で賄うことは非常に難しいこととなった。事前に電話で何回かホテルや観光局に問い合わせをしたものの、街にはレストランが少なく、毎日車を出しての外食もまったくの予定外である。現地合流ということもあったので、事前に監督にお願いし、チーム内だけのメーリング・リストをスタートし、日本から持参できる簡単な食事などについて情報を送り出していたが、実際にそれらを持参する選手がいなかったのが残念だった。また監督たち（コーチ・スタッフ）はコテージ・タイプ宿泊だったのでキッチン完備だったのだが、選手+私自身の部屋は通常の部屋だったため、部屋での調理はできない。毎晩監督の部屋でミーティングがあり、そのときにその場で食事の用意はできるものの、私一人で食事を作って食べるわけにもいかず、結局その後必要があれば、選手全員の食事の用意をすることとなった。料理担当はあくまでも私個人の選択だが、しかしデフリンピックに参加している選手たちが、毎日小さなサンドイッチだけでスタミナと気力が持つはずもなく、またそれ以上に競技で良い結果を出すためには、やはり食事は非常に重要なパートを占めると思われる。日ごろの食事にはできるだけ近いものが食べられる環境作りに、選手自身はもとよりスタッフももう少し配慮が必要と

思われる。実際の競技に参加するこのような大きな本番の大会に当たっては、今後も毎日・毎食の食事に関して、食費支給の増額や、あるいは全員がキッチン付の部屋に滞在可能にするなどの熟考が必要と思われる。結局我々は、数日おきにスーパー・マーケットまで買出しに行って、パンやチーズ、ハムやミルクなどを買って、それを朝食と昼食に当て、夜は簡単に日本食などを作った。

過去のデフリンピックは、食費どころか参加費用・渡航費用なども自己出費を避けられない状況だったとお聞きする。夏・冬に限らず、その季のデフリンピックが終わった時点から、次の開催に向けて、すべての準備をスタートできることが理想的だろう。その間にスポンサーを集め資金繰りをするのが、何よりも大きなプラスに働くと思う。資金が十分にあって初めて参加者の精神的安定が得られ、またスタッフの充実もはかれると思う。いつまでもボランティア的な感覚でスタッフたちの体力・気力のみに頼っていると、どこかで力尽きてくるのではないだろうか？

今後デフリンピックの知名度を挙げていくことが何よりも重要、かつそれに並行して選手陣が増えてくれば、やはりスタッフ増員も避けられないであろう。

私個人の反省点としては、通常はアメリカ手話と日本手話間の通訳をしていることと、何年も公での通訳を受けていなかったため、事前に、緊急時を除いては公での通訳（読み取りも含む）はお断りしていた。しかしながら最後の解団式で、急に読み取り通訳を、という指示があり内心冷や汗ものだった。幸いなことに「チーム通訳」をさせていただいたもうひとりの通訳の方に、途中で引き継いでいただくこととなったのだが、大変ご迷惑をおかけした。ただ今回の仕事で、自分にとっては、得意あるいは不得意な面がクローズ・アップされる良い機会になったと思う。解団式当日のスピーカーの方々、そして通訳の方に、この場をお借りしてお詫言するとともに、このような機会を与えてくださったことに深く感謝したい。クロスカントリーは他のチームと離れた滞在だったため、12日間ほとんど、他の競技選手やスタッフ、通訳者同士の交流がなく、個人的にはこれが一番残念だったことかもしれない。最後まで、他の通訳者の方々と親しくさせていただく機会もなく大会は終わってしまった。また、もちろんデフリンピックは「競技」が目的ではあるが、ホテルなどで他国のろう者との交流があると（今回は選手村がなかった）お互いの土気も高まり、また今後の各国との各競技内での交流のキッカケともなろう。競技を超えたところで「ろう文化」を堪能できる場がもう少しあると更に良かったのでは、と振り返る。最後に、ルールも何もまったくわからない私を、ミーティング中、競技中、TD会議中優しくご指導くださったクロスカントリーの監督・コーチ・スタッフの方々、そして選手たちに深く感謝したい。更には、本部の団長はじめ、事務局長、総監督、事務局員の方々、通訳の方々、日本から同行のお医者様そして看護師さん、またこの大きなグループを総括され、その他にもいろいろとご尽力いただいた旅行会社の方々に心から感謝したい。お疲れ様でした。



アルペンスキー

監督 上野 英孝

（１）選手の競技力について

選手選考については2006年2月に岩手県雫石スキー場にて行われた、全日本ろう者スキー大会の成績とSAJ公認スキー大会、各合宿の参加状況等を判断の基準とし、高畑コーチ、ろう者スキー協会の伏見、私の3人で決定した。最終的にはデフリンピック経験者の水口。未経験者でまだ20代前半の小池、池田の3名に決定され、次世代の選手育成を踏まえた結果となった。

選手の技術レベルについては非常に低く、現在FISルールにて採用されているスキーのレギュレーションを最大限使いこなしている選手は1人もいない。選手の技術レベルの問題というより、日本ろう者スキーの全体的なレベルの低さが伺える。しかし、現状このメンバーで最大限の成績を上げる他無い状況であった。

（２）成績一覧

2月8日

氏 名	競 技 種 目	成 績
水口拓也	GS（大回転）	DF
小池正人	GS（大回転）	15 位
池田和明	GS（大回転）	16 位

2月9日

氏 名	競 技 種 目	成 績
水口拓也	SL（回転）	12 位
小池正人	SL（回転）	14 位
池田和明	SL（回転）	DF

（３）成績と評価

成績を総合的に評価すると、選手全員技術的な問題以外に精神力の弱さを強く感じた。特に初出場の小池、池田については場に飲まれている感が強く、自らの持っている技術を十分に発揮できず終了した気がする。水口については、ベテランの意地でチームを引っ張るも力及ばずの結果であった。しかし、水口の果敢な攻

撃スタイルは「日本男児」らしさを伺える感もあり、若手2名には刺激になったことだろう。

結果的には良いリザルトではなかったが、次のスロバキアに向けて個々の明確な課題とチーム運営体制、コーチング方法、選手のモチベーション等を考えると課題の明確化ができたと感じる。

今後は国際大会の積極的な参加と、国内健聴者とのスキー交流や大会参加も必要だろう。

選手の強化だけではなく、新人選手の発掘や小中学生選手の育成も急務で、ろう者スキー協会の存在や、デフリンピックの存在を周知してもらう必要があるだろう。今回の様に悔しい思いをしないためにも、4年後、8年後に向けての選手育成と強化は日本ろう者スキーに必要なことといえる。



（４）チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

監督 上野英孝

通常時 コーチ業務全般、スケジュール設定、管理、合宿等のマネジメント全般コース管理、コース設定全般、車両担当

大会時 スタートでのスキー管理、ビンディング調整スタートでの選手管理、無線業務

コーチ高畑美優治

通常時 コーチ業務全般選手管理、手話通訳（TDミーティング等の国際手話）、コース設定全般

大会時 スケジュール管理、選手管理、選手サポート、コース途中での状況アドバイス（手話にて）

スタッフ 鈴木馨二

通常時 ワックス業務全般、スキーチューンナップ、質調査と気象管理

大会時 スキー管理、選手サポート、コース途中での状況アドバイス（無線にて）

（５）競技スケジュール（旅行スケジュール）

日 時	スケジュール
1月30日	成田空港集合、出発。 ソルトレイク、パークシティ到着。
1月31日	結団式。GSトレーニング開始。
2月1日	GSトレーニング。
2月2日	SLトレーニング。
2月3日	SLトレーニング。
2月4日	GSトレーニング。

2月5日	GS トレーニング。
2月6日	フリートレーニング。
2月7日	フリートレーニング。
2月8日	GS 競技。男子3名出場。
2月9日	SL 競技。男子3名出場。
2月10日	パークシティーからソルトレイクへ移動。
2月11日	ソルトレイク発。
2月12日	成田着



(6) 大会の競技運営などの報告

参加国や参加選手が少数の為だと思うが競技運営は意外とスムーズに進行していたと感じる。しかし、コース整備等にも少し考慮したスタッフ設定や運営をすると良かったのかもしれない。

(7) 技規則の適用（問題点など）

競技規則は FIS ルールおよびオリンピックルールに基づき実施されたとのことであったが、標高差やそれに対する旗門数、インターバルがあまりにも曖昧であった。また、FIS ルールが基本なのにも関わらず、セッターの FIS ライセンス提示等が無いまま、実施されていたことに対する疑問は残る。

(8) 大会参加までの準備状況

私が監督として就任し3年目の年に第16回デフリンピックが開催された。

ろう者と接し3年という短い期間であるがその3年間は非常に短く凄まじい勢いで過ぎ去っていった。

3年前から1年を通し計9回の合宿を実施し、選手間のコミュニケーションを図るだけではなく、選手選考や技術強化、肉体強化を図る。具体的には、正月とゴールデンウィークに雪上でのスキー技術をメインとした強化合宿。夏と秋には体力測定と筋力強化、また、ろう者の弱点であるバランス能力の強化を図る。

(9) 反省、まとめ

3年間の強化と今大会が無事に終了できたことは各関係各所、それに従事する人間や選手、スポンサー、勤務先の協力の賜と言えるだろう。

次回スロバキア大会に向けての現場サイドとしての試みは、選手強化だけではなく事務局と現場との連携強化による次世代選手の発掘とジュニア選手の強化だ。特に、成人になってからのスキー技術習得には時間がかかる故、小学生や中学生といった選

手の発掘は必要だ。そのインフォメーションには連盟の聾学校に対する情報発信とデフリンピックの存在をもっと多くの人に認知してもらうべきだろう。また、私達指導者や選手、事務局が1つになり営業活動をするのも方法の1つだ。

私が経験した3年間は、音の無い世界に生きる彼らの生き様そのものだったと思う。第6感を最大限活かし戦い抜いたアスリート達。私達は今回の教訓を活かし、選手に対しての練習環境整備や組織運営の整備に当たる。選手たちは次回スロバキアでこの悔しい思いをぶつけて欲しい。

我々アルペン選手、スタッフは目標のメダル獲得には至らなかったが、それ以上の収穫があり、その多くが評価できる。それは現場を理解し共に戦い抜いたからこそ共有できることで、それを文章にする事ほど難しいものは無い。ただ、1つ言えることは選手、コーチ、スタッフ全てが1つになり、共に戦に挑んだということだけだ。

最後に、今回のデフリンピックにスタッフ派遣のご協力とご理解を下された、北海道新得町社会福祉法人厚生協会身体障害者授産施設「わかふじ寮」、ホワイトデボ、ベネトンジャパン株式会社ノルディカ事業部の皆様と、日本聾啞者スキー協会選手全てに感謝し筆を置かせていただく。



スタッフ 高畑 美優治

今回のアルペンは、監督と選手3名、スタッフが2名計5名のチームである。現地にもポールはあるようだとの話は聞いていたが、出発のときまで、ポールを持っていくべきかどうか悩んでいたが、結果として持っていった正解であった。

それは、現地にあるポールは、数が少なく参加国で練習時間等を調節しなければならなかったのだ。無理をして持っていったが、自分たちの時間に合わせて自由に練習を行えることができた事は、とても選手のためにはよかったと思っている。

世界大会では、いろいろなことが起こる。以前の大会では、借りれるといわれていたポールが現地で借りれなく、他国のチームに頼んで練習をさせてもらったこともあったし、トランクが一人の選手のものだけ届かずヤキモキしたり、アクシデントとの戦いでもあると感じている。私たちは、日本を1月30日に出発し、31日にアメリカへ到着しソルトレークのパークシティにある宿泊施設に入った。

2月1日より現地の視察と練習は、コースの状態を確認するためにフリースキーを行った。ここは、2002年の冬季オリンピックが開催された場所でもあるので、コースの状態は、とてもよかった。しかし、標高が3000以上あるために、空気が薄く、息が荒くなりやすく、まずはその環境に体を慣らすための練習を行った。空気の薄いところでは、水を飲むと呼吸が楽になるとの事で多くの水を飲みながらの練習であった。現地での練習では、監督の指導のもと最後まで現地の斜面に合わせた体制やカービングスキーでのリズムの取り方を重点的に練習した。

私は、ポール運びや監督と交互にポールのセッティング、選手への助言等を行ってきた。また、監督とともにTD会議に出席し、アメリカの手話を読み取り監督へ知らせていった。

はじめからアメリカの手話を読み取れたわけではないが、会議に参加する回数ごとに理解できるようになっていった。また、読み取れないところは、以前より大会で顔を合わせていた各国の仲間がいたので、その仲間に聞いて教えてもらった。特にイタリアやオーストラリアの監督は、以前選手で活躍しており過去に何度も会い交流を深めていたので、その表現はとてもわかりやすかった。

私は、日本の選手のためにスラロームのポールセッティングをしたかったが、FISルールに準じてセッターの資格が必要とのことであった。競技の中では、回転が日本の選手がメダルを取れる可能性は強いので、その手伝いをするためにも、今後セッターの資格を目指したいと強く思った。選手は、世界大会という大きな舞台で度胸をつけながら、カービングを乗りこなす次の4年後を目指してほしいと思っている。



スタッフ 鈴木 馨二

はじめに、今大会に関わった団長をはじめ、事務局のみな様、医師、通訳の方々、本当にお疲れ様でした。無事に帰国出来たことを感謝いたします。

(1) 担当した業務の内容

私の今大会での業務内容は、大きく3つに分けることが出来ます。

①アルペンスキー選手3人のスキーターンナップ及びワクシング

②毎日の練習環境を整える。

③レース中、スタートにいる上野監督と無線での交信

まず①については練習から帰ってきた選手のスキーを次の日に備えて毎日ワクシングしました。

また、選手のリクエストに応じてエッチの調整も同時に行いました。

雪が少なくグレンデには石なども出ておりエッチが欠けるなどのトラブルもありましたがなんとかレースには万全の状態での臨むことが出来ました。

②については日本から持ち込んだポールや機材をリフト始発と同時にグレンデ上部に運び選手が出来るだけレース当日と同じ様な環境でトレーニング出来る様にした。

③については、レース中にスタート地点にいる上野監督にコース状況やチェックポイント(先に滑った選手の失敗の多い箇所)を無線で報告しスタートを待つ選手に正確に伝わるように努めた。

(2) 反省、まとめ、デフリンピックについて思うこと

反省はやはりメダルが取れなかった事です。

アルペンスキーは歴史が長くヨーロッパやアメリカに多くの優秀な選手がいてなかなか厳しいレースでした。この状況の中でメダルを取るにはもっと多くの経験を積み長い期間で選手の育成をしていかなくてはいけないと痛感いたしました。

僕個人的には今大会を通して選手から多くの感動や勇気を与えられました。

結果に関わらず、出場した全選手には今大会の経験を忘れずに今後の人生に活かして欲しいと思います。

オリンピック、パラリンピックは知っていましたが、恥ずかしながら、デフリンピックについては、正直、知りませんでした。しかし、今回、このような形で参加させていただき、聾唖の方と実際触れ合うことによって、このような世界大会を目指してがんばっている人がいる事を知り非常に心をうたれました。このような活動は、まだまだ日本では認知されていないように思います。私はデフリンピックをもっと知ってもらいたいと強く思います。そのために私に何が出来るのかを考え、これからも、デフの方への出来る限りのサポートをしていきたいと思っています。今回は本当にありがとうございました。



選手 水口 拓也

【結果】GS（大回転）DF・SL（回転）12 位

デフリンピックに出場して4回目ですが、今回は技術系のみの出場でした。

現地に着いてからレース日まで8日間もあり、自己体調管理・技術の調整・環境の慣れ・モチベーションの維持などが難しいと感じる事が多かった。

レース日までは、大会コースと同じ場所でフリー・ポールトレーニングを行ない、日本からポールを持参し、トレーニングできた事がよかった。その他にエアロバイク・プール・ランニング等の設備があり、雪上トレーニングだけでなく、様々なトレーニングも行なった。

レースでは、大回転での転倒が前回大会に続き2回目である。回転では、納得の行く結果ではなかった。特に緊張し過ぎている訳でもなく積極的にアタックした。しかし、カービングに対する技術がまだ活かされておらず不安や焦りはあった。

また一から出直して、精神・技術・体力を細かく再分析し、今後につながるような結果を出していきたいと思っている。

今まで支えてくださった、監督・コーチ・スタッフ・ボランティアの方々に心から、感謝します。本当にありがとうございました。



選手 小池 正人

2月8日はGS、2月9日はSLに出場しました。

GSの1本目は、初めて出たデフリンピックでの最初だったため、緊張しすぎて、攻められなかった気がします。2本目は、1本目よりももっと攻めようと気持ちで巻き返してやったけど、構えへの集中力が落ちてしまった為、タイムが少し遅かった。GSでの苦い経験をふまえて、次の日のSLは、思い切ってやろうと思いました。SLは、自分自身が好きな種目です。SLの1本目は、ミスも少なく良い滑りが出来たかなと思いました。2本目は、難しいセットがあり、それを乗り越えられなかった為、ブレーキをかけたため、タイムロスしてしまいました。全ての競技が終わった後、結果発表を見たら、1位選手のタイムとの差が6秒以上もあり、これが、デフリンピックのレベルだと、初めて痛感しました。全体で見ると、初めてのデフリンピックに出場して、デフリンピックの強さのレベルが、日本よりも高く、技術もうまく、びっくりした部分もあったけど、良い経験になり、楽しめました。



選手 池田 和明

大回転、17位 回転、途中棄権

自分の記録を見て、今でも納得できない。

この大会は初めてだったので、全力を尽くして入賞を狙いに行ったところが、回転は2本目で途中棄権、今まで練習してきたことをそのまま出せなかった悔しさと共に、今まで力になってくれたコーチやみんなの気持ちに応えられなかったことが何よりも悔しくて悔しくてたまりませんでした。

それから、世界レベルとの差を痛感させられました。

滑ったコースは斜度がきつく、バーン状況は非常に硬く締まり、こういうコースでの練習の不足を実感して、次のデフリンピックまで四年あるので、一年一年しっかりと力をつけて、全ての面において今以上にレベルアップして世界レベルとの差を縮めたいのです。

今回の機会で多くの課題が見られて本当に良い勉強になりました。この経験を生かして四年後はいい結果を残せるように頑張りたいと思います。

最後に、今まで支えてくれたみんなへの感謝の気持ちを忘れずに、また練習に励んでいきたいと思っています。



アルペンスノーボード



コーチ 森野 伊智

(1) 担当業務内容

今回のデフリンピックではコーチングスタッフとして勤めさせていただきました。

ただ、技術の面だけではなく私の選手経験を活かした戦術、精神面といった幅広い面から選手とサポートすること、特に選手が初めて経験するパラレルという競技において少しでも経験値を上げる為に現地に入ってから常と一緒に滑り、勝つ事にこだわりの持たせるといったのが今回の私の役割でした。

(2) 反省とまとめについて

金メダル3つということに非常に満足の結果となりました。原田選手の前回からの2連覇、そして2種目制覇は素晴らしい成果を挙げられた事と思います。笠井選手についてもPGS競技では惜しくもメダルを逃したものの、PSL競技では優勝といったすばやい気持ちの切り替えから成し得た結果だと思います。男子選手では原選手はPSL予選で2位につけたものの決勝ラウンドでは運営面での度重なるトラブルにより、集中できずに準々決勝で敗退してしまったことを残念に思います。彼の実力から言えばメダルも狙えたと思います。高島選手は公式練習中のケガで満足のいくパフォーマンスは出来なかったと思いますが今回の貴重な体験を生かして4年後に繋げて欲しいと思います。女子選手は各種目共に決勝に進む為には予選で数名が振り落とされてしまいましたが、2名が決勝へ進めたことは大きな収穫だと思います。ただ、パラレル競技はトーナメント形式であるが故、男子でもありましたが日本選手同士が対戦してしまい途中でどちらかが敗退してしまうといった事がありうるのでいかに予選を大事にして戦うことをもっと選手に伝えていければと思います。本木選手は、原選手は1種目で決勝進出をしたわけですが、やはりパラレル競技独特の緊張感にはまってしまったという感じで初戦敗退となってしまいました。

大会としては参加選手が少ない中でも各国が選手強化をしており、男女共にメダル獲得といった部分では難しいとさえ思いました。特にスイス、アメリカの2カ国においては急激な成長を見せ、前回の大会よりも上位選手のレベルはかなりアップしていた

と思います。ただ運営といった点ではオフィシャルの準備不足だったのか、開催地の協力が難しかったのかはわかりませんが幾度となく競技がストップされ、スムーズな運営とは言えませんでした。これは選手にとってかなりのダメージを与えますし、モチベーションは下がってしまいます。これでは最高のパフォーマンスをするのは難しくなってしまいます。

デフリンピックといった大きな大会ですので次回は運営サイドの準備を徹底していただければと思います。

全体的には、私の選手時代から今回のほとんどの代表メンバーと長い間一緒にトレーニングしてきたので、選手とはしっかりとコミュニケーションがあったと思いますし、全面からサポートできたことで今回の成果に繋がったと思います。御協力をして下さった方々に感謝させていただきます、有難うございました。



トレーナー 山本 敏美

第16回冬季デフリンピック大会を終えて

2006年から定期的に選手のトレーニング指導を行う様になり、2007年1月30日に第16回冬季デフリンピック大会の場所であるソルトレイクシティに降り立ち、アルペンスノーボードの大会会場であるパークシティに到着しました。今回私はコンディショニングトレーナーとしてアルペンスノーボードチームに帯同させていただきました。本格的にトレーニング指導を行わせて頂いたのは約1年ですが数年前から何人かの選手とは数回会ってトレーニング指導してきたので、今回は大会前の選手の身体の調整が主な仕事です。

具体的な内容は、午前中は選手が公開練習の時は一緒にレース会場に行き、選手の動きを確認し、監督、アシスタントコーチに選手の動きを確認し、それから選手自身に動きの確認を行い、足りない体力要素を引き出す為にトレーニング指導を行いました。午後はトレーニングジムでウォーミングアップを行い、ストレッチ、ステップワークトレーニング、プライオメトリクスを行いました。競技特異性を考え、レース前という事と選手の動きが重い感じだったためアジリティートレーニング（敏捷性の運動）を多く行いました。大回転のレースが終了後は回転のレースがあるため、さらに機敏な動きが要求されます。また、監督からも動きにリズムが欲しいと言う要望もあり、前日の練習ではゴムひもを利用したプライオメトリクスというジャンプ系のトレーニングを行いました。また、事前合宿の為に選手の身体の疲労がピークに

達してきた時はバーストレッチやジャグジーに入り、疲れを取る様に指示しました。

夕食をとった後は選手の身体のコンディショニングケアを行いました。その日の選手の身体の状態、滑った時の感覚などを確認し、アイシング、ストレッチ、テーピング、超音波療法、筋肉をほぐすなどの施術を行いました。テーピングは慣れていない選手もいる為、大会当日のみではなく、練習で滑って違和感がなければ大会当日も行いました。

レース当日はゴールエリアにいて、緊急事態への対応、選手への水分補給、監督からの連絡事項の伝達、レースタイムを選手に知らせるなど様々な事を行いました。

大会会場が標高 2000m以上と言う高地で行われたため、日本で低酸素下でのトレーニングも行い、環境対策も出来て、選手がベストの状態で開催に参加できる環境を作る事が出来たと思います。現地においてもよりよい環境で大会に望めるよう色々準備していただいた皆さんに感謝したいと思います。

今回金メダル三個獲得できたのはアルペンスノーボードチームが一つにまとまったいいチームになったからではないかと思っています。自分はチームの雰囲気作りが重要ではないかと考え、常に選手、監督、アシスタントコーチとコミュニケーションをとり、選手が緊張しすぎないように、またリラックスしすぎないように注意しました。これは自己満足になってしまいますが選手と会話をし、ハイタッチをするなどして選手を気持ちよく滑らせることが出来ました。また事務局の方々、通訳の方々、その他の競技に出ていた日本チームのメンバー、サポーター、応援してくださった全ての方々の支援、応援があつてのメダル獲得だったと思います。

初めて国際大会に参加させていただき、日の丸がてっぺんに上がり、君が代を唄えたことに非常に感激しました。ありがとうございました。



選手 原田 上

デフリンピック出場は2回目で、2003年スノーツバル大会にGS優勝、PSL 5位の結果になって以来、コーチと年一回、アメリカ・コロラド州にある高地のスキー場で合宿に参加、技術、スタミナ強化を鍛えてきました。また、海外選手の滑り、FIS海外大会を生で見て、パラレル競技での戦い方のイメージトレーニングをくり返しました。

2006年は6月と11月に参加した高地合宿にて、ポール練習など環境になれるトレーニングも積み、技術の向上、スタミナの強化への自信をつけて、ソルトレークに臨みました。ソルトレークでも早く現地入りした8日間、大会コースでのポール練習で滑りの技術を磨いたり、海外選手と交流を深めました。体調管理が不安定な部分もあり、自己管理を徹底した結果、PGS、PSL共に優勝することが出来ました。

これは、今までの4年間、海外合宿を含むトレーニングの積み重ねで身につけた体力と技術を発揮できた結果だと思います。



選手 原 伸一

パラレル大回転種目では予選を通過した後、決勝トーナメントで1回戦を突破したものの、次の相手が原田さんでした。結果は負けてしまいましたが、完走できたことでタイムの記録を残すことが出来た結果、6位となりました。

パラレル回転種目の方は予選で2位に入り、決勝トーナメントの決勝で優勝候補の原田選手と戦う意気込みでレースに臨みました。ところが、決勝トーナメント出番の直前に競技運営の方でトラブルがあつて一時間も待たされてしまい、集中力を保つことが出来ないまま、ゴールの手前で転倒してしまい、5位、メダルを逃してしまいました。悔しかったです。

現地入りして練習してるうちに膝の痛みが出てその心配もありました。精神面の弱さが出てしまったと思います。痛みが出て最後までレースに出場できたことは、自分でもよくやったと思っています。

PGS 6位 PSL 5位が私の記録ですが、アルペンスノーボードチームとしては金メダル 3 個といい成績を残し日本国旗を揚げる事ができたこと、それは私たちの誇りです。この結果はひとえに安藤コーチによる指導の賜物です。厳しい指導があつたからこそいい成績を残せたのです。今後は健聴者と競い合う機会を多く持ち、精神面をとくに鍛えていきたいです。

チームの中でいろいろトラブルがありましたが、コミュニケーションが通じるまで努力しました。スノーボードチームのキャプテンとしても、チームワークなかなかうまくいなくて悩むことが多くありました。しかし、最後まで自分の為にも頑張れて良かったと思います。チーム仲間のスノーボード板の修理も引き受け、原田さんのスノーボード板も修理したのが金メダルにつながったのだとおもいます。

これからも原田さんを追いかけて頑張ります。



選手 高嶋 弘貴

選手に選ばれて…

デフリンピックの選手選考規則を読んで、頑張らなきゃ！と目標をもって2年前から本格的に強化合宿に出たり、FIS など積極的に大会に出場したりしてアピールをしてきました。しかし、なかなか上位を取れなかったことでもしかしたら、と半分諦めていました。ところが全日本ろうあ連盟から通知があり、中身を開けてみたら「貴方は日本代表として、」という選手内定でしたので、大変驚きました。嬉しかったという気持ちよりも「本当に私でいいだろうか」という不安が大きかったです。連盟に聞いてみると「貴方は今まで良く頑張ってきて実績もあるから、将来的に連盟期待している」という話があり、はじめて日本代表としての気持ちが芽生えました。

デフリンピックの成績と感想

目標にしていた成績にまったく届かず、コースアウトと、良い結果を残せませんでした。自分の弱点を100%克服できていなかったとか、失敗したからというような言い訳はありません。見事に負けました。

今後良い成績を絶対取るぞという自分自身があることは嬉しいことです。世界を相手に戦う中で自分の弱点を見つけられたという貴重な体験を活かして頑張っていきたいと思います。

デフリンピックについて

デフリンピックは素晴らしい大会です。しかし、最近、若い人の冬季スポーツ人口が減っています。積極的に若い人にPRしてスノーボードの楽しさや面白さを伝えていかなければと思っています。

4年後について

勿論、出場できるように努力したいです。弱点の克服を課題に、4年間色々な大会に出場して上位に食い込めるようになることが目標です。



選手 笠井 彰子

●成績に対する自己評価

試合結果：大回転種目→予選2位通過、決勝4位

回転種目→予選2位通過、優勝（金メダル）

大回転は前大会よりオリンピックと同じようにパラレル形式が導入され、選手に今まで以上の体力（スタミナ）と技術が必要だと分かり、海外遠征への参加を増やしました。

前大会（大回転種目の男女アベック優勝）に続き、今大会も回転種目で男女アベック優勝出来て嬉しいです。

●反省・まとめなど

早い時期に現地入り（1月25日）して、パラレル大回転種目のある2月4日まで十分にポール練習をし、雪質や固さなどに慣れることができたようです。大会二度目の出場にあたり、4年間トレーニングを増やして、費用捻出が苦しい問題もありましたが、2回に及ぶ海外遠征をこなしてきた結果が私の成績に表れたと思います。

大回転は決勝トーナメントに上の方へ進んで行き、途中から痛みが出てきて、プレッシャー、集中力もあって、転倒してしまいました。もっと体力を作るべき、プレッシャーを無くしたい、集中力UPすべきと、反省することだらけでした。

回転の練習が少なくなりましたが、それでも金メダルに届いたのは、安藤監督、森野コーチ、山本トレーナーのみなさんのご指導があったからこそと思います。心から感謝します。応援して頂いた皆様、本当にありがとうございました。



選手 本木 理恵

競技種目 PGS�・PSL

結果 PGS� 予選落ち PSL 予選通過 準々決勝敗退

結果的には、PGSL 1本目に転倒し逆転をかけたが完走を目標に守りに入ってしまった。PSL 前種目の転倒に響いたのが完走することに守りに入ってしまったが、予選通過したもののトーナメント戦で日本人同士対決はもったいないと思う中、準々決勝敗退とメダル獲得にはなりませんでした。

選考から、デフリンピックまで数ヶ月と短い期間で、経歴の浅い私自身にもっと技術を磨かなくては・・・と置いていっぱいであった。日本のシーズン後、休まず6月にはオレゴン合宿、11月のカップ合宿の海外遠征での雪上トレーニングは、今回のデフリンピック開催地に伴い、高所トレーニングも兼ねたより良い練習環境が出来、コンドミニアム生活にも慣れて違和感さえもなかったといえる。しかし、その背景には合宿費用の自己負担や会社で休暇を取りにくいなどの問題があった。

この大会では、「楽しく自分らしく滑ってくる、そしてメダル獲得」が目標だった。以前にやっていたスキーと違って、ビンディングの位置、角度などの調整には、毎回変わり、自分に合う位置が曖昧なままであった中、現地入りして下降気味になっていた。多くの雪上トレーニングをこなし、技術取得し、トレーニング中で出来ている滑りを、ここで発揮することが出来なかったことを悔やむ。私にとって苦あり涙あり、多くの感動を与えてくれた大会だったとしみじみ感じています。

今回は、スタッフ体制も聴者3人（監督・コーチ・トレーナー）を入れ、無線でスムーズに連絡を取り合え、選手へ伝達できる体制はよかったと思う。今後、これを生かし、重視したスタッフ選出、サポーターの選出や役割を明白する体制を4年後に向けて組んでほしいと思います。

最後に、選考から海外遠征、国内合宿、デフリンピックまでの期間まで支えてくれたスタッフ、すべての方々に心から感謝します。4大会の経験を生かし、今後、逆の立場で支える側にたち、選手育成などバックアップしていきたい気持ちです。今までありがとうございました。



選手 原 節子

デフリンピック出場報告

2月1日～10日までの10日間、アメリカ合衆国のソルトレークシティで開催された冬季デフリンピックにスノーボード・パラレル大回転・回転の部に出場し、無事に帰国致しました。日本の成績は、メダル獲得数で、金メダル＝3つ、銅メダル＝1つ。私はベスト8入りまでで、残念ながらメダル獲得とはなりませんでした。メダルを獲得した日本選手と共に応援に来てくれた涙を流し、感激を分かち合いながらの閉幕となりました。

【成績について】

私はパラレル大回転での大会出場が初めての経験で、個人・一人だけで滑るのと、二人で競って滑る試合とでは、感覚がとても違いました。

競技スタート前は緊張しすぎていたせいか、普段通りにいかず、体が硬直気味でした。スタート後、同時にスタートしたアメリカ選手が転倒し、ぶつかりそうになったために避けるためにブレーキをしたり、その後に後ろから追いつかれて慌ててしまったりと、バランスの悪い滑りで練習の結果が思うように出せず、結果は予選は通過したもののトーナメントで敗退し、ベスト8入りとなりました。

【反省・まとめについて】

まず、国際大会の大舞台にあがるには、もっとメンタル面を勉強すればよかったと思いました。一定の緊張感を保持し、且つ緊張しすぎないようにと、緊張感とうまく付き合うことにより本来の力を発揮できますので、今後、健常者・ろう者を問わず競技仲間をもっと増やし、一般の大会に積極的に参加しながら、メンタル面を克服していこうと思います。

また、バランスが重要なので、何とかバランス能力をトレーニ

ングすることが大切ではないかと考えていました。



スノーボードハーフパイプ

監督 金田由貴子

（１）選出された選手の競技力

強化合宿では、現地のスーパーパイプに対応できるように、ハーフパイプの基礎滑走力を強化してきました。6月から短期間であったため、技の完成度はまだ高くありませんが、今後の国際大会で活躍できる基礎を確立しています。ハーフパイプの基礎滑走能力は安定してきました。しかし、デフリンピックでメダルに届くかどうか、微妙なところでした。

国内では一般のアマチュア大会で予選通過もできるかどうかという、まだまだのレベルです。

今後世界で戦うためには、スーパーパイプのある場所で、スピードと技を繰り返し練習することが必要です。

また、国際大会での経験が無く、その緊張がパフォーマンスにも大きく影響しました。メンタル面の強化、平常心の維持のためにも、海外トレーニングの必要性を感じました。

コンディショニング面では、アスリートとして筋力強化や日常生活（食事やボディーケアなど）も、選手個人の意識を改善すべき点が大いにあります。

日本代表選手の自覚を持ち普段から健康管理を心がけるように、各分野の専門知識を指導する機会が必要だと感じました。そして、それを実践してはじめて、国際大会での結果を出せるということを実感していただきたいと思います。

（２）競技成績一覧

（男子結果）

●出場選手：12名

- 1、 フィンランド
- 2、 アメリカ
- 3、 日本 本多 忠
- 9、 日本 花島大輔

（女子結果）

●出場選手：2名

●女子は参加国・人数が規約に満たないため、デモンストレーションとして開催。

- 1、 日本 鶴岡由佳
- 2、 アメリカ

（３）成績と評価

世界最大のスーパーパイプに対応できる基礎滑走力を目指し強化してきたため、現地のスーパーパイプを滑走できる知識や技術はあると思います。

現在、世界のデフスノーボーダーの中では、中の上ぐらいのレベルです。

基本滑走や標準技においては、まあまあ良い仕上がりになりました。

しかし、スピンの技数が極端に少なく、ルーティーンのバリエーションに欠けており、決め技が無いので、このままではメダル争いは難しいと思います。

デフのトップを獲るためには、ハーフパイプだけではなくスノーボーディングの基礎滑走能力を高めるため、スピードのあるフリーライディングやカービングターンをしっかりとこなし、ボードの操作能力やリカバリー能力を高めることが必要です。

そして、スピンを完璧にマスターするためには回数をこなす意欲や体力と、イメージどおりに動く身体作り（筋力トレーニング）も必須です。

今後は、次回に向けて広い範囲で選手を集めて、早い段階から選手を強化し、計画的にそれぞれの選手を伸ばしていけるように、チーム全体の底上げと強化を行いたいと思います。

（４）チーム体制と各スタッフの役割

●監督：金田由貴子：全体の監督、選手の生活・食事管理、強化指導、メンタル指導、国際情報収集、国際ミーティング

●強化コーチ：高崎雷太：選手の技術指導、ビデオ撮影とビデオクリニック、選手サポート、コンディショニング指導

●選手：本多忠、花島大輔、鶴岡由佳

→ マッサージ、怪我の対応、テーピングやコンディショニングのできるスタッフ（トレーナー）の必要性を感じており、今回は要検討。

（５）競技スケジュール

● 2007年2月9日（金）：

スノーボードハーフパイプ競技男子（女子はオープン種目）

9:00～ リフトオープン

10:00～11:00 公式練習

11:15～ 決勝 3本

→ ベストポイントで順位を決定

12:15～ 表彰式

(6) 大会の競技運営などの報告

●TD ミーティングについて

スノーボードは全種目まとめて行われるため、主に日程の近い種目について話し合われました。ハーフパイプ競技は、最終日程だったため、事前に情報収集や各出場国の要望を取りまとめることができ、競技ミーティングは順調に運営されました。

●現場の協力について

協議が順調に進められた理由に、ハーフパイプのコンディションが良い状態に保たれていたことや、会場となったパークシティの現場管理・運営スタッフが大会に慣れていた事が挙げられます。現場の協力は大きな力でした。

また、TD で発言するアメリカやスイスやオーストリア、そして日本の各ヘッドコーチが、オリンピックや世界選手権でもナショナルチームを指導するなど、国際大会の経験が豊富なことや、現場の状況を考慮できる人たちであることも大いに関係していると思います。

●次回に向けて

スロバキア会場においては、このような経験のあるスタッフをトップに配置し、競技運営の指示をする必要があると考えられます。

ハーフパイプは会場の設営に、現場の協力や技術者が必要不可欠です。リゾートにより雪質が異なったり、斜度やサイズが変わるため、必ず事前に現地の下見を行い、早めに対策を考慮した練習を行うことが望ましく、早めに現地入りすると良いと思います。

日本人スタッフが運営に加わることで、日本への情報伝達がスムーズになると考えられるので、今後ご検討頂きたいと思います。

(7) 競技規則の適用

競技は FIS 規則に基づいて運営されるということでした。しかし、今回は出場人数が少数であることや、選手の競技レベルとハーフパイプのコンディションを考慮して、TD ミーティングで話し合い変更がありました。各国の経験豊富なヘッドコーチにより、事前に話し合いが持たれて提案があり、現在のレベルに合ったより良い競技規則が設定されたと思います。

●ジャッジは世界選手権などの国際ジャッジで、ヘッドジャッジ 1 名、ジャッジ 4 名の計 5 名。

●ジャッジ全員の合計ポイントで採点。

デフリンピックのためのルール変更は下記のとおりです。

また、女子はデモンストレーションでしたが、男子と同様に採点を希望し実施。

今後、出場者の増加や技術のレベルアップに伴い、限りなく FIS 規則に近づくものと予想されます。

通常

1 次予選 (2 本のうちベストラン) ベスト 16 へ進出 → 2 次予選 (2 本のうちベストラン) ベスト 8 へ進出 → 決勝 (2 本のうちベストラン) 順位決定



デフリンピックルール

予選なしで、決勝 3 本のみ (3 本のうちベストラン) 順位決定



(8) 大会参加までの準備状況

前回のスウェーデンが開催されてから 4 年間あったにもかかわらず、強化合宿が開始されたのは 2006 年の 6 月からでした。それまでは選手選考の方法もはっきり決定しておらず、強化も全くありません。選手はそれぞれ個人的に練習していました。昨年、半年間の強化計画が始まり、夏季 (6~8 月) は基礎滑走力と体力測定、基礎筋力の強化、世界大会へ向かう意識の改善から始まり、秋季 (9~11 月) は基礎+個人的な技術指導、個人に応じた筋力強化、コンディション管理、冬季 (12~1 月) は実践練習という流れでした。

始めは代表としては程遠いスタートで、一般のスポーツ愛好家レベルにも及ばず、指導者としてどこまで向上できるかが課題でした。

選手を一貫して指導する監督や強化コーチに加えて、ゲストとして強化指導にあたったオリンピック選手や各専門の指導者により、トップアスリートとして当然の知識を改めて指導していただきました。

強化合宿の内容や理論は、日本のトッププロやオリンピック選手のものと同等の内容です。

しかし、それを実践する意欲には個人差があり、その差が秋になって数値に現れました。

選手は仕事を持っており、練習時間に限りがあるため、月一回、1 泊 2 日の合宿で段階を経ていく計画でした。そのために、次の合宿までに選手へ要求されることも大きかったのですが、本人の意思が技術向上の基になっていました。

冬季 (12~1 月) 合宿では、国内雪不足の影響でハーフパイプ設備がどこにも無く、思うように練習や調整ができませんでした。

今後はこのような事態を避けるために、早めに海外遠征を検討し対処したいと思います。

結果を求めるとすれば、このような準備は当然のことで、選手の伸びる内容を指導者が準備し、その指導者が指導に集中できるような環境を派遣機関が準備すべきです。

初めての種目ということで、主幹となる機関の関係者が種目の特性を理解していなかったように感じられました。

次回、同じ問題が起こらないように、現場の意見をとりいれたり、状況を視察するなど、しっかりご理解をいただき、対応をお願いしたいと思います。



（９）反省・まとめなど

ハーフパイプは個人競技であるため、本来はコンディショニングなど自己管理に任せる部分が大いにあります。しかし、今回は初めてであることや、選手の国際大会経験が全く無いこともあり、現地入りしてからはチームで生活リズムをつくり、大会に備えました。

到着後、すぐに大会当日のスケジュールに合わせた生活リズムに切り替えたために、比較的落ち着いて競技に挑めたと思います。現地での練習期間は怪我のリスクもあるため、選手の様子を注意深く観察して判断し、トレーニングと休養のバランスをとる必要がありました。常に集中とリラックスのバランスを考えていましたが、リラックスする時間が無いほど、選手達は競技に向かっていったと思います。焦りや疲労は怪我につながるので、トレーニング後のコンディショニング指導は必須でした。

代表選手意識に個人差があるため、こうした生活の規則をまとめるのは難しいところもありました。また、女子の協議がメダル種目でなくなったため、本人のモチベーションにも大きく影響しました。直前になって、このような決定がなされることに疑問を感じています。

今後は合宿で個人の意識レベルを高めて、大会にはそれぞれのペースで調整できるように準備しておきたいと思います。世界大会で平常心を保ち、自己の最高のパフォーマンスを実現するために、メンタルトレーニングを強化する必要があります。早く現地の状況をイメージすること、そして集中してトレーニングすること、繰り返し技を実践し身につけることが何よりも自信につながります。普段から世界大会を意識したトレーニングができる環境を用意したいと思います。

また、選手の混乱を避けるため、一貫した計画的な指導方法をとりたいと考えています。そのためには、継続して指導できるコ

ーチや健康管理指導を担当するトレーナーが必要で、それらの指導者の時間を確保しなければなりません。ボランティアではその責任は全くなくて、一時的で曖昧な指導内容になり、選手指導育成には役に立ちません。今後の体制として、４年間（最低１年間でも）継続していけるように、指導者へのサポート体制を考慮していただきたいと強く希望します。

（１０）デフリンピック冬季大会に参加して

今回、初めて公式種目となり、初参加させていただきました。参加した印象は、世界各国から集まったデフの選手スタッフ同士の絆が強いこと、アットホームでフレンドリーな雰囲気であることです。そして、デフのコミュニティをサポートする健聴者の協力が大きいことも感じられました。しかし、デフだけの大会であるということを強く主張しすぎると、逆に健聴者との隔たりを作りかねません。回りへの配慮や調和も考慮して、大会開催を継続していただきたいと思います。

【今後の要望】

- チームごとに行動しやすい体制作り（レンタカーの手配、通訳の配置、怪我の対応など）
- 現地ではそれぞれの役割に集中しやすいように、事務的なことや雑務を軽減し、事前にできることは準備しておくこと
- 事務局、各監督同士のコミュニケーションの確保→携帯電話があったが、使用方法の説明が遅かった。監督への連絡方法としてメール配信があるなら、事前にインターネット環境を検討しておいて欲しかった。
- あらかじめお互いの役割や提出する書類などを明確にしておき、それぞれ計画を立てやすく、役割に集中しやすい環境を整えていただきたい。
- 主幹となる機関（全日本ろうあ連盟、日本ろう者スキー協会など）の計画や方針を早期に検討し、余計な事務処理の手間を省き、それぞれが役割に集中できて、かつトップが全体を統括しやすい組織を確立すること。
- 選手の強化にかかる時間や労力に対して、指導者の専門分野にみあった金銭的なサポートを配慮すべきです。各専門知識を持つ今回まで協力をお願いしてきた指導者へは、これ以上、ボランティアでの協力を継続していただくことはできません。もちろんそれぞれに仕事や生活があります。コーチの高崎氏、トレーナーの武下氏、通訳の加瀬氏、他大勢の方々の心からのご支援があつてこそ、今に至るのだという感謝の気持ちを忘れず、継続をお願いするためには、是非ご配慮ください。その対応が無ければ、今後この指導体制での継続は不可能です。
- スポンサーの協力を得るためにも、デフリンピックのPRや選手のレベルアップは必須です。これまでの活躍をもとに、メディアへのアピールもしっかりしていただきたいと思います。



スタッフ 高崎雷太

(1) 担当した業務の内容

■技術コーチ：メンタル指導 ・ 技術指導 ・ 車両担当

(2) 反省・まとめ・デフリンピックについて思うことなど

■反省

選手の育成・選出そして大会出場までを1年にも満たない短い期間の中で行った。代表とされた選手達は精神的、肉体的に厳しい状態であったと考える。それは「日本代表」というプレッシャーと周囲の期待、大会出場までに「基礎体力」・「専門体力」・「技術」を修得するまでの期間が極端に短かったことが原因である。

技術コーチとして「成果」を求めるがゆえに厳しい要求を選手に加えてきた、結果として男子は銅メダル、女子はメダルレスであったがアメリカを破り1位となり初種目初参加のチームとしては上々といえるかもしれない。しかし、本来であれば選手を protect (保護)・support (補助)を優先し故障を防止しなければならないが、選手のほとんどがスポーツ障害と外傷を抱えながらの参戦となってしまった。これは非常に残念なことであり技術コーチとしては責任を感じるところであった、今後は選手の十分な安全と選手の教育・育成期間を確保した上での選手強化プログラムを作成実施することが課題と考える。

■要望とまとめ

デフリンピックを振り返り様々な問題点が浮かんできた、その多くが組織・企業の協力なしでは改善できないと考える。今回、技術コーチとして同行した立場から時期のデフリンピックに向けて早急に対応と改善が必要な内容をあげてみた。

①指定選手の環境整備と経済的サポート

②協力スタッフの精神的・経済的サポート

私が担任をした学生の中に「2006冬季トリノオリンピック」に出場し、スノーボードクロス種目において7位入賞を果たした選手がいる。オリンピック出場までには数々の国内外で行われるワールドカップの転戦が必要となった、また、トレーナーやマネージャーなど様々な人が選手をサポートし、トリノオリンピックに送り出した経験がある。これらの費用は保護者や学校が負担した。

世界を目指すウィンタースポーツには莫大な費用と時間が必要となる。海外遠征、国内においての陸トレ・雪上トレ

ニングと通年の活動が必要となり、そこには種目の特性を熟知した指導者やトレーナーが最低限必要となってくる。これらにかかる費用は選手個人や協力スタッフレベルでまかなう範囲を超えるため、組織・企業の経済的サポートが必要となる。

以上の要望はデリケートな問題である、予算・期間・前例の有無の関係では「要望」だけに止まる可能性もあるが、日本選手の質向上のため柔軟に理解を組織にしていただければと思う。いずれにしてもサポート体制の確立は単に選手の強化に止まらず、日本国内においてデフリンピックの更なる地位向上と、広く周知してもらうためにも一役買う内容であり、次期のデフリンピックにおいて「日の丸」が表彰台に登るためのプロセスになると考える。

■デフリンピックについて思うこと

ハーフパイプチームには様々な人の「協力」と「応援」がありこの結果に結びついたと考える。「感謝」の言葉だけではこの「恩」は返せないほど大きなものだった。また、デフリンピックには心を震わす「感動」がある、家族愛・友情・チームの結束があった。参加した選手・コーチが国を超えて互いの健闘をたたえ合いリスペクトする、なんて素晴らしいことと思った。この spirit (精神)を絶やす事無くデフリンピックは突き進んでほしいと切に願う。



選手 本多 忠

評価

怪我を恐れずに本番ぶついで頑張っていて滑りができたことで銅メダルを獲得したこと。

反省とまとめ

強化合宿などで監督・コーチとふれあう時間が短かったため、アメリカでの2週間の生活で、お互いに分かり合っていない事が多くていろいろ悩むことが多くありました。もともとチームのまとまりがよくなかったかもしれませんが、その影響に巻き込まれないように考えることに時間を費やしてしまったことが悔まれる点の一つです。

自分の怪我もありましたが、本番のルーティングで自分が持っている技を出せなかった面にも悔いが残ります。どういう技を選び、どう組み立てるかについて、コーチと自分の意見が違いましたが、これはコーチとのコミュニケーションが足りなかった

ことに基本的な問題があったのでしょうか。私はこの大会が最初で最後のつもりでいましたので、わがままを通してよかったかなとも思います。これから世界を目指す若手のために、コミュニケーションを大切にするチーム、そして世界で常にトップレベルを戦えるチームを目指してほしいと願っています。

役員の皆さまにお礼を申し上げます。今まで大変お世話になりました。決して役員たちの活動を無駄しないように、地元でも一人ひとりにデフリンピックの素晴らしさを伝えて広めていきたいと思っています。ありがとうございました。



選手 花島 大輔

◇成績に対する自己評価

自分自身にとってデフリンピック初参加であり、国際大会としても初参加であった。

成績は 12 人中 9 位となった。

自己評価としては本来のスキルやパワーを十分に活かしきれなかったと思っている。

◇反省・まとめ

・国内で強化合宿はあったが、全て 2 日間だったので、今回のデフリンピックのように競技日に合わせて連日、練習をすることは初体験であった。

その為、自分自身に『これくらい体力を残したら次の日に疲れが残らない』とか、『どれくらいケアをすればどれくらい疲れが軽減するか』といった経験が無かった為に競技日にあわせてコンディションを予想通りに整えることができなかった。

デフリンピックのような大事な大会以外で長期休暇を取ることは難しいと思うが、長期合宿を行ってこういった経験を得ることも必要だと感じた。

その為にもデフリンピック派遣委員会から各選手の職場等へ『長期合宿の必要性』を説く努力をお願いしたい。

また、ハーフパイプチームには専属のトレーナーが同行していなかった為、怪我や疲労に対するケアが十分にできなかったのが残念である。

今後からはハーフパイプチームとして、監督・コーチ・トレーナーの 3 人体制で常に行動していただけることを強く希望する。・ハーフパイプチームは選手と監督・コーチが同じ部屋で生活していたが、連日の練習でお互い意見が対立することも十分ありうることを考えると精神的な休養を得る為にも別室にするべきで

はないかと感じたので今後は派遣委員会や総監督の方で配慮していただけるようお願いしたい。

・日本国内のハーフパイプでは今回のハーフパイプのような 6m 級がほとんど無かったので世界規模であるハーフパイプを滑ったことは良い経験になった反面、練習不足を感じてしまい、競技日まで自分の技量を合わせていくことができなかった（もし、これがデフリンピック開催期間の初盤だったら今回のような成績は残せなかったと思うので終盤に開催されたことは安心材料になった。）

6m 級のハーフパイプで早くから練習することが良いのはもちろんであるが、その所在地が海外や北海道と関西や関東からは遠い場所になってしまう。

練習を積む為にも遅くとも 1 年前から開催地のハーフパイプや同等のハーフパイプのある海外や北海道で強化合宿を行っていたきたい。

・選手にとってデフリンピックまでネックになるのは練習の為に『交通や宿泊にかかる費用』であろう。ハーフパイプチームでは毎回の強化合宿費用として 1 泊 2 日で 31000 円を支払い、更に屋内ハーフパイプ施設利用料金 7000 円相当が『自己負担』となり、選手にとっては非常に高額で負担になってしまった。

強化合宿費用がどのように使われているのかについての説明が不十分であったことは、『監督と選手の信頼関係』を強める結果にはならず、今回のデフリンピックに向けて結成したハーフパイプチームのチームワークやモチベーションが低下する結果にもつながったようだ。この現状をデフリンピック派遣委員会にもご理解いただき、強化合宿の財政面での支援や指導の強化を強く希望する。

最後になりますが、デフリンピック及び競技に参加して忘れない経験をさせていただいたことは非常に感謝しています。自分もまたデフリンピック出場と入賞を目標に頑張りたいし、仲間にこの経験を語りデフリンピックの知名度の向上及び選手としての技術向上につながるよう応援や次回のデフリンピックに向けて納得のいく練習や競技ができるようフォローや改善に協力させていただければと思います。



選手 鶴岡 由佳

●成績に対する評価

初種目、初参加のデフリンピックであったが、残念ながら女子の参加数が少なく、参加国・参加数が競技開催条件に満たない事

で中止になりデモンストレーションとしての参加になった。しかし、主催者側の配慮からジャッジポイントが付き、女子二人参加の内トップにて大会を終了した。

競技後は、デフリンピック報道員からインタビューされ、公開練習のときのインパクトがあったという理由で多くの取材を頂いた。また、ジャッジらからは一般のFIS競技大会にも通用すると評価を頂き、改めて、今後の私的な課題の他、ハーフパイプチームとしての課題が明確となった。

●反省・まとめ

パークシティのパイプが6mという国内ではなかなか経験できない高さを経験し、改めて世界規模の大会の感動と素晴らしさを実感した。国内で練習してきた高さは最高部が5mで平均3-4mと雪不足もあり満足にトレーニングを積むことができなかった。むしろ、世界のレベルとは雲泥の差を感じた。大会開催日が全行程の最終日のため練習日程は非常に有意義なものとなった。

技術的にも精神的にも安定してきた大会2日前に監督・コーチからの要望でピンディングの位置を変更した。しかし、これまでのフォームが変わり調子が狂い何度も変えさせられたが間に合わず大会では満足なパフォーマンスができず悔しい思いがつのる結果となった。また、監督とコーチの意見が異なったり疑問を感じることも多々あった。国内の練習では合宿費請求が非常に高額で毎月1泊2日3万1千円と選手には非常に負担となっている。また、交通費・室内リフト券も自己負担でアスリートとしての基本的なトレーニングができず、毎日支払いのためだけにアルバイト等をしてきた。国内の全選手からは負担金が高額すぎるという苦情が相次いだ。生活費が精一杯の上でこんな請求はハーフパイプチームだけだろうか。本来持つべき「聾者スポーツ」の目的はいったいなんなのだろう。連盟始め、各チーム監督、コーチは選手達の練習環境を考えるべきではと感じている。

初参加ではあったが世界の舞台に立てる事、そしてろう者のメンバーと共に戦ってきたことは非常に良い経験になった。その経験を次の選手へ語り期待をかけられるよう応援していきたい。そして次の選手が満足できる大会ができるようにフォローや改善していきたい。

最後に色々なスポンサーの方・連盟・団長等へ色々お世話になりました。そして感謝を忘れずに四年後の選手の為、自分の為色々活動をしていきたいです。

ありがとうございます。



クロスカントリースキー

監督 荒井秀樹

第16回冬季デフリンピック ソルトレーク2007

クロスカントリースキーチーム 大会報告

クロスカントリースキー競技の報告と評価

監督：荒井、コーチ：小林・金谷

（1）日本代表選手の競技力

デフリンピック代表選手の競技力評価の前に、ある全国組織の障害者スポーツ団体の会議で「聴覚障害がスポーツに支障があるのですか？」という素朴な質問を聞いた事がある。

私達クロスカントリースキーチームのコーチスタッフが肌で感じたことを紹介したい。デフ選手たちは、情報の伝達やコミュニケーションを図るのに大変難しい中、それを感じさせないパフォーマンスを見せてくれている。

しかし、クロスカントリースキーなどテクニックが重要とされているスポーツにおいて、とても大切だと言われている「イメージ」である。それは、脳から筋肉へ伝えるものは、イメージで、これがないと筋肉に伝えられない。そのイメージをより鮮明にするためには、目からの情報とあわせて、耳からの情報がとても大切だと言うことである。

うまい選手ほどスキー板の音を立てないで滑走していく。だから、こども達には、分かりやすく「パタン、パタンと音を立てないで、スー、スーとスキーを滑らしてごらん」と教えたりする。

私達スタッフは、デフ選手と練習を重ねていく中で、イメージ作りは、目だけでなく、ひょっとすると耳から入る情報がとても重要ではないかということに気がついた。テクニックを教える上で、いかにあいまいな表現、擬音の表現が多いことか。

コーチたちは、極力日常の仕草に例えたり、工夫して説明してきたが、どこまで理解してくれているか判断するのが難しかった。あとで聞き返すと、まったく正反対のことを言っていたりもした。

スポーツの専門知識を持っている手話通訳の必要性をとて感じだし、聴覚障害を越えて、スポーツに取組む事の難しさを改めて認識させられた。

この強化の4年間を評価することより、これまで学んだことを、デフ選手とともに考えて更なる飛躍につなげたいと願っている。

そのような意味で選手個人の評価をしてみた。

◎田崎 富士夫（パナソニック）

フリー競技・クラシカル競技共にこなせる、チームの中で一番実力のある選手である。体格的には小柄であるが、技術面・精神面の両面において日本チームのエースとして欠かせない存在である。クロスカントリースキーの選手年齢は長く、マラソン競技に似ていると言われている。次期大会4年後をしっかりと見定めた総合的なトレーニングに取り組むことが求められている。特に、水泳・球技など色々なスポーツに取組むことも重要である。

◎尾形 裕基（長谷エシシステムズ）

フリー競技が得意である。若干膝・足首の関節が硬いため、下りの技術が苦手であり滑走フォームも小さく成りがちである。おとなしい性格で精神的に安定している好・不調の波が少ない選手である。チームの総務をこなしながらの練習は大変だったと思う。

チームの要として裏方の役割もこなしてきた。沢山の評価に値する。今後は、各部位の柔軟性を高めれば、必ず大成すると思われる。

◎工藤 敏博（本田技研）

フリー競技が得意である。スキーを滑らせる技術面において上半身・下半身の使い方が未熟であるが、心肺機能が高く長距離に強い選手である。精神的に繊細な面が見られるが闘争心はチーム1である。ガッツは誰にも負けていない。今後の成長が楽しみの選手である。4年後をめざしてトレーニングに励んでほしい。

◎喜井 寛（東芝メディカルシステムズ）

クラシカル競技が得意である。筋力・持久力面に弱さが見られ、レースの後半で失速してしまう傾向にあるが、チームのムードメーカーで向上心があり技術的にチームの中で一番成長している選手である。世界のデフリンピックの特徴に、スケーティングは強いものがあるが、全体的にクラシカルのレベルが低いと思われる。今後、クラシカルに特化した練習を積み、入賞を狙える力をつけたい。

◎山本 智美（王子製紙富士工場）

フリー競技が得意の選手である。筋力面に弱さがあり、精神的に不安定な面が見られるが、負けず嫌いであり、体格にも恵まれスキー操作・スキーを滑らす技術はチーム1である。今シーズンは2回、怪我をするアクシデントがあり思うような練習ができなかったことが残念だった。今大会参加した女子選手のなかでも、フォームなどのテクニク的には上位であったと思われる。

（2）競技成績一覧

選手の特長や高所・時差解消などを考慮し、選手が一番パフォーマンスできるレースを選択し臨んだ。また、重点目標をリレーにおいても調整も行った。

成績一覧は下記の通りである。

氏名	性別	スプリント (1.3k)	フリー (男15k・女10k)	パシュート (20k)	リレー (10k×3)	チームスプリント (1.3k×6)
田崎 富士夫	男		DNF	12	4	5
尾形 裕基					4	5
工藤 敏博			20			
喜井 寛		17			4	
山本 智美	女		10			

（3）レースにおける成績と評価について

◎田崎 富士夫

成績：フリー15k DNF パシュート20k 12位
リレー 4位

フリー競技は、スタート時に外国選手と接触し転倒するというアクシデントに遭遇し精神的ダメージのため、無念の途中リタイアとなったが、その無念さを晴らすようにパシュート競技では、周回を重ねる毎に力強いフォームで滑り続けた。リレー競技において1走という大役を命じられ、途中ポールを折ってしまうという今大会2度目のアクシデントに遭遇したが、見事にその任務を果たした。また、チームスプリントにおいても尾形と組み最後まで粘り強く滑走した。

◎尾形 裕基

成績：フリー15k 19位 リレー 4位

フリー競技では、スタート時より冷静な判断でイーブンペースを保ち、エース田崎の分まで全力で滑り続けた。リレー競技において2走を努め、田崎のロスタイムを挽回しようと懸命に力走したが、外国選手との実力差は縮まらなかった。また、チームスプリントにおいては、田崎と組み最後まで戦う姿勢を見せていた。

◎工藤 敏博

成績：フリー15k 20位

アップ・ダウンの激しく、標高の高いソルトレークのコースで、最後まであきらめずに完走した事は、多いに評価できると思う。今後は、体幹部の筋力アップとスキー技術（上・下半身の使い方・下り）の向上がタイムを短縮する要因である。

◎喜井 寛

成績：スプリント1.3k 17位

競技初日の競技であるスプリントレースでは、緊張感の中でのスタートとなった、残念ながら2秒弱の差で準決勝進出は果たせなかった。リレー競技では、アンカーを努め中国に後半追い上げられはしたが懸命に逃げ切った。今後は、持久力及び上半身の筋力を付けるトレーニングが必要である。

◎山本 智美

成績：フリー10k 10位

女子にとって大変厳しいコースであるが、最後まで力を抜かず、スキー技術（滑らせる旨さ）が所々に現れたレースであった。今後、外国選手に近づくためには、更なる筋力アップと持久力の向上が必要である。また、精神面での弱さも克服する必要がある。



（4）チーム体制と各スタッフの役割について

チーム体制・・・監督1名・コーチ兼waxマン1名・waxマン1名・通訳1名。

スタッフの役割

荒井 秀樹・・・チームに関する全ての責任者。選手の送迎・会議への出席と報告・エントリーを担当。

小林 卓司・・・コーチ兼ワックス担当。選手より先に会場入り。現地の雪温の計測・コース状況を判断して、大会用ワックスを選択、選手への技術的なアドバイスを担当。

金谷 浩克・・・ワックス担当。選手より先に会場入り。板のワッ

クス

亀和田 香…手話通訳。選手の送迎・必要であれば食事の準備。
監督と共にT D会議に出席、ASLだけでなく英語の通訳も担当。

(5) 競技スケジュールについて

デフリンピックの競技の特徴は、よりオリンピック競技に近づけたいとの意向が見える。しかし、日程的にも余裕がなく、5競技種目に対し、公式練習日が3日間であった。

公式日程が1月31日発表になった。スタート時間が変更されており、12時のスタートが多く、気温の高いワックスがあまり用意できなかったこともあり、スタート時間の変更は避けてほしいと感じている。



(6) 大会の競技運営について

2002年に行われたオリンピック・パラリンピックを経験しているソルジャーハローの運営は、とても経済的に行われている印象だ。各競技種目、運営、設備など総括する。

(公式トレーニング)

2月3日の公式練習においても、まだ5kmコースの表示がなく、要望をした。安定した天候も手伝って、コースも整備されていた。しかし、選手の控え室などがなく余裕の持ったトレーニングができる環境ではなかった。少なくともトイレの確保をお願いしたい。

(チームキャプテンミーティング)

競技会場のソルジャーハローで行われた。各国はソルトレーク市内のホテルからであったから、バスの手配など大変だったと聞いている。そのため参加しない国が多かった。デフリンピックではチームキャプテンミーティングをT D会議と表記しているが、F I Sルールでは、チームキャプテンミーティングと記している。会議への不参加国との交流ができず残念であった。

(スプリントレース1. 3km)

初めて採用された種目であった。1. 3kmコースで予選を全員(シングルスタート30秒おき)でまず走る。上位16名までが、準々決勝へ進み、4人1組で1着2着が上位へ進む勝ち抜き戦である。3着4着は、9位~16位がタイムで確定する。準決勝、決勝A、決勝Bと進む。決勝Aは1位~4位決定戦。決勝Bは5位~8位決定戦である。

このレースの仕組みを、理解していない国もあり、運営は大変だったようである。事前にF I Sルールを読むよう指導すべきである。

(マススタート15km・10km)

マススタートも初めての種目である。将来、個人スタートからマススタート(一斉スタート)に代わっていくのではないだろうか。それは、見るスポーツとしての勝敗の分かりやすさが求められていると思う。単純に先にゴールしたものが勝者というスポーツに変わっていくだろう。

(ダブルバシュートレース20km・15km)

この種目は、2種目のクラシカル競技とスケーティング走法のフリー競技を続けて行うレースである。スタートはやはりマススタートで、クラシカル走法10kmを走りきり、ビットインに入り、素早くスキー、スキーポール(ストック)、スキーブーツ(今は兼用できるバシュート専用のブーツがある。以前は、履き替えていた)を交換し、スケーティング走法で10km走り、先にゴールしたものが勝者という競技である。

(リレー3×10km)

11カ国のエントリー中、5チーム出場した。1走がクラシカル走法、2走・3走がフリー走法である。レース運営も非常に慣れており、最小人数で運営しているのが特徴である。

女子はチーム数が少なく、中止になった。

(チームスプリント)

初めて採用された種目である。1. 3kmコースを2選手で1周ごとにタッチし、3周ずつ周回する。タッチゾーンでワックスサポートしていた国は、日本、ロシア、スウェーデン、ウクライナであった。トルコは途中棄権した。スタートは一斉スタート。(フラワーセレモニー)

ゴール付近で行われたが、メダル関係者のみの寂しいフラワーセレモニーである。観客を集める工夫が必要である。国旗掲揚もなかった。

(会場・コース・設備など)

オリンピック施設を使っているため、非常に整備されている。役員を最小限にとどめ、大きなトラブルもなかった。お金のかかりすぎる運営費が批判されているが、今後スリム化の運営がすすむだろう。

(選手の輸送)

日本チームは、スタジアム近くのホテルに宿泊した。レンタカー2台で輸送したが問題がなかった。しかし、ソルトレーク市内からのバス輸送は本数も少なく、不評だった。特にワックスコーチの輸送ができず、混乱する場面もあった。

(7) 競技規則の適用(問題点など)

F I Sルールにのっとって開催されていた。また、スキーマーキング、補聴器チェックなども行われていた。今後、競技種目の選定が正しいかは議論が必要と思われる。

トップクラスのロシア、ウクライナ選手にとっても、15kmマススタート競技と20kmダブルバシュートは統合していいと感じる。個人種目を、スプリント・男子10k女子5kCL・男子15k・女子10kマススタートFTとしたほうがよりエントリー数が増えるだろう。

(8) 大会参加までの準備状況について

4年前、スツバルデフリンピック終了後から、デフクロスカントリースキーチームは今回のソルトレークデフリンピックを目標にしてきた。

チームスタッフは、パラリンピックチームと合同で練習を重ね

てきたことから、そのことをふまえて選抜した。監督・コーチは、選手がクロスカントリースキーを始めた頃から、ずっと選手の滑りを見ているので、特徴・性格なども十分に把握できている。大事な場面で適切なアドバイスができると考えたからである。

手話通訳もデフクロスカントリースキーチームが活動当初より、手話通訳の能力を見込んで、また選手とのコミュニケーションを円滑にする目的で、なるべく同じ手話通訳の方をお願いしてきた。

今回は事情により、当初予定していたスタッフ体制が若干変更したが、チームとして充分機能したし、チームワークにも支障はなかった。

(9) 総括と今後の課題について

今大会における日本チームの戦いは、初参加であったが善戦したと評価している。特に、怪我をしながら万全は体調ではなかったが10位と健闘した山本智美選手やスプリントレースにおいて、1秒差で決勝進出できなかったが喜井寛選手など全選手、わずか3シーズンのトレーニングでよくここまで成長した。特にコミュニケーションが難しい中、専門用語の手話や雪上での会話など手話通訳の方々のサポートがなければ、ここまで選手たちが成長できなかっただろうと思う。選手に代わり改めて通訳の皆様にお礼を申し上げます。

また、クロスカントリースキーのデフチームはパラリンピックチームと合同で練習や合宿を行っている素晴らしいチームである。デフ選手が、知的障害者の世話をしたり、視覚障害者のサポートをしたりしながら、障害の違いや理解を深め、おなじクロスカントリースキーの魅力に魅せられていた。

そのような中で迎えたデフリンピックは、幾つかの課題と今後の方向性が見えてきた。

それは第1に、デフ・ジュニア選手の発掘と強化である。ロシア・ウクライナの強豪選手を見ていると、社会人からトレーニングして世界に勝つことは極めて難しいと思われる。聾学校との連携が急務である。

第2は、選手たちが、大会の日を追うごとに大変なタイム短縮、レベルを上達していることである。今まで経験のない国際大会がとて選手を強くしている証拠である。これからは、数多くの国際大会へ派遣し心身ともに強くしていく事が重要である。2007年の3月に行われるデフヨーロッパ選手権大会には、チームの派遣をお願いしたい。

第3は、ろうあ者競技別団体の育成である。特に、ろうあ者スキー団体のコーチ、指導者を一日も早く育成することである。クロスカントリースキーにおいては、選手を兼ねている田崎選手がコーチングの勉強に取組んでほしい。特に、ノルウェーのTDより、田崎選手のTD立候補推薦があったのはとてもうれしかった。

第4に、全国ろうあ者スキー大会において、クロスカントリースキー競技を継続していくことである。残念ながら、2007年は開催されないと直前になって聞かれた。普及・振興・強化を考えた場合、日本国内において競技会がないことは大きく後退させてしまう。

ぜひとも、役員の方々には、スポーツを普及することは、とても長い年月が必要なんだということを理解してほしい。

そして、最後に、このデフリンピックは、デフの人達が主人公

となって発展させていくことがやはり重要で、それを、私たちコーチスタッフはできる限りサポートしていきたいと願っている。
以上



コーチ 小林 卓司

担当した業務及び今大会を振り返って

第16回デフリンピック冬季大会ソルトレーク2007にコーチとして参加致しました。今大会の私の役割は、主にコースの攻略及び滑走テクニックの指導、レース時のタイムチェックとワックシングのサポートという業務内容でした。ソルジャーホローのクロスカントリーコースは、標高が高い(1800m)だけではなく、世界でも1・2を競うアップ・ダウンの厳しいコースです。肉体的に厳しいだけではなく、長く続く登りを克服するには、強い精神力(粘り強さ)も必要とされるコースです。今大会は、マススタートやパシュート、スプリントというレースが主で、選手が同時にスタートすることになります。スタート時に他の選手のペースに巻き込まれることなく、選手には自分のペースを守って、リズム良い走りを前日のミーティングやレースの最中に指示しました。また、下りもカーブが多いため、ステップターンやクラウチング姿勢をしっかり取るように指導しました。

また、フリー競技(男子15k)やパシュート(20k)のレース当日は、かなり気温が上昇したためコースに日本チーム独自の吸水ポイントを設け、水分の補給を行うことも指示しました。選手は、指示通りに自分のペースを守り、上り坂もリズムを取りながら歯を食いしばって上ってくれました。緩斜面でのアップ・ダウンでも酸欠状態になりながらも、トレーニングしてきた滑走技術を使おうとし、自分の持っている力を全て出そうとする姿勢が見られました。現時点では、ロシア・ウクライナという強豪には大きく水を開けられていますが、リレー競技や個人種目で、日本の上にランクするトルコには次回大会では勝ちたいと思います。そのためには、今回出場した選手の更なる強化(基礎体力の向上とスキー技術の向上)と新人選手の発掘が急務となっています。更に、ロシア・ウクライナと肩を並べメダル獲得のレベルに達するためには、スタッフ体制や強化費用等の諸問題を解決し、長期展望に立った強化体制の充実が必要であると感じた大会でした。



スタッフ 金谷 克浩

担当した業務の内容

ワックス担当及び各選手スキー手入れを主に業務として今回携わりました。

まず最初に大会会場のソルジャーハローに2月1日に行き各選手のトレーニング用のスキーを整備し、現地の各時間帯(1時間毎)の気温・雪温を調査しコースを回り雪質をチェックし大会用のワックスを決める為のテストを大会前日までの3日間、午前・午後と行いました。

テスト内容は3台のテストスキーをそれぞれ1台ずつ気温・雪温に合わせ同種類の雪温違いの混合、異種類の雪温違いの混合、各単品をスキーに塗り大会の各スタート時間に合わせ測定し、3日間のテストの統計を出し荒井監督及び小林コーチと検討し主体となるワックスを決め、大会当日はスタートの3時間前には会場に着き選手のアップ用のスキーを作り気温・雪温を測定し何種類かテストし本番用ワックスを決め、スタート30分前に選手にスキーを渡す様にしました。

大会を振り返って

今回、自分自身もクロスカントリースキーチームと同じで、初めての海外での大会参加であり、又、デフ選手とも初めての交流で、自分自身に余裕がなく、手話も上手く使えず選手の皆とコミュニケーションがなかなか取れず、意思の疎通が上手くいかない事があり、選手にはストレスを与えた様に思います。

この経験を活かしこれから子供達の指導者として又パラリンピック・デフリンピックのクロスカントリースキーに携わる者として、一人でも多くクロスカントリースキーの楽しさを指導して行きたいと思います。

今回デフのクロスカントリースキーチームは世界との差を身に染みて分かったと思いますが、今回参加した選手・スタッフこれから関わる皆で4年後に向けて頑張りましょう。

ソルジャーハロー 2007 2月1日(木)

AM10:00 気温-4℃ 雪温 -9℃ 天候 晴れ

AM11:00 気温-4℃ 雪温 -9℃ 天候 曇り

AM12:00 気温-2.5℃ 雪温 -6℃ 天候 少雪

ワックステスト用スキーNo.1

ベースワックス CH6 トップ HFBD7

ワックステスト用スキーNo.2

ベースワックス CH6 トップ HF7

ワックステスト用スキーNo.3

ベースワックス CH6 トップ LF6

テスト結果 1 No.1 HFBD7

2 No.2 HF7

3 No.3 LF6

ソルジャーハロー 2007 2月2日(金)

AM9:00 気温-8℃ 雪温-11℃ 天候 晴れ

AM10:00 気温-3℃ 雪温-11℃ 天候 晴れ

AM11:00 気温-3℃ 雪温-5℃ 天候 晴れ

AM12:00 気温0℃ 雪温-5℃ 天候 晴れ

ワックステスト用スキーNo.1

ベースワックス CH6 トップ HF8+HF6

ワックステスト用スキーNo.2

ベースワックス CH6 トップ HF8+LF6

ワックステスト用スキーNo.3

ベースワックス CH6 トップ HL6

テスト結果 1 No.2 HF8+LF6

2 No.1 HF8+HF6

3 No.3 HL6

ソルジャーハロー 2007 2月3日(土)

AM7:00 気温-15℃ 雪温-12℃

AM8:00 気温-18℃ 雪温-13℃

AM9:00 気温-9℃ 雪温-12℃

AM10:00 気温-9℃ 雪温-12℃

AM11:00 気温-5℃ 雪温-11℃

PM9:00 気温-3℃ 雪温-8℃

ワックステスト用スキーNo.1

ベースワックス CH6 トップ HF8+LF6

ワックステスト用スキーNo.2

ベースワックス CH6 トップ HF8+LF6

ワックステスト用スキーNo.3

ベースワックス CH6 トップ HF8+HF6

テスト結果 1 No.1 HFBD8+LF6

2 No.2 HF8+LF6

3 No.3 HF8+HF6

ワックステスト結果

3日間新雪が降らず雪質があまり良くなく大会期間も同様と判断しHFBD7・8を主体にHF・LFを混合し、大会当日の天候・

気温・雪温、日に合わせワックスを決める事にした。

ソルジャーハロー 2007 2月4日(日)

大会1日目 男子スプリント 1.3k クラシカル

AM10:00 予選男子スタート 喜井

AM8:00 気温-4℃ 雪温-9℃ 天候 曇り

AM9:00 気温-4℃ 雪温-9℃ 天候 曇り

ベース CH6 トップ HFBD8+LF6FL4 混合 セーラー7

グリップ TOKOVD10+SWIX VR40+V30

ソルジャーハロー 2007 2月5日(月)
大会2日目 女子10kマススタート(フリー)
AM11:00 スタート 山本
AM10:00 気温0℃ 雪温-10℃ 天候 曇り
トップCH6 トップHFBD8+HF6 セーラー7
大会2日目 男子15kマススタート(フリー)
PM0:30 スタート 田崎・尾形・工藤
AM11:00 気温0℃ 雪温-5℃ 天候 曇り
ベースCH6 トップHFBD8+6 セーラー7

ソルジャーハロー 2007 2月7日(日)
大会3日目 男子20kダブルパシュート
(クラシカル+フリー)
AM12:00 スタート 田崎
AM10:00 気温-5℃ 雪温-8℃ 天候 晴れ
クラシカル
ベースCH6 トップHFBD10+LF6 セーラー7・8
グリップ SWIX ユニバーサル+ロードマルチ
スケーティング
ベース CH6 トップ HFBD10+LF6 セーラー8

ソルジャーハロー 2007 2月9日(金)
大会4日目 男子リレー(10k×3)
1走クラシカル・2走・3走フリー
AM11:00 スタート 田崎・尾形・喜井
AM10:00 気温3℃ 雪温-3℃ 天候 晴れ
1走クラシカル
ベースCH6 トップHFBD10+LF6 セーラー6・7
リキッド8
グリップ SWIX ユニバーサル+ロードマルチグレード

スケーティング
ベース CH6 トップ HFBD10+LF8 セーラー8
リキッド8

ソルジャーハロー 2007 2月10日(土)
大会5日目 男子チームスプリント(1.3k×3周×2)
フリー
AM12:00 スタート 田崎・尾形

AM11:00 気温7℃ 雪温-2℃ 天候 晴れ
ベース CH6 トップHFBD10+LF8 セーラー8
リキッド8



選手 田崎 富士夫

結果

15Km マススタート、途中棄権
20Km ダブルパシュート、12位
リレー、4位入賞
チームスプリント、5位入賞

クロスカントリースキーはデフリンピックに初出場した。デフリンピック以外でも世界大会の経験がなく、世界各国のレベルがわからず大会前は不安だった。

実際に参加してみて、ロシア・ウクライナ・スウェーデン等の国には技術および身体的なパワーやクロスカントリースキー歴の違いなど、かなりの実力差を感じた。しかし、トルコ(リレー3位)などにはパワーの差は感じたものの、技術的なレベルについては超えられないほどの壁は感じなかった。今回は力及ばずメダルを取ることはできなかったが、今後の努力次第で、団体戦についてはメダルにも手に届く範囲だと思われた。

大会およびそれまでの練習等を振り返ると、まず直前練習。クロスカントリースキー会場は日本では慣れていない高所(約1800m)およびアップダウンが多いコースであった。これらは事前にわかっていたことだが、それに合わせたトレーニングが日本で十分できたとは言えないのではいか。金銭的な面で困難を伴うが、やはり日本を早めに出発し、開会式まで2週間前程度、現地でトレーニングを積んだ方が良いと思った。

普段の合宿は他の障害者と一緒にのため、監督・コーチも指導する選手が多く、デフクロスカントリーチームは多くの時間が自主的な練習となり、指導を受ける時間的なものは不足していたと思う。また、手話通訳者がつかない合宿もあるなど、指導の理解に時間がかかる場合もあった。今後は費用の問題はあるが、限られた時間内で指導効率を高めるためにも、常に合宿に手話通訳者をお願いしたい。また、サッカーの日本代表監督のような、4年間の専属通訳というのも有効ではないかと思う。

大会では、デフリンピックで初めて専門のスタッフによるワックスをしていただき、全く違うスキーを履いているようで驚いた。20Kmとリレーで勝った中国選手との差は、ワックス技術によるところも大きいと思った。また大会期間中、毎日朝早くからスタッフからサポートをしていただき、大変感謝している。

最後に、これまで支えてくださった監督・コーチ・スタッフ・事務局に心からお礼を申し上げるとともに、4年後のメダルに向

けて、今後もより一層の充実した指導・サポート体制をお願いしたいと思う。



選手 工藤 敏博

デフリンピックでは皆様からあたたかいサポートを頂きました。お陰様で選手として納得出来る戦いが出来て本当に良かったと思っています。デフリンピックでのレースへ初めて出場してみても強く感じました事は世界のアスリート選手との差が大きかった事でした。

それは主に技術面と体力面でした。オリンピック選手並みの技術レベルの選手も多くスムーズに速く滑っていました。長い登り坂を速く登っていく体力パワーやスーパースケーティングを長くやっていくスタミナも凄かったので身体能力の高さに圧倒されてしまいました。これも世界のレベルの差のひとつだと痛感しました。

アップダウンが長く続く、過酷なレースだったので急に心拍数が上がってしまい1周目で体力とスタミナが切れてしまいましたが2、3周目はコーチからの水分補給と気力でカバーして完走する事が出来ました。

本当に一生忘れられない経験になりましたし大きな自信となりました。レースを終えて練習とトレーニングをする時間をもっと沢山とる必要があったと反省すると共にこれからどうやれば良くなるか今後の展開をもう一度考え直す必要があると思っています。

これから世界のレベルに近づく為には課題が沢山ありますが、改めて感じました事はクロカンスキーの普及の為にクロカンスキーの魅力を伝えて仲間を増やす事と1年間雪上練習とトレーニングが出来る環境を作る事が重要だと思いました。

デフリンピックへ出場して多くの貴重な経験を積む事が出来ました。沢山の声援を頂きまして本当に有難う御座いました。



選手 尾形 裕基

成績に対する自己評価

・15km マススタート…57:41.1 19位/23人。

デフリンピック初戦。世界との差・もう少し善戦できると思っていた自分の認識の甘さを思い知らされた一戦。予想以上に気温が上がり、2周目半ばあたりから水分不足のせいか足が吊ってきた。試合中に足が吊ったのは初めての経験で、レース戦略・自分の肉体管理が不十分だったと思う。

・10km × 3 リレー…1:51:25.0 4位。

第2走を担当。表彰台を目指したが叶わず。成績は4位だが、第1走の田崎選手が作ったタイム差のおかげであって、第2走の中で私は最下位である。15km マススタートでの反省を活かして、落ち着いて走法の切り替えを意識しながら滑ったが、予想以上に早くスタミナが底をついたのは誤算でした。

・1.3km チームスプリント…22:29.5 5位。

デフリンピック直前合宿でのチーム内スプリント勝負では私が一番タイムが良かったが、本番では不完全燃焼のまま終わってしまった。一番経験不足が出た試合でした。短い距離で力を出し切る事に慣れていない、スプリントの経験が圧倒的に少ないのも原因の一つとして挙げられる。

反省

成績を見ると惨敗です。プレッシャーもあったし、食生活の違い・時差もあった体調も万全とは言えなかったが、それは参加者全員に対しても言える事。悔しいが、自分の力量不足を痛感させられました。

今後は、心技体全ての強化が必要。プレッシャーがかかる中で、どれだけ心身ともに平常で居られるか精神力と集中力を高めないといけない。スキー板を扱う技術を向上する為にスキーの練習も必要・上半身と下半身の連動、柔軟性バランス能力の向上、色々な種目のレース積極的に参加して経験を積む。

チームとしては、本番を想定してレベルの高い大会に参加が必要だと思う。また、周りを取り巻く環境（職場の理解・知名度のUP）を変えて行く必要がある。周りの協力を得る為にも、選手は自身の強化だけでなく、広報活動の為にもしっかりと努力が必要だと思う。デフリンピック前だけ広報活動するのではなく、今すぐにも動くべき。

デフクロスカントリースキーチームは、今回初めてデフリンピ

ックに参加しました。初出場と言う事を含めても満足の行く結果ではありません。悔しい思いを沢山しましたが、現在の日本と世界トップとの距離・目標とする物が明確に分かったのは大きな収穫だと言えます。

私は今回の大会での悔しさを絶対忘れません。今回の悔しさ・反省を忘れず、4年後を見据えた強化を図り雪辱を果たしたい。

最後に、忙しい中快く合宿・大会に送り出して下さった理解のある職場の皆様を始め大会時、足が吊って完走できるか不安がよぎった時、応援して下さいましたチームの仲間や大会役員の皆様に心からお礼を言いたい。



選手 喜井 寛

<結果>

個人スプリント（クラシカル 1.3k） 出場選手 23 名中 17 位
チームリレー 4 位入賞

個人スプリントでは得意なクラシカル滑走法で入賞を目標に最後まで滑走したがベスト 16 にあと 1.92 秒差の 17 位に終わった。完全に負けたというより僅差でベスト 16 進出を逃した事が悔しかった。

クラシカル滑走法のスキルには自信があったが、パワーとスタミナつまり体力不足が響いたのが敗因だと考えられる。また、スプリントの経験不足もそうである。

評価点をつけると、50～60 点である。

チームリレーではアンカーという重要役割を担い、最後まで諦めずに滑走し 4 位に入賞した。入賞したという嬉しさもあるが大会前から目標としていたメダルを獲得する事が出来ず、涙を流してしまった。

やはり体力および技術不足に加え、経験の浅さによりこういう成績になったと改めて痛感した。評価点をつけると 50 点である。

<反省>

今回は初出場という事で、多少の緊張感もあったが「最低でも入賞」を目標に最後まで滑走しきったと思う。

しかし、現地の環境に慣れるのに大変だった事などもあり、思うような結果を出す事が出来なかった事には本当に悔やまれる。でも、本番までの汗と血を含んだ苦しい練習の成果を最大限に出し切った事は改めて評価したい。そして、競技を通じて多くの課題や収穫を得る事が出来、今後の競技生活の為のスパイスになったと思う。

今回のデフリンピックで大きく感じたのは「世界との差」、「経

験不足」「情報不足」である。今までの合宿では技術および体力強化を中心に行ってきたがそれでは世界と戦えないと痛感した。それに、国内大会に偏りすぎて、海外とのレベルを把握する事が出来なかった事には深く反省したい。

だから、世界と互角に戦える為には練習だけでなく海外派遣も含む経験を積み重ねることが重要だと考えられる。また、情報も収集する事で海外とのレベルを把握していくべきである。

その為には勤務先の方が選手の練習環境を整えてあげるようバックアップする必要がある。それだけでなく、選手も「チーム」という集団意識をもって切磋琢磨しあえば更なるレベルアップが出来るのではないかと考えられる。

今回の得た課題を次回へ向けて少しずつ改善していきながら頑張っていきたい。

最後に、応援して下さいました家族や勤務先をはじめとする皆さんに感謝したい。



選手 山本 智美

マススタート 10 km に出場しました。メダルがとることが出来ず 10 位という成績でした。

10 位でしたが、とてもアップダウンのあるコースを最後まであきらめることなく完走できたことは良かったと思います。また、スタート直後から後ろにいたスロバキアの選手に抜かれず、順位を落とさず、最後には引き離しゴールを出来たのは、監督、コーチからのアドバイスにより自分のリズムとペースを守り前半から飛ばさないように努めたおかげだと思います。また、タイムも 47 分 35 秒 6 と自己ベストを出せました。

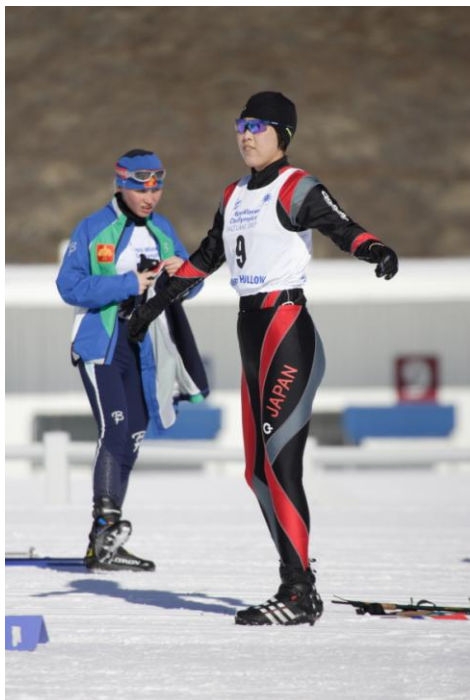
2002 冬季オリンピックと同じコースを滑ることは、なかなかないので嬉しい反面、スタートとゴール付近以外に平坦な部分がなく、上り坂か下り坂しかないコースは、予想以上に辛いものでした。スタート直後から上り坂が続き、上り終わると急な下り坂となります。その後だらだらと続く上り坂を登り続けまし

た。次いで下り坂の後、心臓破りの急な上り坂となります。

メダリストは、上り坂をスーパースケーティング走法で上っていきますが、私にはその体力・技術がなく、クイック走法でしか登ることが出来ませんでした。これがメダリストと大きな差だったと思いました。

また、下り坂は急なカーブが続くため、スピードを殺さず滑るには足の踏ん張りが重要なのですが、後半は踏ん張りが利かず、スピードを緩めてしまいました。急な上り坂の後にも踏ん張りの利く筋力が必要だと思いました。また、後半は監督・コーチにアドバイスされた上りを滑るときのリズムが崩れてしまい、思うように滑れませんでした。

このような状況でしたが、やはり完走できたのは、大会役員をはじめ応援に駆けつけてくれた家族のおかげだと思います。応援ありがとうございました。



デフリンピックの概要

デフリンピックへの出場は、ろうの選手の最大の誇りであり、一般ろう者が 選手の活躍を期待し、大きな感動を受ける国際競技会です。障害当事者であるろう者自身が運営するろう者のための国際的な競技会であり、参加者が国際手話によるコミュニケーションで親睦を深められるところに大きな特徴があります。

1 デフリンピックの歴史

（１）障害者スポーツ発展の基礎

障害のある人のスポーツの発展には、主に障害別に設立されたスポーツの組織が果たしてきた役割が大きく、組織が作られたことによって、障害別の競技規則が作られ、また、定期的な競技大会が開催されるようになりました。

（２）初の国際組織の設立とスポーツ大会の開催

障害者スポーツの国際的な組織が初めて設立されたのは、１９２４年にパリ（フランス）で設立された「国際ろうスポーツ委員会（ＩＣＳＤ）」です。

さらにその年には、この委員会により、世界で初めての国際的な障害者スポーツの大会となる「世界ろう者競技大会（World Games for the Deaf）」が、９か国１３３名の規模でパリにおいて開催されました。

この大会が、第１回のデフリンピックで、１９６０年のローマ（イタリア）での大会が第１回とされるパラリンピック競技大会よりも歴史あるものとなっています。

（３）開催の経緯

この大会は、以後、第二次世界大戦を挟んだ１０年間を除き、夏季・冬季共にほぼ４年ごとに開催されており、このたびのソルトレークの大会で第１６回冬季大会となります。

なお、夏季デフリンピックは２００９年に中国台北で第２１回大会を迎えることになっています。

2 名称と公式マーク

デフリンピックという名称は、２００１年の夏季大会から使われたものであり、比較的新しい名称です。それまでは、前述の世界ろう者競技大会と称されていました。また、２００３年には、デフリンピックの公式マークが作成されました。

公式マークは、「オリンピック」の手話の形をあしらって、赤、緑、黄色、青の４色で作成されています。

3 国際ろうスポーツ委員会（ＩＣＳＤ/旧名称：ＣＩＳＳ）

ＩＣＳＤは、１９２４年の設立以来、デフリンピックや競技別の世界選手権大会の開催、各国でのろう者スポーツの振興などに取り組んでおり、国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）からも認知されています。

現在の加盟国は９４か国です。

最近の世界選手権大会の開催例としては、国際ろう者武道選手権大会（ロシア）や世界ろう者ゴルフ選手権大会（カナダ）が開催されています。

4 デフリンピック公式マーク



DEAFLYMPICS

5 その他

1 開催競技

デフリンピックの正式種目は、その競技人口などによってICSD評議員会が決定しています。

2 参加資格

補聴器をはずした裸耳の状態での聴力損失が55デシベルを超えている者で、各国のろうスポーツ協会に登録されていることが必要です。

身体の安全を確保する観点から、競技中に補聴器を装用することは禁止されています。

3 競技運営

オリンピック競技のルールに、ほぼ準ずる内容での競技運営となっています。

コミュニケーションや情報保障は全てが視覚的に保障されており、例えばアイスホッケー競技での審判の注意など全てがろう者にわかるように工夫されています。

夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	145						
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	210						
3	西ドイツ	ニュールンベルグ	1931年8月19(21)日～8月23(24)日	14	316						
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	293(283)						
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	264						
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	405						
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	524						
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	625						
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	595						
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	697	7	4	11	0	1	1
11	ユーゴスラビア	ベオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1183	9	4	13	0	4	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	32	1061	9	4	13	4	2	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32 (37)	1118 (1468)	17	8	25	5	2	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1213 (1663)	34	11	45	7	4	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	1053(1648)	52	15	77	8	5	2
16	ニュージーランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30 (32)	959 (1469)	40	16	56	7	3	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	51	1705(1900)	41	13	54	4	7	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	62 (57)	2068(2078)	44	14	58	6	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	71 (81)	2405 (約4000)	60	26	86	10	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	75	3500	102	33	135	3	7	1
21	中国	台北	2009年9月5日～15日 (予定)								
22	ギリシャ	アテネ	2013年8月3日～13日 (予定)								

冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33						
2	ノルウェイ	オスロ	1953年2月10(20)日～2月14(24)日	6	53						
3	西ドイツ	オーベルアンメルガウ	1955年2月10日～2月13日	7	61						
4	スイス	モンタナブフーナラ	1959年1月27日～1月31(30)日	8	42(56)						
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月11日～3月16日	8	58(53)						
6	西ドイツ	ベルヒスガーデン	1967年2月20日～2月24(25)日	12	86	3	3	6	0	0	0
7	スイス	アボオルボーデン	1971年1月25日～1月29日	13	92	(不参加)					
8	アメリカ	レイクブラシッド	1975年2月11日～2月16日	15	268	10	3	13	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	180	8	5	13	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23(22)日	16	191	9	6	15	0	0	0
11	ノルウェイ	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	136(225)	10	4	14	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16(18)	294(287)	9	6	15	0	0	0
13	フィンランド	ウッラス	1995年3月14日～3月19日	20	312	10	5	15	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月6(7)日～3月14日	18	273	10	5	15	0	1	1
15	スウェーデン	スンツバル	2003年2月27日～3月9日	22	253	14	15	29	2	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月1日～2月10日	24	310	17	22	39	3	0	1
17	スロバキア	ハイトラス	2011年2月10日～2月20日(予定)								

第 16 回冬季デフリンピック～ソルトレーク 2007～
2007 年 2 月 1 日 - 2 月 10 日

米国・ソルトレークシティ

日本選手団のしおり



財団法人 日本障害者スポーツ協会
財団法人 全日本聾啞連盟

[選手・役員必携]

1 はじめに

初めてデフリンピックに出場するとか、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあると思われます。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろと注意、指示があると思われますが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあっては、折角のチャンスを十分に生かせない結果になることも予想されます。ここでは、心構え、準備から帰国後までの内容を記しておきます。

2 心構え

- ★ 日本代表選手としての自覚を持って行動する
- ★ 代表選手として悔いのないように練習する
- ★ 大会参加の経験を生かし、後輩のために役立てる

3 大会参加まで

1) 選手団本部やコーチからの連絡事項

- ① 身体に関すること
 - ・ 健康状態の確認
 - ・ 常備薬、排便などの生活習慣チェック
- ② 競技に関すること
 - ・ エントリー種目の決定
 - ・ 競技規則の熟知

2) 生活態度に関して

- ① 指示事項は必ずメモを取る
- ② 集団生活のマナー（ルール）を守る
 - ・ 時間の厳守
 - ・ 私物の管理（持ち物に名前を付ける）
 - ・ あいさつの習慣
 - ・ 喫煙場所の厳守
- ③ 生活習慣を合せること
 - ・ 食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
 - ・ バランスのよい食事に気をつけること
 - ・ 貴重品は各自で管理すること
 - ・ 時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重しながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける

3) 所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について

- ① 都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさないこと
- ② ユニフォーム等支給されたものは、サイズ、品目を受領後、直ちに確認すること

4) その他

- ① 主将の選出（今回は原田上選手）
- ② 国際手話・アメリカ手話に慣れておき、簡単な英単語も学習しておくこと

4 大会前までの練習について

- 1) 大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること
- 2) 初めての国際大会では、雰囲気慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておく
- 3) 選手1人になっても競技に参加できるように、競技会の仕組みについて理解しておくこと

- 4) コーチの指示をメモし、頭にいれておくこと
- 5) 大会参加までの練習で、困ったこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること
- 6) 練習終了時に身体のチェックを行なうこと

5 医療班からの連絡事項

1) 健康管理について

出発までの健康管理は自己責任において適切に管理すること。風邪、感染症、褥瘡など、特に注意すること。

大きな体調の変化は直ちに各チーム監督に連絡すること（事前に処理できるのに、出発時までチェックされず出場できなかった例がある）。外国は国内で生活している場合よりも、いろんな面で細心の注意が必要です。また医療制度が異なり日本のように簡単に医療機関を受診することできないため、事前の予防が重要です。生活習慣、食生活の違い、時差、飛行機の移動など日常生活のリズムを崩しやすく、精神的疲労を含め、健康管理に充分注意が必要です。

2) ドーピング検査の対応について

現在使用している“くすり”は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。これはドーピング検査を受けることになった場合、最近に服用した薬剤を申告する必要があるためです。英文などがわからない場合は、明神一宏医師にメールで相談して下さい。

3) 薬などの持参について

選手団として医薬品をある程度持参いたしますが、それは軽度の外傷や一時的に使用するものに限られすべての症状、疾患に対して薬品を準備することは不可能です。また選手、役員数が多いため量的にも不十分になる可能性があります。そこで普段使用している『常用薬』に関しては次のように準備して下さい。

- ・ 競技選手は、ドーピングに注意するために、漢方薬、サプリメントなども含めて全ての薬の服用に関しては選手団医師に相談すること。
- ・ 各自で日頃使用している“常用薬”を、少し多めに確保しておく。
- ・ 定期的な服用をしているもの以外でも、風邪、外傷などの際にかかりつけ医によく処方してもらう薬品を準備する。ただこの時もドーピングに注意をして、医療機関でもらった薬でも勝手に服用せず選手団医師に相談して下さい。
- ・ 出発前や帰国後に、急遽病院にかかる可能性があるので、健康保険証（できるだけ写しでないもの）を持参する。

4) 歯の治療をすませておくこと

5) 服装はリラックスできるものを用意すること

6) 風邪の予防（マスク、うがい）、寒さ対策、水分補給など考えておくこと

7) 医師1名、看護師1名が同行します。

6 渡航に関して

- 1) 出発の際にパスポートを忘れないこと（スーツケースには入れない）
- 2) パスポート、トラベラーズチェックなどや貴重品の保管に充分留意すること
- 3) トラベラーズチェックを利用する場合、2ヶ所の内1ヶ所に必ずサインしておくこと
- 4) スーツケースには鍵をかけないこと（チェックイン時）、鍵は2ヶ所に分けて保管すること（スーツケースの中にいれない）
- 5) 機内では搭乗券に記載された座席に座り、乗務員の指示に従うこと
- 6) 機内は寒い可能性もあるので、ウインドブレーカなどを手荷物バッグに入れておくこと
- 7) 旅行中の自分の荷物は、各自責任を持って自分で持ち歩くこと（銭別等に対するお土産は事前に日本で注文しておくことと楽である）
- 8) 飛行機を降りる際には忘れ物のないよう気を付けること
- 9) 集合時間に遅れないこと（10分前を目標とする）
- 10) 挨拶をしっかりし、選手一人ひとりが日本チームの一員として責任を持った行動をすること

- 1 1) チームとして団体行動をとること（時間厳守、個人の行動に責任を持つ）
- 1 2) 体調の悪い者は必ず各チーム監督に報告すること

7 持ち物に関して

- 1) 手荷物及びウエストバッグ（参考）
 - ・ 旅券（パスポート 忘れた場合は出発できません）
 - ・ 移動用ユニフォーム
 - ・ 財布 クレジットカード、コイン入れ、トラベラーズチェック
 - ・ スーツケースの鍵 筆記用具 タオル ウェットティッシュ し好品
 - ・ 健康保険証（なるべくコピーでないもの）その他（雑誌など）
- 2) スーツケース（参考）
 - ① 持ち物にはすべて、名前・競技名・JAPANを明記すること。
 - ② 貴重品
 - ・ カメラ（フィルム、電池）など
 - ③ 生活用品
 - ・ 生活用衣類（普段着、下着）
 - ・ 電気製品（ドライヤー、カミソリなど）
 - ・ 洗面用具、シャンプー、ソーイングセット、洗濯セット（石鹸など）
 - ・ タオル、ウェットティッシュ、ビニール袋
 - ・ 常備薬（白の粉末はさける）
 - ・ 電卓、目覚まし時計、カメラ
 - ④ 競技関係
 - ・ 競技用衣類（ユニフォーム） 競技用具
 - ・ テーピング用テープ、コールドパック、予備パーツ、工具など
 - ⑤ その他
 - ・ 住所録、みやげ購入リスト、補食、し好品、交換用バッジ類
- 3) その他
 - ・ パスポート番号等、必要事項はメモをしておくこと
 - ・ 銭別などに対するお土産は日本で注文しておくことと楽である
 - ・ お世話になった人にハガキを出すための住所録を忘れないこと
 - ・ 身の周り品の補充（できるだけ事前に用意すること）

8 機内で

- 1) ソルトレークシティーとは時差がー16時間です。飛行機の中ではなるべく睡眠をとり、宿舎到着後は早く休むようにしましょう。
- 2) 機内は乾燥ぎみなので、水分は十分に取ること（寝る時にマスクの内側に湿らせた布をあてるなど）
- 3) 食事はできるだけ食べるようにすること
- 4) 機内は気圧の変動が激しいので、飲酒は控えめにすること
- 5) 飛行時間（約 11 時間）が長くなるので、リラックスした姿勢をとり、血液の循環を良くすること
- 6) パスポートなど貴重品の保管に気をつけること
- 7) 食事後はトイレが混むので、余裕を持ってトイレに行くこと

9 ユニフォームの着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式ユニフォーム（以下「公式ユニフォーム」）を着用しなければならない。

日本選手団より支給されたユニフォームは以下の通りです。

(1) 共通ユニフォーム

アウター(上)、パンツ(サロペット)、ミドラー(上)、Tシャツ、グローブ

(2) 競技ユニフォーム

(3) 共通ユニフォームの着用について

結団式、開会式、閉会式及び表彰式の時には、必ず着用して下さい。義務とします。尚、渡航時(1月30日)は、アウター(上)を着用して下さい。

10 大会会場で

- 1) 競技場、食堂、宿舎、その他の関係施設の位置を確認すること。
- 2) デフリンピックでは、雰囲気慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておくこと
- 4) なるべく多くの参加者と親交を深めるように努力し、またそれぞれが、日本チームの一員として責任を持った行動をすること
- 5) 自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと
- 6) 無断に宿舎、競技場を離れないこと、また、単独行動はとらないこと
- 7) 部屋をきれいに使い、ベッドメイクをしっかりとすること
- 8) パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりとすること、スーツケースの中に入れ、カギをすること
- 9) 生水は飲まないこと

11 毎日の報告について

- 1) 試合結果について
 - ① 競技に出場した選手は、レースごとのコメントを、宿舎に戻り次第各チーム監督に提出すること
コメントの内容 感想、反省、次の競技に向けて等
- 2) 記録について
 - ① 各競技団体は毎日の記録を、宿舎に戻り次第、選手団本部に報告すること
 - ② 記録は、選手団本部においてもインターネットで確認する予定です。

12 メディアへの対応について

世界でのデフリンピックへの理解が進むことを期待し、メディアに対し積極的に情報を提供します。各競技の選手・コーチも日本選手団として積極的な協力をお願いします。

尚、大会期間中は団員によるインターネットなどでの日記・レポート・解説・ニュース・写真・動画等の発信はご遠慮下さい。

日本向けには、財団法人全日本ろうあ連盟第16回冬季デフリンピック派遣委員会ウェブサイト <http://www.jfd.or.jp/sports/dwg16/>にて発信していきます。

13 大会後、帰国まで

- 1) 市内ショッピングで
 - ・ 複数で行動すること
 - ・ 観光地、繁華街などでは盗難に注意すること(カメラや手荷物を身体から離さないこと)
 - ・ 自分の荷物は自分で持てる範囲内にすること(荷物になるものはなるべく買わない)
- 2) 空港で
 - ・ 自分の荷物(御土産)には、名前を書くこと
 - ・ 税関の申告は、各自が責任を持って正確にすること
 - ・ 通関後、到着ロビーで解散する

- ・ 空港到着後、各個人が自分の荷物を確認すること
- ・ 帰宅方法を確認連絡すること

3) 記録の確認

- ・ 大会期間中の記録の問い合わせは各競技の指定の場所で確認して下さい。

4) 帰国後

- ・ 関係各位に成績の報告を忘れずに行うこと（表敬訪問した所には必ず報告に行くこと）
- ・ 選手団団員全員に報告の提出が義務付けられています。提出〆切は2月22日です。詳細は後日お知らせいたします。

重要事項〔抜粋〕

本必携の中で、特に重要な事項を抜粋しました。

内容の理解と報告事項の徹底のために、再確認をお願いします。

1. 出発・帰国スケジュール

<出発>

- (1) 1月25日(木) アルペンスノーボードチーム(選手6名、安藤監督、計7名)
- (2) 1月30日(火) 日本選手団本隊(選手11名、役員19名、計30名)
- (3) 1月31日(水) 明神医師 1名
 - 15:00 成田空港第1ターミナル南ウイング4F
ユナイテッド航空(D)カウンター前 集合
 - 15:00-16:00 チェックイン手続き及び最終案内
 - 16:45 出国手続きを済ませ搭乗ゲート前集合
 - 17:25 成田発 UA-838 便(飛行時間8時間45分)
 - 09:20 サンフランシスコ着、アメリカ入国手続きを済ませ荷物を受け取り税関
を通過後、国内線チェックインカウンターにて再度荷物を預ける
 - 11:00 サンフランシスコ発 UA-706 便(飛行時間1時間46分)
 - 13:46 ソルトレークシティー空港着 着後、専用車で宿舎へ移動

<帰国>

- (1) 2月8日(木) アルペンスノーボードチーム(安藤監督、スタッフ2名、計3名)
 - 05:30 宿舎出発(専用車)
 - 06:30 ソルトレークシティー空港着
 - * 以下本隊と同じ
- (2) 2月11日(日) 日本選手団本隊(選手17名、役員18名、計35名)
 - 06:00 宿舎発(専用バス)
 - 06:30 ソルトレークシティー空港着
 - 06:30-07:30 チェックイン手続き
 - 08:10 搭乗ゲート前集合
 - 08:44 ソルトレークシティー発 UA-1177 便(飛行時間1時間36分)
 - 09:20 サンフランシスコ着
 - 11:29 サンフランシスコ発 UA-837 便(飛行時間11時間)
- 2月12日(月)
 - 15:35 成田空港着 第1ターミナル南ウイング

<国内線乗り継ぎ>

〔往路〕

- (1) 1月25日(木) アルペンスノーボードチーム(安藤監督、笠井選手、計2名)
 - 07:45 札幌(千歳空港)発 NH-2151 便(全日空)

09:15 成田空港着 第1ターミナル

(2)1月29日(月) 山根団長
アルペンスキー(上野監督、スタッフ2名、計3名)
クロスカントリースキー(スタッフ2名)

17:30 札幌(千歳空港)発 NH-072 便(全日空)

19:10 羽田空港着
羽田空港到着後リムジンバスにて成田空港へ移動、
成田空港第2ターミナルにて下車、到着階33番シャトルバス乗り場
からホテル日航成田へ

(3)1月30日(火) アルペンスノーボード(スタッフ2名)
市田看護師1名

07:45 札幌(千歳空港)発 NH-2151 便(全日空)

09:15 成田空港着 第1ターミナル

〔復路〕

(1)2月9日(金) アルペンスノーボードチーム(安藤監督、スタッフ2名、計3名)

(2)2月12日(月) 山根団長、市田看護師2名
アルペンスキー(上野監督、スタッフ2名、計3名)
アルペンスノーボード(スタッフ2名)
クロスカントリースキー(スタッフ2名)

18:00 成田空港発 第1ターミナル NH-2155 便

19:35 札幌(千歳空港)着
＜1月29日成田宿泊ホテル＞
ホテル日航成田
〒286-0106 千葉県成田市取香500
TEL:0476-32-0032 FAX:0476-32-3993
<http://www.jalhnn.co.jp>

2. 荷物について

受託荷物(飛行機に預ける荷物)は航空会社の規定により原則として一人2個(普通のサイズのスーツケースとスキーもしくはスノーボード1セット)までが無料です。なお、荷物1個は32kgまでと決まっています。32kgを超えると荷物を減らす、又は分けるよう指示を受けることがあります。

また、日本ーアメリカ線は重さではなく、荷物の個数に対して超過料金が発生します。

(参考:大きくても小さくても1個オーバーに対し、日本発22,000円、アメリカ発約15,000円を取られます。)

冬季のデフリンピックへの遠征という性質上、荷物の個数が増えるのは承知しており、アンケート結果を踏まえて予想される超過料金は派遣費の予算の中に含めています。

必要なものをうまくまとめるなどして、荷物の個数を増やさないよう皆さんのご協力をお願いします。

3. 式典関係

(1) 日本選手団結団式

日時: 1 月 31 日(水) 18:00-20:00

場所: ソルトレークシティ・ベストウエスタン・ガーデンイン ホテル

(2) 冬季デフリンピック開会式

日時: 2 月 3 日(土) 19:00～

場所: ハンツマンセンター ユタ州立大学内

(3) 冬季デフリンピック閉会式及びフェアウエルパーティー

日時: 2 月 10 日(土) 20:00～

場所: ソルトプレイス・コンベンションセンター

4. ユニフォームについて

日本選手団より支給されたユニフォームは以下の通りです。

(1) 共通ユニフォーム

アウター(上)、パンツ(サロペット)、ミドラー(上)、Tシャツ、グローブ

(2) 競技ユニフォーム

(3) 共通ユニフォームの着用について

結団式、開会式、閉会式及び表彰式の時には、必ず着用して下さい。義務とします。

尚、渡航時(1 月 30 日)は、アウター(上)を着用して下さい。

5. 補聴器について

オーディオグラム及び補聴器の規則(55～58 ページ)についてよく理解しておいて下さい。

6. ドーピング検査対応について

デフリンピック期間中は、ドーピング検査の指名がいつあってもおかしくない状況です。

マニュアル内に書かれたドーピングの手順(59 ページ)についてよく理解しておいて下さい。

また、現在使用している“くすり”は使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持してして下さい。

7. 食事について

結団式、フェアウエルパーティー(夕食)以外の朝食、昼食、夕食は各自にて取っていただきます。日本選手団が宿泊する施設はホテルではなく(一部ホテル)コンドミニウムタイプの宿舎ですので食事を作る為の調理設備(キッチン)が整っておりますので各チーム監督、コーチと相談の上、自己責任のもと体にバランスの良い食事を取るよう栄養管理を心がけて下さい。

ソルトレーク市内にはいくつかの日本レストランもありますので事前におにぎりなどの弁当を予約することも可能です。

食事代に関しては、1 日 4,000 円(朝食 1,000 円・昼食 1,000 円・夕食 2,000 円)を支給します。

8. 毎日の報告について

(ア) 競技結果(記録)について

- ① 各競技団体はその日のレースの結果(記録)を、宿舎に戻り次第オフィシャルリザルトを選手団本部に持ってくるかまたは FAX にて報告してください。

(リザルトは、本人の成績、種目 1 位の成績と出場者数を含むものとする。)

- ② オフィシャルリザルトは、選手団本部においても組織委員会にて確認する予定です。

(イ) 行動予定について

今大会は日本選手団の宿舎が本部を含め 5 つに分かれます。その為、各競技団体の行動を把握する必要がありますので毎日の行動予定表を選手団本部(ランドマークイン)に提出して下さい。

- ① 各競技団体は、所定の様式(67～68 ページ)を参考に翌日の選手・役員の行動予定表を作成し前日の 21 時までに FAX もしくはメールにて提出してください。
- ② 危機管理の一環として日本選手団が安全に生活し、行動するために重要な書類となりますので必ず提出して下さい。

9. 現地携帯電話について

選手団本部及び各競技チームに 1 台、アメリカ仕様のプリペイドカード式の携帯電話を出発当日成田空港で支給します。

電話番号に関しましては別途お知らせします。

10. 旅行保険について

デフリンピック遠征期間中は、日本選手団として下記の内容の保険が付帯されております。

- 傷害死亡 2000 万円 ○疾病死亡 2000 万円 ○治療・救援費用 1500 万円
- 賠償責任 1 億円 ○携行品 30 万円

11. お土産について

項目 No.2 にも記載されていますように荷物の個数を増やさないように協力をお願いしております。また援助いただいたスポンサー、支援団体または家族へのお土産で頭を悩ますのも競技に影響を及ぼすとも考えられますので日本出発前に予約注文することをお勧めします。

〔現地基本情報〕

国名 : アメリカ合衆国(The United States of America)

首都 : ワシントン特別行政区(Washington D.C)

面積 : 963 万 1413 平方キロメートル(日本の約 25 倍)

人口 : 2 億 9927 万人

言語 : 英語(公用語)が大部分。ほかにスペイン語、フランス語など。

通貨 : 1 米ドル(USD)=100 セント
\$1.00=¥121.50(Cash 1 月 11 日現在)

紙幣 : 1,2,5,10,25,50,100 ドルの 7 種類。

*50,100 ドルは偽札ではないかと確認されることがあります。

硬貨 : 1,5,10,25,50 セントと 1 ドルの 6 種類。それぞれに通称があります。

1 ¢ = ペニー(Penny)

5 ¢ = ニッケル(Nickel)

10 ¢ = ダйм(Dime)

25 ¢ = クォーター(Quarter)

50 ¢ = ハーフダラー(Half Dollar)

\$ 1 = ダラーコイン(Dollar Coin)

時差 : アメリカ本土には 4 つの時間帯があります。東部標準時(EST): 日本-14 時間、中部標準時(CST): 日本-15 時間、山岳部標準時(MST): 日本-16 時間、太平洋標準時(PST): 日本-17 時間です。また、4 月の第 1 日曜日から 10 月最終日曜日までは夏時間(DST)を採用しています。(ハワイ州、アリゾナ州、インディアナ州の一部の地域を除く)。

※ソルトレークシティ(SLC)は山岳標準時になりますので、日本との時差は-16 時間になります。

日本	09:00	12:00	15:00	18:00	21:00	00:00
SLC	17:00	20:00	23:00	02:00	05:00	08:00

ビザ : 90 日以内の観光、商用が目的ならばビザは基本的に不要。

パスポート : パスポートの有効残存期間は、基本的に滞在日数以上あれば OK だが、できれば、6 ヶ月以上が望ましい。

チップ : アメリカ合衆国ではサービスを受けたらチップを渡す習慣があります。チップは労働・サービスの対価ですので、これで生活している人も多いようです。

レストラン：料金の15%～20%

バーカウンター：飲み物1杯につきバーテンダーに1ドル。

ホテル：ポーターは荷物1個につき1ドル。

タクシー：料金の15%程度。

電話：日本と同じように公衆電話は街角、空港、駅、バスターミナル、レストランなどで見かけます、一般的にアメリカでは、市内通話はコインで長距離はテレフォンカードやクレジットカードでかけます。公衆電話で利用できるコインの種類は5,10,25¢の3種類です。

アメリカから日本へのかけ方

例)財団法人全日本ろうあ連盟(03-3268-8847)へかける場合

011(国際電話識別番号)+81(日本の国番号)+3-3268-8847

*市外局番の最初の0は取る

日本からアメリカへのかけ方

・「マイライン」「マイラインプラス」に登録している場合

010+1(アメリカの国番号)+〇〇〇-△△△-□□□□(相手の電話番号)

・「マイライン」「マイラインプラス」に登録していない一般電話、携帯、公衆電話の場合

電話会社の番号	
KDDI	001
NTT コミュニケーションズ	0033
日本テレコム	0041
au 携帯	005345
NTTドコモ携帯	009130
ソフトバンク携帯	0046

国際電話 識別番号
+ 010

国番号
+ 1

相手先の番号
<u>〇〇〇-△△△-□□□□</u>

※NTTドコモ、ソフトバンク携帯は海外に電話をかけるためには事前登録が必要。

au は010国際電話識別番号が不用。

電気：電圧は120Vで周波数は60Hz。プラグは3つ穴タイプで、形状は日本の物とほぼ同形なので、日本製品も使えるが、わずかではあるが、電圧が違うのでワックスアイロンなど長時間使用する場合、変圧器があったほうが望ましい。

郵便：日本へ郵便物を送る際の所要日数は航空便で約1週間、船便で約6週間です。料金はハガキが75¢、封書が84¢からです。

飲料水：水道の水をそのまま飲むこともできるが、ミネラルウォーターを購入するのが望ましい。

ビジネスアワー：日本と同じく業種、立地条件などによって違う24時間営業のコンビニエンスストアもあるが、一般のショップは19:00からおおむねの閉店時間

〔銀行〕(月)～(金) 09:00～17:00 (土)・(日)休み
〔商店〕(月)～(金) 10:00～19:00
(土)10:00～18:00 (日)12:00～17:00
〔レストラン〕朝食 07:00～10:00
昼食 11:00～14:00
夕食 17:30～22:00

度量衡 : 〔長さ〕1 インチ=2.54cm、1 マイル=1.61Km、
1フィート=0.305m、1 ヤード=0.914m
〔重さ〕1 ポンド=0.453Kg 〔ます目〕1ガロン=3.785ℓ

税関 : アメリカ合衆国に入国するすべての旅行者は、限られた分量の物品を手荷物として免税で機内へ持ち込むことが出来ます。ただし、これらの物品はあくまでも個人的に使用する以下の物品がその対象になります。

- ・\$ 100 相当までの贈答品
 - ・21 歳以上の個人 1 人につき 1 リットルまでのアルコール飲料
 - ・50 本までの葉巻たばこ、200 本までの紙巻たばこまたは 2Kg までのパイプ。タバコ、あるいはこれらのそれぞれを適当な分量で持ち込むこと。
 - ・通貨、有価証券あるいは流通証券はいくらでも持ち込むことができる。ただし、米ドルに換算して \$ 10,000 を超える場合は申告する必要がある。

ある特定の物品の持ち込みは、米国政府が禁止又は制限しています。これらの物品は持ち込まないようにしてください。

- ・麻薬または(吸引を楽しむ目的で使用する)薬物
- ・銃器や弾薬
- ・ポルノグラフィ(米国の法的基準に基づく)
- ・健康に害を及ぼすことが明白な物品
- ・象牙または象牙製品
- ・ある特定の食品及びその関連製品
- ・ある特定の動植物を原料とした製品
- ・動物、植物、果実、未加工食品

アルコール飲料 : アルコール類は米国において連邦、州及び地方レベルで規制されています。各州では独自にアルコールに対する統制、制約を実施しており、連邦規則よりも優先されます。ユタ州はその境界内においてアルコール類の取り扱い及び消費に関してとりわけ厳重な規制を設けています。

留守家族の方へ

■ご帰国の問合せ先

成田空港フライトインフォメーション : 0476-34-5000

特にご連絡のない場合は、予定の航空便で帰国されます。航空機の到着時間は変更となることがございますので、空港へお出かけの際には到着予定時刻を上記へ再確認してください。

■ご帰国便

到着日時 : 2007 年 2 月 12 日(月) 15 時 25 分

到着便名 : ユナイテッド航空(UA) 837 便

到着ターミナル : 成田空港第 1 ターミナル 1 階到着ロビー

航空機到着後、税関検査終了までは通常40分～60分かかります。

お出迎えの方は、空港検問所で身分証明書(免許証、保険証、社員証など)が必要となります。

緊急連絡先

第 16 回冬季デフリンピック派遣委員会事務局

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SK ビル 8F

(財)全日本ろうあ連盟本部事務局

TEL: 03-3268-8847

FAX: 03-3267-3445

E-mail: hisamatsu@jfd.or.jp

取扱旅行社:株式会社グロリアツーリスト

〒103-0013 東京都日本橋人形町 2-33-8

浜町アクセス 2F

TEL: 03-5641-1201

FAX: 03-5641-1222

担当: 林・廣瀬

E-mail: hirose@gloria-tourist.co.jp

林携帯: 090-1434-0848

帰国時のご案内

帰国時の手続きは、出発時と順序はほぼ同じですが、税関の検査は免税範囲を超えない方は緑のランプの検査台へ、免税範囲を超える方、および別送品のある方は赤のランプの検査台へお進み下さい。所要時間は通常 40 分から 1 時間です。

〔免税の範囲〕

品 名		数量または個数	備 考
酒 類		3 本	1 本 760cc 程度のもの。クオートびん (950cc) のように容量の大きいものは $950\text{cc} \div 760\text{cc} = 1.25$ 本分として取り扱われる。
た ば こ	紙巻たばこ	200 本 (ただし、他のたばこがない場合)	①2 種類以上のたばこを輸入するときは、総重量が 250g を超えない範囲で免税になる。 ②空港の免税店や外国で購入した日本製たばこについては、外国製たばことは別に紙巻たばこ 200 本 (葉巻たばこの場合は 50 本、その他のたばこは 250g) までに限り免税で輸入できる。
	葉巻たばこ	50 本 (ただし、他のたばこがない場合)	
	その他のたばこ	250 本 (ただし、他のたばこがない場合)	
香 水		2 オンス	約 50g (1 オンス＝約 28cc)
そ の 他 の 品 物	1 品目ごとの海外市価の合計額が 1 万円以下のもの	全 量	
	その他のもの	20 万円	①合計額が 20 万円を超える場合には、20 万円以内におさまる品物は免税になり、その残りの品物が課税される。税関は「20 万円以内におさまる品物」の選択について、旅行者に有利になるように選択の上、課税される。 ②1 個で 20 万円を超える品物は、20 万円を超える金額のみでなく、全額について課税される。

- * 旅行中、書類や購入した品物を外国から留守宅へ別送される方は、携行品別送申請書を帰国時に 2 通作成し、1 通に税関の検印を受け、あと 1 通を申告者が保管し、別送品の日本到着時に税関へ掲示して別送品を受け取ることになります。
- * 持込が禁止されている品物

- ①動植物：一般的な植物 (果物、野菜、切花など) や動物のほか、ワシントン条約に基づき、絶滅のおそれがある野生動植物、及びそれらの加工品は輸入規制の対象となります。

規制品目例

植物：ラン、サボテン、ソテツ、シクラメンなど

動物：熱帯魚、インコ、サル、カメレオン、ヤマネコなど

加工品：規制された動物で作られた毛皮、敷物、皮革製品 (ハンドバッグ、ベルト、財布等)、はく製、アクセサリー

- 生肉、乾燥肉、ハム、ソーセージなども動植物検疫カウンターで検疫を受けてください。

- ②鉄砲・刀剣類：公安委員会の許可を受けるなど所定の手続を取らなければ通関できません。

競技チーム名：

時 間	競技チーム						
	選 手		監督・コーチ				
5:00							
5:30							
6:00							
6:30							
7:00							
7:30							
8:00							
8:30							
9:00							
9:30							
10:00							
10:30							
11:00							
11:30							
12:00							
12:30							
13:00							
13:30							
14:00							
14:30							
15:00							
15:30							
16:00							
16:30							
17:00							
17:30							
18:00							
18:30							
19:00							
19:30							
20:00							
20:30							
21:00							
21:30							
22:00							
22:30							
23:00							
23:30							
0:00							

(例)

競技チーム名：アルペンスキーチーム（1）

2月11日

時 間	競技チーム						
	選 手		監督・コーチ				
	水口	小池	上野	高畑			
5:00							
5:30	起 床						
6:00	朝 食						
6:30							
7:00	出発準備						
7:30							
8:00	出発（リフトオープン）						
8:30	コースインスペクション						
9:00							
9:30							
10:00	ダウンヒルレース						
10:30							
11:00							
11:30							
12:00							
12:30							
13:00	昼 食						
13:30							
14:00							
14:30							
15:00	チームミーティング						
15:30							
16:00							
16:30	スキー用具調整						
17:00							
17:30							
18:00			TCM			TCM	
18:30							
19:00	表 彰						
19:30							
20:00							
20:30							
21:00							
21:30							
22:00							
22:30							
23:00							
23:30							
0:00							

日本選手団滞在のホテル情報

[パークシティ]

①ザ・ロッジ・アット・ザ・マウンテン

The Lodge at the Mountain Village

住所	1415 Lowell Avenue Park City 84060				
TEL	+1 435 649 0800	FAX	+1 435 649 1464	HP	http://www.thelodgepc.com/

②スノーフラワーコンドミニアム

Snow Flower Condominium

住所	401 Silver King Dr. Park City, 84060-3177				
TEL	+1 435 649 6049	FAX	+1 435 649 6049	HP	http://www.snowflowerparkcity.com/index.html

③ベストウェスタン・ランドマークイン(コンドミニアム／ホテル)

Bestwestern Landmark Inn

住所	6560 North Landmark Inn Park City, Utah 84098				
TEL	+1 435 649 7300	FAX	+1 435 649 1760	HP	http://www.bwlandmarkinn.com

[ソルジャーハロー]

①ホームステッドリゾート(コンドミニアム&ホテル)

Homestead resort

住所	700 North Homestead Drive Midway, UT 84049				
TEL	888 327 7220	FAX	435 654 5087	HP	http://www.homesteadresort.com

[ソルトレークシティ]

①リトルアメリカホテル

Little America Hotel

住所	500 South Main Street Saltlake City, Utah 84101				
TEL	+1 801 363 6781	FAX	+1 801 596 5910	HP	http://www.littleamerica.com/slc

②ベストウェスタンガーデンイン

Best Western Garden Inn

住所	154 W Ute 600 South Saltlake City, Utah 84101				
TEL	+1 801 521 2930	FAX	+1 801 325 5320	HP	http://www.bwgardeninn.com

2006 年 3 月 7 日

日本ろう者スキー協会 殿

日本ろう者スポーツ協会
会長 田口 博人

第 16 回デフリンピック冬季大会
日本代表選手の推薦について（依頼）

聴覚障害者スポーツの振興につきましては、平素より格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、第 16 回デフリンピック冬季大会について、貴会におかれましては、日本代表選手の推薦方針などが決まり、選考が始まりつつある状況と思います。

日本ろう者スポーツ協会（2006 年 4 月 1 日から財団法人全日本聾唖連盟スポーツ委員会に改組）では、日本代表選手の選考会を 4 月 8 日に実施いたしますので、貴会より代表選手の推薦をお願い申し上げます。

参考に日本ろう者スポーツ協会で考えている派遣選手の上限数を下記します。

記

●派遣選手の上限数

競技名		男子	女子
1	アルペンスキー	2	2
2	アルペンスノーボード	3	3
3	スノーボードハーフパイプ	2	0
4	クロスカントリースキー	3	3
合 計		10	8

※ 同競技内での男女別人数の調整は考慮します。

1 提出書類

- 1) 様式 1 競技団体名は「日本ろう者スキー協会(競技名)」とご記入ください。
- 2) 様式 2 4 月より来年 2 月までの強化計画をご記入下さい。
- 3) 様式 3-1 日本代表推薦選手一覧表（個人競技用）
- 4) 様式 4-1 日本代表推薦選手調査書
- 5) 様式 6-1 選手プロフィール（個人競技用）

※ 写真はデジタルで貼り付けて下さい。

2 注意事項

- 1) 用紙は人数分コピーして記入してください。
- 2) 全ての書類はパソコンで作成してください。
- 3) 提出は郵送と E-Mail でご送付ください。

3 提出期限

平成18年3月27日（月）厳守

4 添付書類

- 1) デフリンピック日本代表選手選考規定
- 2) 第16 回冬季デフリンピック大会日本代表選手の選考について
- 3) 様式6ー1 選手プロフィール（個人競技用）記入例

5 提出先 日本ろう者スポーツ協会

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル8F

（財）全日本聾唖連盟本部事務所

担当 瀬川

Tel：03-3268-8847 Fax：03-3267-3445

Email：dwg16@jfd.or.jp

第16回
デフリンピック冬季大会
競技団体調査書

(記入日 年 月 日)

競技団体名				
所在地		〒		
TEL			FAX	
E-Mail				
連絡 責任者	氏名			
	役職			
	所在地	〒		
	TEL		FAX	
	E-Mail			
デフリン ピック 担当者	氏名			
	役職			
	所在地	〒		
	TEL		FAX	
	E-Mail			
メディア (広報) 担当者	氏名			
	役職			
	所在地	〒		
	TEL		FAX	
	E-Mail			
第16回デフリンピック冬季大会推薦選手数				
推薦人数	選手	名		

＊この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。

競技名

第16回デフリンピック冬季大会までの強化活動計画を詳しく記入してください。

		(記入日		年	月	日)
強化内容 (該当に○)	実施期日	実施場所	参加人数			
		所在地	選手	コーチ	総数	
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合宿 競技会 () その他 ()	月 日 ~ 月 日	〒 住所 TEL				
合 計						

*この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。
*参加人数はデフリンピック参加予定者を記入して下さい。

第16回
デフリンピック冬季大会
日本代表推薦選手一覧表（個人競技用）

競技名	
-----	--

(記入日2006年 月 日)		
順位	氏名	推薦の理由（メダル、入賞の可能性を具体的に記入すること）
【例】	〇〇 〇〇	2003年のデフリンピック、大回転2位。また、2003、2004年全国ろうあ者冬季体育大会の大回転で優勝した。
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		

* 当用紙に記載された内容は、第16回デフリンピック冬季大会日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

第16回
デフリンピック冬季大会
日本代表推薦選手調査書

競技名	
-----	--

(記入日 年 月 日)

氏 名	性	名		
ふりがな			性別	
漢 字				
ローマ字				
出生地	都道府県	市 郡	区 町村	
生年月日	19 年 月 日	歳	(2007年2月1日現在)	
父親の氏名		母親の氏名		
ふりがな		ふりがな		
漢 字		漢 字		
ローマ字		ローマ字		
パスポート 有 ・ 無	名前 ローマ字		有効 期限	年 月 日
	旅券番号		国籍	
現住所	ふりがな			
	住所			
	TEL		携帯	
	FAX		E-Mail	
住民票のある住所 * 現住所と異なる場合は記入して下さい。				
障害名（具体的に）			等級	
装具の使用 (該当に○)		補聴器 ()	人工内耳 ()	その他 ()
勤務先 (在籍学校名)	名称			
	所在地			
	所属部署 (学年)		役職	
	TEL		FAX	
派遣依頼 (必要な場合記入)	所属長名		役職	
	会社名			
	送付先			
伴走者等 (必要な場合記入)		氏名	削除？	
緊急連絡先	連絡者氏名		TEL	

* 当用紙に記載された内容は、第16回デフリンピック冬季大会日本選手団として必要なことのみを使用いたします。

第16回
デフリンピック冬季大会
選手プロフィール（個人競技用）

（記入日 2006年 月 日）

ふりがな			競技名			
選手氏名						
メダル獲得予想						
種 目	予想					
国際大会成績・記録 デフリンピックの成績は全て記入してください。						
開催年	大会名	競技	種目	記録	順位	参加者数
国内大会成績・記録						
開催年	大会名	競技	種目	記録（決勝）	順位	参加者数

*この様式は、日本選手団広報のためのメディア配布資料となります。

2006年5月26日

日本ろう者スキー協会
会長 吉田 實 様

財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
委員長 田口 博人

第16回冬季デフリンピック
日本代表選手団総監督・各競技監督の推薦について（依頼）

時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、世界のろうスポーツの普及・発展を目的として4年に1度開催される冬季デフリンピックへ当連盟では過去8回にわたり日本代表選手団を派遣して参りました。

2007年2月1日～10日に第16回冬季デフリンピック（於米国・ソルトレークシティ）が開催されるにあたり、豊富な知識と経験、指導実績をお持ちである貴協会に総監督並びに各競技監督の推薦をご依頼したく存じます。

貴協会におかれましては公務ご多忙の折に恐縮に存じますが、今後の聴覚障害者冬季スポーツの発展のためにも、ぜひともご指導ご協力を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

記

1 提出書類

- 1) 様式7 日本代表推薦総監督・各競技監督一覧表

2 注意事項

- 1) 全ての書類はパソコンで作成してください。
2) 提出は郵送とE-Mailでご送付ください。

3 提出期限

平成18年6月5日（月）

4 提出先 財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会

〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F

（財）全日本聾唖連盟本部事務所内

担当 瀬川

Tel: 03-3268-8847 Fax: 03-3267-3445

Email: dwg16@jfd.or.jp

第16回冬季デフリンピック
日本代表総監督・各競技監督一覧表

競技名	
-----	--

(記入日 年 月 日)

No.	役職	氏名	推薦の理由
1	総監督		
2	アルペンスキー 競技監督		
3	アルペン スノーボード 競技監督		
4	スノーボード ハーフパイプ 競技監督		
5	クロスカントリー スキー 競技監督		

* 当用紙に記載された内容は、第16回冬季デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

第16回冬季デフリンピック
日本代表各競技スタッフ一覧表

競技団体	
------	--

(記入日 年 月 日)

No.	役職	氏名	
1	アルペンスキー スタッフ		
2	アルペンスキー スタッフ		
3	アルペンスノーボード スタッフ		
4	アルペンスノーボード スタッフ		
5	スノーボードハーフパイプ スタッフ		
6	クロスカントリースキー スタッフ		
7	クロスカントリースキー スタッフ		

＊ 当用紙に記載された内容は、第16回冬季デフリンピック日本選手団として必要なことのみに使用いたします。

第16回冬季デフリンピック・日本代表役員
調査票

勤務先等に対する 派遣協力依頼文書	必要 ・ 不要 (※必要な場合は、下記の欄にご記入ください。)			
派遣協力依頼 文書宛先	会社名 部署名	(お勤めの会社名をご記入下さい。例: ●●株式会社 ▲▲部 ■■課)		
	所属長名	(自分が所属している部署の上司の名前をご記入下さい。)		
	役職	(例: 上司の役職をご記入下さい。例: 社長、部長など)		
	住 所	〒		
	FAX		TEL	
送付先	本人宛 ・ 所属長宛			
※ 調査票提出先 : 第16回冬季デフリンピック派遣委員会事務局 FAX 03-3267-3445				
※ 提出締め切り : 2006年8月24日(木)必着				

競技_____

氏名_____

		競技名					
(記入日 年 月 日)							
氏 名	性		名		性別		
ふりがな							
漢 字							
ローマ字					男		
					女		
出生地	都道 府県		市 郡		区 町村		
生年月日	19 年 月 日		歳 (2007年2月1日現在)				
父親の氏名			母親の氏名				
ふりがな			ふりがな				
漢字			漢字				
ローマ字			ローマ字				
パスポート	名前 ローマ字		有効 期限	年 月 日			
有 ・ 無	旅券番号		国籍				
現住所	ふりがな	〒					
	住所						
	TEL		携帯				
	FAX		E-Mail				
住民票のある住所 *現住所と異なる場合は記入して下さい。		〒					
装具の使用 (該当に○)		補聴器 () 人工内耳 () その他 ()					
勤務先	名称						
	所在地	〒					
	所属部署		役職				
	TEL		FAX				
派遣依頼 (必要な場合 記入)	所属長名		役職				
	会社名						
	送付先	〒					
緊急連絡先	連絡者氏名		TEL				
語学力 (英語)	Reading & Writing	5	4	3	2	1	5段階評価 (5が最良) 該当の番号に○印
	Listening & Speaking	5	4	3	2	1	

* 当用紙に記載された内容は、第16回冬季デフリンピック日本代表選手団として必要なことのみを使用いたします。

(記入日 年 月 日)										
氏 名	性		名		性別	競技名				
ふりがな						男	デジタル写真添付 3.5×4.5 3ヶ月以内に撮影			
漢 字										
ローマ字					女					
現住所	都道 府県		市 郡		区 町村					
生年月日	19	年	月	日	歳 (2007年2月1日現在)					
出生地	都道 府県		市 郡		区 町村		勤務先名			
障害の有無	無 ・ 有		有りの場合、障害名		業務内容					
					身長		cm			
出身校 *在学の場合は学年記入のこと					体重		kg			
指導者・競技役員等 の資格	取得年		資格の内容				備考			
	年									
	年									
	年									
	年									
	年									
	年									
国際大会等の参加歴	参加年		大会名				開催地		役職・役割等	
	年									
	年									
	年									
	年									
	年									
	年									
所属団体					指導歴		年			
競技団体内での役職										
第16回冬季デフリンピックに対して抱負を書いてください。										

*この様式は、第16回冬季デフリンピック日本代表選手団広報のためのメディア配布資料となります。

誓 約 書

私は、第16回冬季デフリンピックの日本代表として、財団法人全日本ろうあ連盟第16回冬季デフリンピック派遣委員会の意向に従い、以下の事項について誓約いたします。

- 1, 第16回冬季デフリンピックの日本代表としての名誉を保ち、国際ろうスポーツ委員会の規則を遵守して競技・行動すること。
- 2, 国際アンチ・ドーピング機構規程および関連ドーピング規定を遵守すること。
- 3, 第16回デフリンピック開催期間中、組織委員会の許可した報道機関および日本選手団事務局の撮影・録音・放映・インタビュー等には、日本代表の義務として応じること。
- 4, 財団法人日本障害者スポーツ協会日本パラリンピック委員会、財団法人全日本ろうあ連盟第16回冬季デフリンピック派遣委員会の主催および許可した行事への参加や、冊子等への第16回冬季デフリンピック期間中に撮影した写真やインタビュー記事の掲載等について協力すること。
- 5, 公式ユニフォームは代表者のみに支給されるものであることを理解し、他人に譲ったり売買したりしないこと。

以 上

2006 年 月 日

競技：

自筆署名：

印

財団法人全日本ろうあ連盟
第16回冬季デフリンピック派遣委員会
委員長 安藤 豊喜 殿

デフリンピック日本代表選手選考規程

財団法人財団法人全日本聾唖連盟

日本ろう者スポーツ協会

○選考基準

本協会は、次の全ての条件を満たし、本協会が友好団体として承認するデフリンピック関連競技団体（以下「デフリン競技団体」という。）が推薦する者を日本代表選手として選考し決定する。

- 1 DEAFLYMPICS に加盟または承認された競技団体が定めたデフリンピック参加資格を満たしている者
- 2 メダルの獲得の可能性のある者、それに準じる競技力の認められる者
- 3 医学的観点も含め、日本代表選手として推薦できる者
- 4 日本国籍を有するか、DEAFLYMPICS の規定により日本代表選手としてデフリンピックに参加の認められる者

○選考手順

本協会は次の手順によって日本代表選手を選考し決定する。

- 1 当該デフリン競技団体よりの推薦
- 2 本協会事務局による選考資料の作成
- 3 本協会中央委員会により日本選手団の決定
- 4 推薦デフリン競技団体への通知をはじめ、関係先への公表
- 5 選考結果に対する申し立ては、公表後 7 日以内に、当該デフリン競技団体を通じて文書により行われたものについて受理し、(財)全日本ろうあ連盟により処理をする

○デフリン競技団体が推薦にあたって留意すること

- 1 推薦選手選考規定を作成し、公平性と併せて透明性に留意すること
- 2 推薦選手選考基準または方針、推薦選手選考の日程およびその結果を公表すること
- 3 推薦にあたっては、本委員会が規定する書式で次の書類を添付すること
 - ア 推薦選手一覧表（順位と推薦根拠の概要）
 - イ 推薦選手調査書
 - ウ 健康診断書
 - エ 服用薬物およびサプリメントについての調査書
- 4 推薦にあたっては、参考として次の資料を添付すること
 - ア 推薦選手選考規定
 - イ 推薦選手選考委員会名簿
 - ウ 推薦の根拠とした資料（当該国際スポーツ組織の参加制限＜出場枠など＞、公式ランキング、公式記録など）
 - エ 選考に当たって生じた紛争などを速やかに解決し、その内容についての説明書
 - オ その他本委員会が求めるもの
- 5 選手のプライバシーの保護には十分留意すること

第 16 回冬季デフリンピック大会日本代表選手の選考について

2007 年 2 月 1 日より 11 日まで、米国ユタ州ソルトレークシティにて、第 16 回冬季デフリンピック大会が開催されます。財団法人全日本ろうあ連盟は日本パラリンピック委員会との連携の上、アルペンスキー、スノーボード・アルペン、スノーボード・ハーフパイプ、ノルディック・クロスカントリースキーの 4 競技に日本代表を派遣する方針です。

全日本ろうあ連盟は別紙「デフリンピック日本代表選手選考規程」によって選手の選考を行ないます。この選考を進めるにあたっての選手候補基準を下記のとおり定めることで、日本ろう者スキー協会のご協力をいただくことになりました。

【選手候補の基準】

- ① 財団法人全日本ろうあ連盟加盟団体の会員であること。
- ② 冬季デフリンピック大会開催年度（2006 年度）の前年度（2005 年度）を含む過去最近 3 年間に、全日本ろうあ連盟主催の全国ろうあ者冬季体育大会（またはそれに代わる競技会）に 1 回以上出場していること。（なお大会は前年度、前々年度、3 年前の順に重視する）
- ③ 同じく過去最近 3 年間（2003, 2004, 2005 年度）に、国内地域スキー連盟主催の公認大会に、年に最低一回以上出場していること。（前年度、前々年度、3 年前の順に重視する）
- ④ 強化指定選手として全日本ろうあ連盟主催、またはそれに代わる主催者（日本ろう者スキー協会など）の開催する強化合宿に参加した者、また参加する者であること。
- ⑤ 日本ろう者スキー協会が特に推薦する者であること。

★ただし、第 16 回冬季デフリンピックについては、次の特例を設けます。

- ① ノルディック・クロスカントリースキー競技は、「第 37 回全国ろうあ者冬季体育大会」でオープン競技として初めて開催されるので、これに参加した選手を選手候補の対象に含める。
- ② スノーボード・ハーフパイプ競技は 2006 年 3 月 19 日に開催される日本ろう者スキー協会主催の「2007 デフ・スノーボード・ハーフパイプ日本選手権大会」に参加した選手を選手候補の対象に含める。

以上

連本第 号
2006 年 9 月 4 日

第 16 回冬季デフリンピック
関連競技団体 代表者 様

(財) 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
委員長 山根昭治

聴力検査図の提出協力依頼

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

第 16 回冬季デフリンピックに出場するにあたって、ICSD から出場資格に関する規程が発表されています。その中に下記のとおり、聴力に関する規程が定められています。

この条件に適っていることを証明するために、聴力検査図を提出しなければなりません。第 15 回冬季デフリンピック（スウェーデン・スンツバル）など ICSD/CISS 認定の国際大会に出場して聴力検査を提出したことがある者は改めて提出する必要はありませんが、これまでに提出したことのない選手は提出しなければなりません。

別紙のとおり、日本代表選手の中で前大会に出場したことのある選手をチェックしました。それ以外の選手は医療機関にて聴力検査を受け、ICSD の定める聴力検査図に結果を記入してもらうよう各団体で指導をお願い致します。また前大会に出場した選手はどのようにして検査して記入してもらったか、その経験を皆さんにアドバイスしていただくなど、各自取り組みをお願い致します。

回収した聴力検査図は 12 月 19 日までに当事務局までご提出願います。何卒、皆様のご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

*デフリンピックに出場経験のある選手で、婚姻等により氏名変更のあった場合は、旧姓でのパスポート《写真付きのページ》と現在のパスポートのコピーをお送りください。（聴力検査図は不要です）

以 上

【デフリンピック 一般規則 1.3.3 より抜粋】

3.3 デフリンピックに参加する選手は以下の条件に適う者でなければならない:

1. ろう者であること:この場合は両耳のうち、聴力が優れた方の耳の聴力レベルが最低でも 55 デシベル以上の者を指す(1964 年に定めた ISO 基準:500、1000、2000 ヘルツの3つの振動数平均を基準とする)

連本第 号
2006 年 9 月 4 日

担 当 医 師 様

東京都新宿区山吹町 130 SK ビル 8 階
TEL 03(3268)8847 FAX 03(3267)3445
財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
委員長 山根 昭治

第 16 回冬季デフリンピック 聴力検査のご協力依頼

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

2007 年（平成 19 年）2 月 1 日～10 日に第 16 回冬季デフリンピックが米国・ソルト
レークにおいて開催されます。当連盟では標記大会に向けて代表選手 17 名を派遣する予
定であります。

この競技大会に出場するには、選手が「聴力が優れた方の耳で 55 デシベル(dB)以上
(500、1000、2000 ヘルツの 3 周波の振動数平均：1969 年 ISO 標準) のろう者」であ
ることが条件となります。そのため医師の診断書が求められていますので、聴力検査の
実施をお願い申し上げます。検査結果を所定用紙にご記入のうえ選手にお渡し下さい。

又、《見本》を別紙の通りご用意いたしましたので、ご参考になさってください。

●聴力検査表

<http://www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf>

(お問合せ先)

(財)全日本ろうあ連盟スポーツ委員会事務局 担当：瀬川奈美
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
E-MAIL (segawa@jfd.or.jp)

以 上



Founded in 1924

International Committee of Sports for the Deaf
Recognized by the International Olympic Committee

528 Trail Avenue
Frederick, Maryland 21701
UNITED STATES
Fax + 1 301 620 2990
E-mail: info@ciss.org

PLEASE PRINT OR USE TYPEWRITER

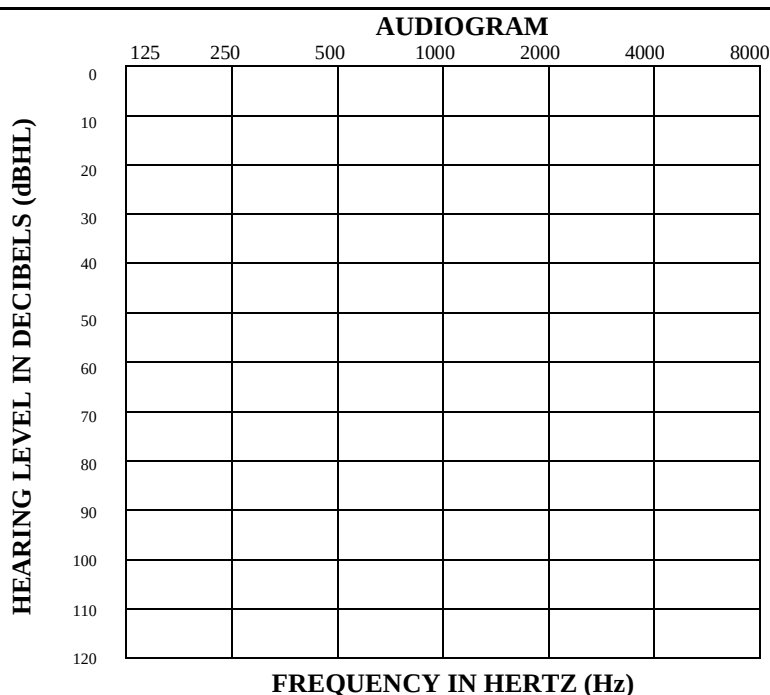
Name:
(family name) (first name) (middle name)

Sex: Male ☐ Female ☐ Audiometer (name):

Date of Birth: Calibration:
(Day/Month/Year) ANSI 1969 ☐

Country: ISO 1964 ☐
Other:

Date of examination: Examiner:
(Day/Month/Year)



IMPEDANCE TYMPANOMETRY

RIGHT

TYPE	INIT CAV.	PEAK COMP.	STATIC COMP.	MEP

LEFT

TYPE	INIT CAV.	PEAK COMP.	STATIC COMP.	MEP

REFLEXOMETRY

SIDE EQUALS PROBE EAR

RIGHT

STIM	500	1000	2000	4000
IPSI				
CONTRA				
DECAY				

LEFT

STIM	500	1000	2000	4000
IPSI				
CONTRA				
DECAY				

KEY TO SYMBOLS

Ear	Air	Air-masked	Bone	Bone-masked	AB Words	SSI Test
R	O	O	<	•	O	•
L	X	X	>	•	X	•
Soundfield	S	No response	?			

TYPE OF HEARING LOSS

	Right	Left
Sensori-neural		
Conductive		
Mixed		

Check One for Each Ear

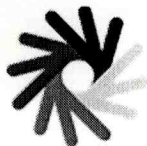
**PURE TONE AVERAGE
(500-1000-2000 Hz)**

	Right	Left
AIR		
BONE		

Comments:

Please complete and send to International Committee of Sports for the Deaf Secretariat (address as per above)

《見本》✓印に記入をお願いします。



Founded in 1924

International Committee of Sports for the Deaf
Recognized by the International Olympic Committee

528 Trail Avenue
Frederick, Maryland 21701
UNITED STATES
Fax +1 301 620 2990
E-mail: info@ciss.org

PLEASE PRINT OR USE TYPEWRITER

✓ Name: _____
(family name) (first name) (middle name)

✓ Sex: Male ☐ Female ☐

✓ Audiometer (name): RION AA-73

✓ Date of Birth: _____
(Day/Month/Year)

✓ Calibration: MAY 2002

✓ Country: Japan

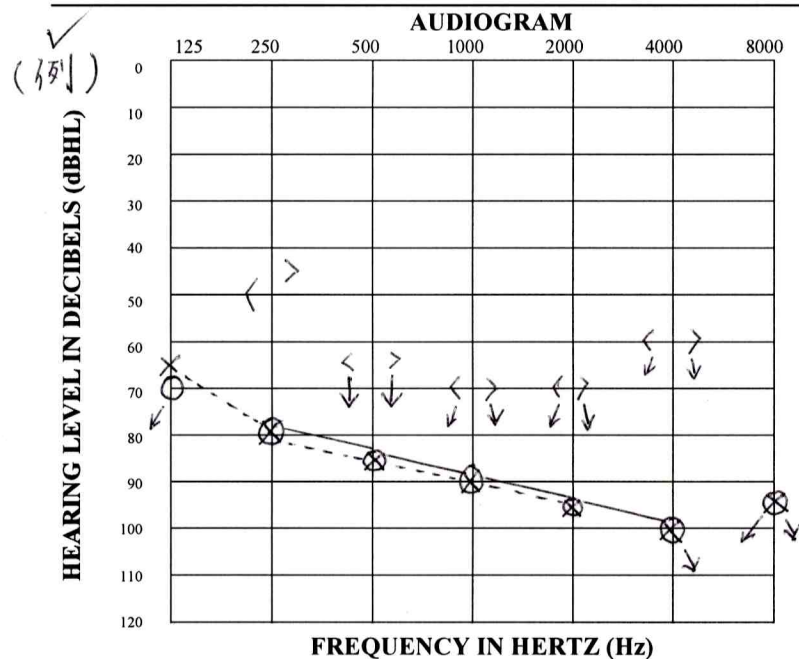
ANSI 1969 ☐

ISO 1964 ☐

Other: Japan JIS T1201(1982)

✓ Date of examination: _____
(Day/Month/Year)

✓ Examiner: Dr.



IMPEDANCE TYMPANOMETRY

RIGHT

TYPE	INIT CAV.	PEAK COMP.	STATIC COMP.	MEP

LEFT

TYPE	INIT CAV.	PEAK COMP.	STATIC COMP.	MEP

REFLEXOMETRY

SIDE EQUALS PROBE EAR

RIGHT

STIM	500	1000	2000	4000
IPSI				
CONTRA				
DECAY				

LEFT

STIM	500	1000	2000	4000
IPSI				
CONTRA				
DECAY				

KEY TO SYMBOLS						
Ear	Air	Air-masked	Bone	Bone-masked	AB Words	SSI Test
R	O	O	<	•	O	•
L	X	X	>	•	X	•
Soundfield	S	No response	?			

✓ (例)

TYPE OF HEARING LOSS		
	Right	Left
Sensori-neural	O	O
Conductive		
Mixed		

Check One for Each Ear

✓ (例)

PURE TONE AVERAGE (500-1000-2000 Hz)		
	Right	Left
AIR	90dB	90dB
BONE		

Comments: bilateral congenital deafness

examiner address:

E-mail:

Please complete and send to International Committee of Sports for the Deaf Secretariat (address as per above)

オーディオグラムおよび補聴器に関する規則(全日本ろうあ連盟事務局仮訳)

前文

スポーツ精神とは、人間の精神・肉体・心を祝し、以下の価値観によって特徴づけられるものである：

- * 倫理感、フェアプレイ、正直さ
- * 健康
- * すぐれたパフォーマンス
- * 人格と教育
- * 楽しみと喜び
- * チームワーク
- * 専心と献身
- * 規則や規約の遵守
- * 自身および他の参加者の尊重
- * 勇気
- * コミュニティと連帯

ICSD は、「スポーツによる平等」というオリジナルのモットーを掲げ、オリンピック精神の本質をろう者とわかちあう。

夏季・冬季デフリンピックおよび世界選手権などの ICSD 認定の競技会には、ろうおよび難聴の選手だけが参加することができる。

正会員、準会員、地域連盟は、国際および国内のスポーツイベントにおいて、以下のオーディオグラム規則を遵守する。

参加資格に関する規則：

夏季・冬季デフリンピックは、加盟団体である全国的なろう者組織のろうのスポーツ選手が終結する場である。デフリンピックおよびその他の ICSD 認定競技会の参加者は、以下のとおりでなければならない：

- * 聞こえが良い方の耳の聴力が 55dB 以上の聴覚障害を有する（500, 1000, 2000 ヘルツの三つの純音平均、気導、ISO1969 基準）ろう者であること。
- * 加盟団体である全国的な組織の会員であり、その国の国民であること。

選手は、競技中、あらゆる補聴機器、増幅器および人工内耳の体外パーツを使用してはならない。スポーツ競技において、音の増幅器の使用が有利に作用することは明白である、そのため、競技中は使用が禁止されている。

第一条：定義およびろう者であることの証明

1. 1 「ろう者であること」の定義は、良耳の聴力が 55dB 以上の聴力障害を有することである。(500, 1000, 2000 ヘルツの三つの純音平均、気導、ISO1969 基準) 55-65dB の境界域の聴力については、慎重に審査すること。
1. 2 各選手の聴力審査については、各国のスポーツ協会が全責任を負う。
1. 3 各選手は、添付資料 1 の ICSD のオーディオグラムの書式を用いなければならない。書式は、<http://www.deaflympics.com> からダウンロードすることができる。
1. 4 全てのオーディオグラムは、虚偽偽りのない本人のもでなければならない。オーディオグラムの信憑性については、各国のろうスポーツ協会が保障しなければならない。

第二条：オーディオグラムの承認手続き

2. 1 競技前

2. 1. 1 全てのオーディオグラムを、ICSD 事務局に直接送付する。
2. 1. 2 受領されたオーディオグラムは、ICSD のデータベースに入力され、彼らが「自国審査済み」であることを示すために、各国のろうスポーツ協会「NDSF」も入力される。
2. 1. 3 オーディオグラムは、確認のために ICSD のオーディオロジストに送られる。
2. 1. 4 ICSD のオーディオロジストが、承認されたオーディオグラムを示す。
2. 1. 5 オーディオグラムが承認されると「NDSF」の欄が「ICSD」に変えられる。

2. 2 最終登録時（または、その前に）

2. 2. 1 最終登録用紙と同時、またはそれ以前に、ICSD のデータベースに登録されている全ての当該国の選手の名リストを送付する。
2. 2. 2 最終登録用紙には、ICSD の ID 番号の欄がある。
2. 2. 3 ICSD のデータベースに登録されている選手は、当該箇所に ICSD ID 番号を入力する。該当する選手は、オーディオグラムを提出しなくてもよい。
2. 2. 4 当該選手が ICSD の審査済みとデータベースに記されている場合、それ以上の審査は必要がない。
2. 2. 5 当該選手が NDSF の審査済みとデータベースに記されている場合、その先週は ICSD の審査を受けなければならない場合がある。

2. 3 デフリンピックにおいて（他の ICSD 認定の大会において）

2. 3. 1 選手の審査時間を確保するのは、チームリーダーの責任である。(2. 2. 5, 2. 2. 6 参照)
2. 3. 2 予約を守らなかった場合、料金が課せられる。

- 2. 3. 3 オーディオグラム規則にしたがってテストを受けずに大会会場を後にした選手は、参加資格を失う。
- 2. 3. 4 ICSD は、すでに承認を受けている選手であっても、いつでも審査をおこなう権利を有する。

第三条：大会中の聴力テスト

- 3. 1 ICSD の役員および技術委員は、大会中、オーディオグラムを提出するように求めることができる。選手は、最終の試合の終了後、同日あるいは次の日に審査を受けることができる。
- 3. 2 オーディオグラム審査は、試合のスケジュールを邪魔したり、変更させたりしてはならない。
- 3. 3 チームリーダーは、決められた時間に ICSD のオーディオロジストと会い、選手に審査を受けさせるリーダーと選手は、パスポートまたは ID を持ってくる。

第四条：責任

- 4. 1 試合中にいかなる増幅器も用いないようにすることは、各選手の自己責任である。
- 4. 2 試合会場にはいる際、全選手が補聴器や増幅器をはずしておくことを、強くすすめる。試合前の練習には、すべての選手が補聴器をはずさなければならない。

第五条：発覚した場合

- 5. 1 もし選手が、試合中に補聴器または増幅器を着用しているのを見つけた場合、ただちに、当該スポーツの技術委員と異議申し立て委員会にその旨を報告しなければならない。当該試合において承認を受けているリーダーおよびトレーナーだけが、補聴器・増幅器の装用について異議を申し立てることができる。
- 5. 2 補聴器・増幅器の使用が発覚した場合、技術委員および異議申し立て委員会と関係するチームリーダーおよび目撃者は、可能であればすぐに試合を中断すること。それができない場合はレースを終了させるか、審判に中断させるようにする。

第六条：違反と罰則

- 6. 1 違反
 - 6. 1. 1 個人競技の選手が補聴器・増幅器を使用した場合、当該選手は即時に競技から除外されなければならない。当該選手が他のスポーツや他の種目にも登録している場合、選手は、違反がおこなわれた種目についてのみ失格となる。

例 A： 陸上競技：選手が 100m、200m、400m に登録していたとする。その選手は、200m のレースで補聴器をつけているところを見つけた。このことは、この選手の 100m および 400m には、影響しない。リレーで違反がおこなわれた場合、リレーチーム全員が失格にある。

例 B：バドミントン：選手がシングル、ダブルス、ミックスダブルスに登録していたとする。その選手は、ダブルスの試合で補聴器を使用していることが見つかった。このことは、その選手のシングルおよびミックスダブルのパフォーマンスには関係しない。もし違反がチーム競技でおこなわれた場合、そのチーム全員が当該種目から失格になる。

- 6. 1. 2 チーム競技の選手が競技中に補聴器を使用していた場合、各競技の試合没収に関する規則にしたがって、試合が没収されて、チームは負けることになる。選手は、次の試合には、自由に参加することができる。試合の得点状況によっては、負けることが返って有利になる場合がある。このことを考慮にいれ、チームがゲーム没収のために得をするようなことは決してないようにしなければならない。
- 6. 1. 3 選手が違反を繰り返した場合、当該選手とチームは、すぐに大会から除外され、ICSD に報告され、執行委員会が定める一定期間出場停止になる。

6. 2 ペナルティ

- 6. 2. 1 これらの規則に違反した場合、失格した選手と（あるいは）に授与されたすべての賞品、賞、メダル、証書が取り消される。
- 6. 2. 2 もし各国のろうスポーツ協会が一度以上、上記の第一条または第二条の違反を繰り返した場合、ICSD 執行委員会は、当該ろうスポーツ協会を、2 年から 4 年の間、ICSD に関連したスポーツ種目に対して参加停止を命じる場合がある。
- 6. 2. 3 各国ろうスポーツ協会が資格を失っている間、ろうスポーツ協会とそのチームは、ICSD にかかわりのあるスポーツイベントに参加することはできない。

平成 18 年 8 月 18 日

第 16 回冬季デフリンピック

関連競技団体 代表者 様

(財) 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会

委員長 山根昭治

第 16 回冬季デフリンピック競技大会参加に伴う
ドーピング禁止薬使用選手の取り扱いについて

平素は、聴覚障害者スポーツの振興に格別のご配慮を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、標記について、各競技団体からの推薦のあった選手に対し周知および必要な書類を取り纏めのうえ提出していただけますようお願いいたします。

第 16 回冬季デフリンピック出場にあたりたいへん重要な情報ですので、選手に対する周知に漏れがないようよろしくようお願い申し上げます。

敬具

1 送付書類

- 1) デフリンピックおよび各種国際大会出場に伴うドーピング禁止薬使用選手の取り扱いについて
- 2) ドーピング検査とは
- 3) ドーピング検査の手順
- 4) 日本アンチ・ドーピング機構 (JADA)・治療目的使用の適用措置委員会 (TUEC) への禁止薬物使用許可申請について
- 5) 日本アンチ・ドーピング機構 (JADA)・TUEC への禁止薬物使用許可申請の手順
- 6) 別紙 1 「選手連絡票」
- 7) 別紙 2 「使用薬物についての調査書」
- 8) 別紙 3 「使用する可能性のある薬物についての調査書」

2 提出書類

- 1) 別紙 1 「選手連絡票」
- 2) 別紙 2 「使用薬物についての調査書」
- 3) 別紙 3 「使用する可能性のある薬物についての調査書」

3 提出方法

別紙 1、2、3 を競技団体がとりまとめ、下記に提出して下さい。

4 提出先 (財) 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会事務局 担当：瀬川奈美

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SK ビル 8F

Tel: 03-3268-8847 Fax: 03-3267-3445

E-MAIL: (segawa@jfd.or.jp)

◆お問い合わせは…

〒108-8329 東京都港区三田 1-4-3

国際医療福祉大学付属三田病院 リハビリテーション科

草野 修輔

(日本障害者スポーツ協会医学委員会 アチ・ド・セ・ツグ 部会長)

Tel : 03-3451-8121 Fax : 03-3454-0067

Email : shukusano@iuhw.ac.jp

5 提出期限 平成18年8月31日(木) 必着

第16回冬季デフリンピック
関連競技団体 各位

(財)日本障害者スポーツ協会医学委員会
委員長 陶山 哲夫

デフリンピック大会および各種国際大会出場に伴う
ドーピング禁止薬使用選手の取り扱いについて

ICSD（国際ろうスポーツ委員会）が世界アンチ・ドーピング規程を採択したことにより、デフリンピックをはじめとする各種国際大会でも、ドーピング検査が実施されるようになりました。当協会でも、ジャパンパラリンピック大会やその他の主催大会では積極的にドーピング検査を取り入れる方針をうち立てています。また、障害者スポーツにおいても、競技外検査として「抜き打ち」で検査を行うことになっています。

このため、当委員会アンチ・ドーピング部会では、大きな大会の前でなくても、恒常的に選手の使用薬物の調査を行なっていますが、今回は特にデフリンピックへ向けて使用薬物調査を行うこととしました。薬物を使用している選手については、市販薬、処方薬を問わず、すべての使用薬物リスト（禁止薬物でないと考えられる薬物も含む）をお送りいただき、そのひとつひとつについてアンチ・ドーピング部会で調査した上で、個々の対応に当たります。初回のリスト提出（別紙1・2・3）に関しましては主治医の発行した診断書は必要ありませんが、各選手とも使用薬物に漏れのないようにご指示をお願いいたします。

使用している薬物のうち、禁止物質を含んでいるものについては、アンチ・ドーピング部会が選手本人と連絡をとり、使用を中止する、禁止物質を含まない別の薬物に変更する、治療目的使用の適用措置（TUE）を申請する等の対応を指導します。

特に、大会を前提としてTUE申請を行う場合には、大会21日前までに申請を終了していなければならないため、遅くとも3ヶ月前には、使用薬物をアンチ・ドーピング部会に届けておくことがひとつの目安となります。今回はフェスピック大会出場選手の使用薬物調査と時期が重なりますので、早めのご提出をお願い致します。手順につきましては、添付の【日本アンチ・ドーピング機構（JADA）・TUECへの禁止薬物使用許可申請の手順】をご参照ください。

なお、サプリメントにつきましては、どのような救済処置も取ることができませんので、厳重に注意して使用いただきますようお願い致します。

不注意による禁止物質の摂取を避けるためにも、必ず使用薬物リストを提出し、処方薬を変更したり、市販薬を服用する際にも、確認を徹底するよう、ご指導のほど、よろしくお願い致します。

◆提出先は…

(財)全日本ろうあ連盟スポーツ委員会事務局 担当：瀬川奈美

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階

TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445

E-MAIL (segawa@jfd.or.jp)

◆お問い合わせは…

〒108-8329 東京都港区三田 1-4-3

国際医療福祉大学付属三田病院 リハビリテーション科

草野 修輔

(日本障害者スポーツ協会医学委員会 アチ・ド・レ・ソク 部会長)

Tel : 03-3451-8121 Fax : 03-3454-0067

Email : shukusano@iuhw.ac.jp

選手への連絡は原則的に E-mail で行いたいと思いますので、メールアドレスをお持ちの選手は忘れずに E-mail の欄にアドレスをお書き下さい。メールアドレスのない選手につきましては、必要に応じて他の手段（ファックス、郵送など）でご連絡致します。

以 上

ドーピング検査とは

国際ろうスポーツ委員会（ICSD）は、WADA（世界アンチ・ドーピング機構）規程を採用することを決定しました。このことによりドーピング検査及び罰則が健常者と同様に適用されることになりました。

検査でドーピング禁止薬が検出され、違反と判定された場合、ICSD アンチ・ドーピング規程に従って処罰されます。

なお、治療目的で禁止薬物を使用している場合には、事前に所定の申請を行い、承認を受けることで禁止薬物の使用が認められます。

1 ドーピングとは？

ドーピングとは競技能力を高めるために禁止薬物などを使用することで、規則で禁止されています。実際には、WADA が定めたリストに表示された禁止薬物を使用することなどがドーピングに当たり、尿検査で禁止物質が検出されると処罰されます。ドーピングの意図がなく、治療の目的で禁止物質を使用している場合、下記の TUE 申請を行い使用が承認されていないと処罰されます。また栄養補給の目的でサプリメントを使用し、たまたまその中に禁止物質が含まれていた場合も処罰されますので注意が必要です。

詳しくは日本オリンピック委員会サイト(http://www.joc.or.jp/anti_doping/index.html)をご参照ください。

2 治療目的使用の適用措置（Therapeutic Use Exemption＝TUE 申請）

治療目的で禁止薬物を使用している場合は、事前に日本アンチ・ドーピング機構（JADA）TUE 委員会に申請し、承認を得、ICSD に承認の届けを送ることで、その禁止薬の使用が許可されます。この使用許可を「治療目的使用の適用措置（TUE）」といいます。ドーピング検査後、TUE 申請書を提出しても認められませんので、薬物を使用している選手は注意してください。

3 ドーピング禁止薬

禁止薬物のリストは、IOC 公認ドーピング検査機関である三菱ビーシーエルのホームページ(<http://www.mbcl.co.jp/data/doping/index.html>)で確認することができます。

表示は、製品名ではなく薬物名のため判断は難しい状況です。特に、市販の風邪薬（ルル、パブロン、コルゲン等）や漢方薬（葛根湯等）といった、普通に使用している薬品にも禁止薬物が含まれていますので注意が必要です。薬物を使用する際には、内服、点眼、軟膏、湿布等、あらゆる薬物について、禁止物質を含んでいないかの確認が必要です。専門的な知識がない場合、選手本人が禁止薬物かどうかを判断することは非常に困難です。また、医師や薬剤師であっても、ドーピング禁止薬についての知識がないと、その薬物が禁止薬かどうかの判断は付きにくいと言われています。

4 サプリメントについて

サプリメントについては、どのような場合でも、禁止物質が検出された場合の救済措置はありません。

使用したサプリメントに禁止薬物が含まれていた場合には、無条件で違反とみなされます。

欧米系のサプリメントは、成分表示に禁止薬物の表示がない場合も多く、またドーピング違反物質を含んでいないという表示があるものでも、20%以上のものから禁止薬物が検出されているという報告もあります（世界アンチ・ドーピング機構による）。安全かどうかの判断は最終的に選手本人が行い、本人の責任で使用してください。

医師やコーチに安全だと言われたサプリメントや薬物であっても、陽性の判定が出れば言い訳にはならず、すべて選手本人の責任となりますので、理解した上で使用してください。

ドーピング検査の手順

ドーピング検査の対象競技者は、競技順位やくじで決定されます（従って、予告なしに通告されます）。検査内容・手順はドーピングオフィサーがひとつひとつ説明してくれますので、指示に従ってください。

ドーピングオフィサーからドーピング検査対象となったと通告があった後、検査終了まで、選手の全行動はドーピングオフィサーから監視を受けることになります。同様に、検査中は外部からの異物混入を防ぐために、容器の選択、採尿、そしてその容器を密封するまで、選手本人とドーピングオフィサー双方が確認した上で実施されます。検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、尿の成分が分析されます。

その結果は2週間程度で実施団体に報告されます。その後選手に通知され、陽性の場合、その選手は罰則を適用されます。

- | | |
|----|---|
| 1. | ドーピングオフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための通告書類に署名する（検査を拒否することは規則違反となる）。
* ドーピングオフィサーから検査対象になった旨を伝えられます。後に引き続き別の種目の出場がある場合などは、オフィサーにその旨を伝えてください。いったん検査室に出頭し、オフィサーの同伴があれば、その後の競技を続けることも表彰式に出ることも問題ありません。検査には1名の同伴者（コーチや手話通訳など）を連れて行くことができます。なお、検査室へは通告を受けてから1時間以内に出頭する必要があります。 |
| 2. | 尿意をもよおすまでウエーティングルームで待機する。
* 検査室には尿を出やすくするために安全なスポーツドリンクや水等が用意されています。使用する場合は、不正防止のためにボトルのキャップが開けられていないことを確認して下さい。採取した尿量が75ml以下の場合は、再度の採尿が必要です。 |
| 3. | 待機中に、いくつかの採尿カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。 |
| 4. | 採尿する。
* 同性のオフィサーと一緒にトイレに入り、選手が正しく採尿しているかどうかを目で見て確認します。自分で採尿することが難しい選手は、オフィサーの許可を得て同伴者が採尿することもできます。 |
| 5. | 採取した尿を保管するためにいくつかのサンプルキットの中から使用するものを自ら選ぶ。
* サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル2本が入っています。あらかじめサンプルキットが密閉されているか、また容器に破損がないか確認します。 |
| 6. | 2本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりふたをする。 |
| 7. | 残った尿で、pH値と比重を測定する。 |
| 8. | 検査3日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。
* 大会前3日以内に使用した薬物・サプリメントがあれば、名前・服用量などを申告します。診断書に書いてある薬品と同じものでも申告してください。（大会前に薬名、サプリメント名とその成分がわかるものを英語でメモにして所持することをおすすめします。） |
| 9. | ドーピングコントロール用紙にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る。
* 選手と同伴者は記録書の内容が間違いがないか確認し、署名をします。 |

日本アンチ・ドーピング機構(JADA)・治療目的使用の適用措置委員会(TUEC)への

禁止薬物使用許可申請について

1. 使用薬物の調査書の提出

国際大会やジャパンパラリンピック大会等に出場する可能性のある選手のうち、何らかの薬物(医師処方薬だけでなく市販薬も含めて)を使用している選手につきましては、別紙1「選手連絡票」、(別紙2)「使用薬物についての調査書(使用している薬物(内服、吸入、点眼、点鼻、点耳、塗布、湿布、注射、座薬等すべてを記入))」、別紙3「使用する可能性のある薬物についての調査書」を財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会に提出してください。アンチ・ドーピング部会で内容を調査し、禁止物質を使用している選手につきましては、アンチ・ドーピング部会が選手本人と連絡を取り、使用を中止する、禁止物質を含まない別の薬物に変更する、治療目的使用の適用措置(TUE)を申請する等の対応を指導します。

2. JADA・TUEC への申請について

別紙「日本アンチ・ドーピング機構(JADA)・治療目的使用の適用措置委員会(TUEC)への禁止薬物使用許可申請の手順」の図をご参照ください。

アンチ・ドーピング部会担当者より禁止物質を使用している選手に対して、その内容について直接選手に連絡するとともに、必要に応じて、該当選手あて TUE 申請書を送付します。該当選手は、主治医に禁止薬物が処方されていることを説明し、JADA 略式あるいは標準 TUE 申請書に必要事項を記入(注意: 国際的レベル競技者であるため、国内での TUE 申請であっても、すべて英語表記にて記載)してもらった後、アンチ・ドーピング部会へ返送します。すべての書類が揃った段階で完成させた TUE 申請書を、JPC を通じて JADA・TUEC に提出します。

状況は競技団体にも報告致します。ご不明な点がございましたら、どんなことでもアンチ・ドーピング部会にお問い合わせください。

◆提出先は…

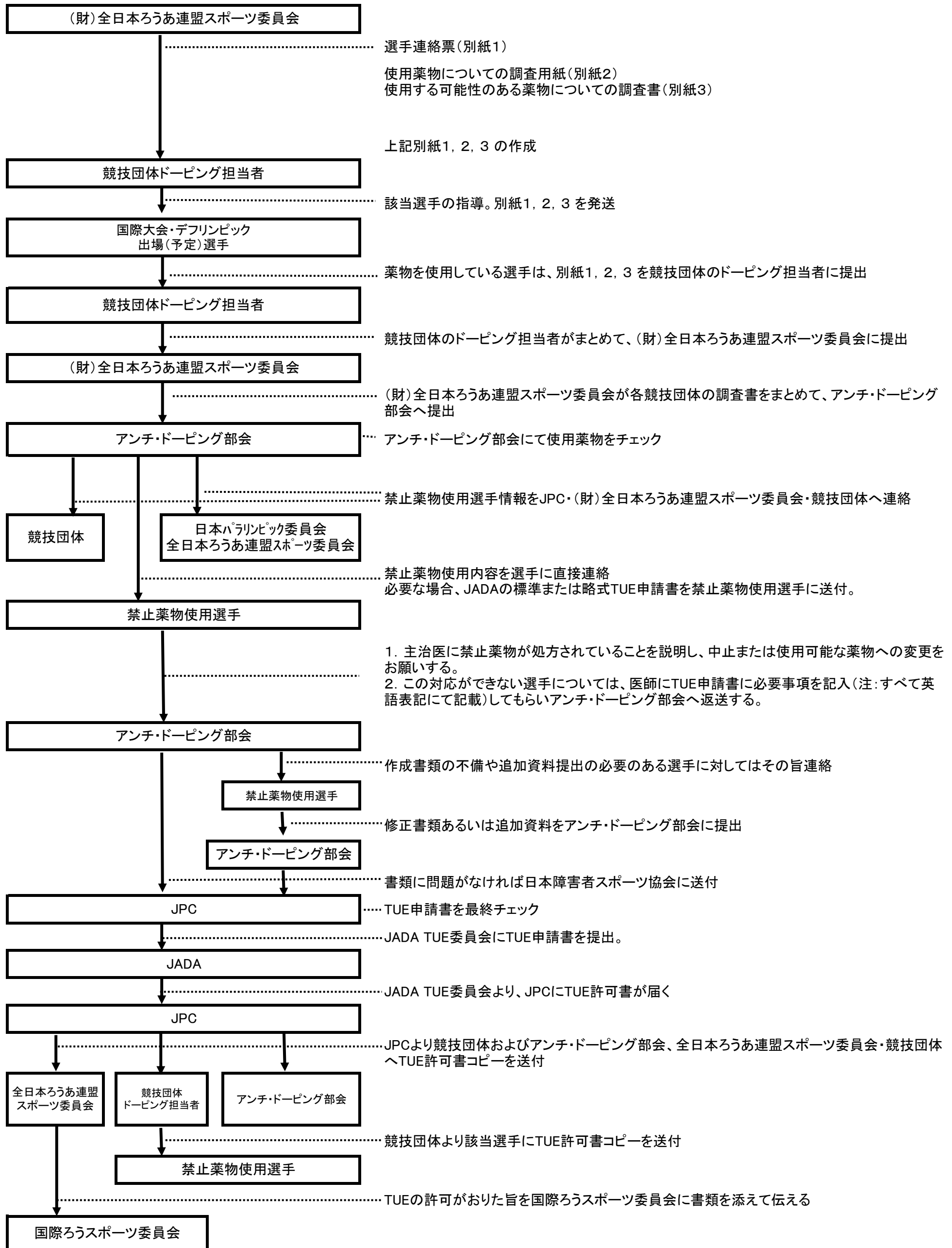
(財)全日本ろうあ連盟スポーツ委員会事務局 担当: 瀬川奈美
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
E-MAIL (segawa@jfd.or.jp)

◆お問い合わせは…

〒108-8329 東京都港区三田 1-4-3
国際医療福祉大学付属三田病院 リハビリテーション科
草野 修輔
(日本障害者スポーツ協会医学委員会 アンチ・ドーピング 部会長)
Tel: 03-3451-8121 Fax: 03-3454-0067
Email: shukusano@iuhw.ac.jp

選手への連絡は原則的に E-mail で行いたいと思いますので、メールアドレスをお持ちの選手は忘れずに E-mail の欄にアドレスをお書き下さい。メールアドレスのない選手につきましては、必要に応じて他の手段(ファックス、郵送など)でご連絡致します。

<日本アンチ・ドーピング機構(JADA)・TUE委員会への治療目的使用の適用措置(TUE)申請の手順>



選手連絡票

ふりがな			
選手氏名			
性 別	男 ・ 女	生年月日	昭和・平成 年（西暦 年） 月 日 （満 歳）
競技名			
住 所	〒 ー		
障害内容 （あれば合併症）			
電話番号		FAX番号	
携帯電話		E-mail	
職場名称			
職場 電話番号			
日中連絡が 取れる電話番号			

使用薬物についての調査書

欄が不足する場合はコピーしてお使い下さい（2枚以上になる場合は番号をつけて下さい）

ふりがな 氏 名	
競 技	

現在使用している薬品についてご記入ください（内服、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射※、座薬等、あらゆる薬品についてお答えください）。

例：薬品名	SM 散
例：使用量（1 日 or 1 回）	3g（1 日）
例：使用方法（○を）	内服（ <u>常用</u> ・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
例：使用理由	消化を助けるため。
薬品名	
使用量（1 日 or 1 回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1 日 or 1 回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1 日 or 1 回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1 日 or 1 回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	
薬品名	
使用量（1 日 or 1 回）	
使用方法（○を）	内服（常用・頓用）、吸入、点耳、点鼻、点眼、塗布、湿布、注射、座薬
理由	

※注…注射での薬物使用の場合には、関節内注射か筋肉内注射かの別についてもお書き下さい。

原田さん(谷)日本選手団主将

米国ソルトレークシテ
イで二月一日に開幕する
聴覚障害者のオリンピック
「第十六回冬季デフリ
ンピック」で、前大会ア
ルペンスノーボードの金
メダリスト原田上(のぼ
る)さん(三〇)塩谷町、
会社員が、日本選手団
の主将を務めることにな
った。本県からは原田さ
んを含む四選手が出場
し、都道府県別の選手数
は東京都と並んで最多
だ。原田さんは主将とい
う大役に加え、連覇の期
待を背に「初出場の選手
を支えながら、全員で素
晴らしい結果を残した
い」と意気込んでいる。
日本選手団は今大会、
アルペンスノーボードな
ど四競技に計十七人が出

来月の聴覚障害者・冬季デフリンピック

場する。全日本ろうあ連
盟による選考の結果、本
県からはアルペンスノー
ボードに原田さんと大田
原市、会社員原伸一さん
(三三)、小山市、同原節子
さん(三三)、クロスカント
リースキーに大田原市、
同喜井寛さん(三三)が選
ばれた。
原田さんは二〇〇三年
のスウェーデン大会に初
出場。冬季大会で日本初
の金メダルを獲得した。
アルペンスノーボードは
今大会、二回の滑降タイ
ムを競う従来の方式から
トナメント方式になる
ため「上の敵となるが、
いいタイムを出したい」
という。
ほかの本県三選手は今
大会が初出場。原田さん

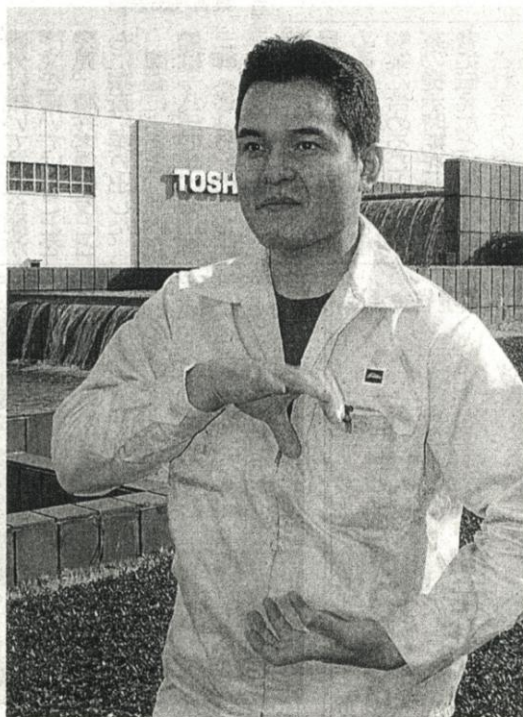
アルペン スノーボード 連覇へ健闘誓う

は同じ競技の二人と練習
をともにしながら「落ち
着いて頑張れば大丈夫」
とアドバイスしている。
喜井さんとは競技は違
うが、同じ大田原市内の会
社に勤務しており、励ま
し合っているという。

原田さんらは昨年、米
国での強化合宿にも参
加。聴覚障害は体の平衡
感覚を保つのが難しいと
いわれ、「バランスボー
ル」などを利用した訓練
も取り入れた。

都道府県別の選手数が
最多となったことにつ
いて、全日本ろうあ連盟は
「栃木には聴覚障害者が
働いている企業が多く、

「ソルトレークは標高が高く、スタミナが必要」と手話で語る
原田さん(左)勤務先の大田原市、東芝メディカルシステムス



スキー場も多いなど立地と期待する。選手団は三
日に出発。大会は四月に一度開かれる。
「栃木には聴覚障害者が働いている企業が多く、
国の人にはデフリンピックのことも知ってほしい」
運営する聴覚障害者の国
際第2次大戦後に本格化
した身体障害者のパラリン
ピックより歴史が古い。
聴覚障害者はパラリンピ
ックに参加していない。

Q&A

本県から計4選手が出場

原田さんは「身体障害
者のパラリンピックは有
名だが、これを機に、全
国の人にデフリンピック
のことも知ってほしい」
運営する聴覚障害者の国
際第2次大戦後に本格化
した身体障害者のパラリン
ピックより歴史が古い。
聴覚障害者はパラリンピ
ックに参加していない。



笠井さん（新得）が金

デフリンピック女子スノボ回転

米国ソルトレークシティで開催中の聴覚障害者の冬季体育世界大会「第16回冬季デフリンピック」で7日、聴覚障害者看護老人ホームやすらで優勝を決めて喜ぶ笠井さん（7日、米国ソルトレークシティ。全日本ろうあ連盟提供。岸田修さん撮影）

同大会出場2回目、念願の金メダルを獲得した。笠井さんは予選を2位で通過し、決勝トーナメントへ進出。世界の強豪を次々と破り、頂点に立った。笠井さんは4日の同大会でも4位に入賞

している。笠井さんは全日本ろうあ連盟を通じて「優勝しても夢を見ているような気持ちでしたが、表彰台に立ってやっと実感がありました。本当にうれしいです。」とコメントした。

ボートの男女パラレル回転が行われ、女子は笠井選手（31）が金メダルを獲得した。現地の日本選手団から北海道新聞社に



笠井彰子選手

冬季デフリンピック

八日、連絡が入った。冬季大会では、道内勢初の金メダル。長に、笠井選手のほか、アルペンスキーの水口拓也選手（三好）男子でも原田上選手（三好）が優勝した。原田上選手は四日の同競技パラレル大回転に続き、二個目の「金」。今大会、日本は金メダルが計三個となり、冬季大会では過去最高のメダル数となった。大会は世界二十二カ国から選手六百人以上が参加し、一日開幕、十日までの期間中、アルペンスキーなど五競技を行う。日本からは、選手十七人と役員計三十九人が参加している。

夢を見ているよう

笠井選手の話。優勝しても夢を見ているような気持ちでしたが、表彰台に立ってやっと実感がありました。本当にうれしいです。

新得の笠井選手（スノボ）が金

米国ソルトレークシティで開かれている聴覚障害者の競技会、冬季デフリンピック大会で七日、アルペンスノー

八日、連絡が入った。冬季大会では、道内勢初の金メダル。長に、笠井選手のほか、アルペンスキーの水口拓也選手（三好）男子でも原田上選手（三好）が優勝した。原田上選手は四日の同競技パラレル大回転に続き、二個目の「金」。今大会、日本は金メダルが計三個となり、冬季大会では過去最高のメダル数となった。大会は世界二十二カ国から選手六百人以上が参加し、一日開幕、十日までの期間中、アルペンスキーなど五競技を行う。日本からは、選手十七人と役員計三十九人が参加している。

平成 18 年度日本パラリンピック委員会強化事業
障 害 者 競 技 ス ポ ー ツ 強 化 事 業
第 16 回冬季デフリンピック 報 告 書
～ ソ ル ト レ ー ク 2 0 0 7 ～

2007 年 3 月 30 日 発行

発行 財団法人日本障害者スポーツ協会

財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会

印刷 藤原印刷株式会社

独立行政法人福祉医療機構（障害者スポーツ支援基金）助成（事業）

※各記事・写真等は発行元へ転載手続きをしたうえで掲載しております。

